
「禁じられた果実達」

伽白木 唾美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「禁じられた果实達」

【Nコード】

N2118H

【作者名】

伽白木 啞美

【あらすじ】

木下理香は、兄・木下魁人と禁じられた一線を越えていた。魁人は理香を1人の女として愛しているが、理香は魁人を兄としか見れなかった。理香はこの関係を終わらせるために県外の高校に行き寮で暮らす事を決意するが――……。 「逃げられない」の続編(?)です。先にそちらを読まないといけないかもしれません。 「歪親」の話は特にグロいので無理の方は飛ばしてもらった方がよろしいと思います……。 多分それでも読めると思います(´・`・´)

「1」事実

お父さんの言った衝撃的な事実を私は信じられなかった。

お母さんは呆けていて心ここにあらずだった。

でもお父さんの言った事が事実なら、私達なんかよりお母さんやお父さんの方が信じられない事をしているはずだ。だからお母さんが呆けているのは変な気がする……。

お兄ちゃんを見ると、やっぱりお兄ちゃんもその事を知らなかったみたいで、驚いた表情をしていた。

この場で普通でいるのはお父さんだけだった。でもそれは当然なのかもしれない……。

だってお父さんは私達の関係をはじめから知っていたし、自分の方がもつとすごい事をしていたのだから……。

「……それ、本当？」

思考回路がなんとか正常に戻ったお兄ちゃんがお父さんに問う。

「俺のオヤジ……、お前の爺さんに聞けば分かるんじゃないのか？
なんならDNA鑑定でもするか？」

「……いや、いい。そもそもそんな嘘つく必要ないしな」

「……」

「は……っ、じゃあ、これはなんだ？血か？」

「さあな……」

「ははははっ！」

お兄ちゃんは狂ったように笑う。

「じゃあ文句ないよな？」

それは、私達が兄妹でありながら肉体関係を持つ事……。

「ああ。ただし、子供は生むなよ？」

「……分かった。さすがに奇跡はもう起こらないだろうしな」

何を言ってるの……？話についていけない……。

「お兄ちゃん……」

勝手に話を進めないでよ……。話についていけないよ。

「よかったな。もうこそこそしなくていい。家で堂々といちゃつける」

そう言ったお兄ちゃんの顔は本当に嬉しそうだった。

でも、私は――。

「だめよ……」

そう声を発したのはお母さんだった。

「あなた達には間違えた道を歩ますつもりはない！」

「何言ってるの？母さん。そんな事言える立場なの？」

「……っ！分かってる。そんな事言える立場じゃないって事ぐらい。でも私は、あなた達を幸せにする義務がある……！」

「……母さんは今、幸せじゃないのわけ？」

「それ、は……」

お母さんは言葉に詰まった。

幸せじゃないなんて答えられるはずない。だってそれを言っしまえば、私とお兄ちゃんを生んだ事を否定する事にもなるから。

「ならいいだろ？」

「……っ」

お母さんは悔しそうに顔を歪めた。

「鈴香、諦めろ。こいつは俺に似たんだ。何があっても俺が鈴香を手放さないように、魁人だって理香を手放さない。分かるだろ……？」

「……分かった」

お母さんはあまり納得していないようだった。

その日はそれで幕を閉じた。

お母さんとお父さんが出て行った後、続きをしようなんて気分にはとてもなれなかった。お兄ちゃんはしたがったけど、今日はいろいろあつて疲れたと嘘をついて、お兄ちゃんに自分の部屋に戻ってもらった。

その日私は一人で興奮したまま眠れない夜を過ごした。

未だに信じられない……。

自分達の出生の秘密を知って、今まで信じていた根本が覆ったかのような感覚だった。そもそも私達の存在が罪なのだから……。

「そんな事実……知りたくなかったよ」

その次の日から、お兄ちゃんとは親がいても堂々とキスをしたりボディタッチするようになった。

そしてお兄ちゃんが私を抱く回数も多くなった気がする……。

お兄ちゃんとするのは気持ちいい。そのまま快楽に溺れて堕ちてしまうような感覚に陥る。でも私はあの事実を知ってから余計にお兄ちゃんに抱かれることに抵抗を感じるようになった。普通に考えたら、逆のはずなのに……。

そんな私達の変わりようにお父さんは気にしていないけど、お母さんはそんな私達から目を逸らした。

どうして目を逸らすの？自分達だって同じ事してるのに……。

私はお母さん達を恨むようになった。

どうして私達を生んだの？私達は罪を犯すために生まれてきたの？私はこんなふうになりたくなかったのに……。

人の事を言えないのは分かってる。……でも両親を穢らわしいと思わずにはいれなかった。

もともとお母さんとは仲が良かったけど、私はお母さんと話さなくなつた。お父さんとはもともとあまり話してなかったから別に変化はなかったけど、明らかにあの事実を知ってから家の中はギクシヤクシだった。といっても変わったのは私とお母さん。お父さんとお兄ちゃんは相変わらずだった。

お母さんは私に何か話しかけたそうだったけど、私は無視した。お母さんと話したくなかった。

でもある日、お兄ちゃんは用事で家を出て、お父さんは仕事に行つて、お母さんと私が2人の時がきた。

私はお母さんと2人きりになりたくなかったからすぐに家を出ようとした。

「理香っ！」

「……何？」

すごく低い声で自分でも驚いた。今まで、お母さんにそんな声を出したことはなかった。……お母さんが好きだったし優しくて怒られたことがなかったから、喧嘩した事なんてなかったから。

お母さんは傷ついた顔をしていて、胸がチクリと痛んだ。

でもお母さんはすぐに真剣な顔になった。

「大切な話があるの……」

大切な話……？

「……分かった」

本当はそう言っつもりはなかった。でもお母さんの顔があまりに真剣だったからそう言ってしまった。

部屋に入ると、お母さんは正座をして、唇を噛み締めていた。

重苦しい空気が漂っていてそれに耐えられず、自分から口を開いた。

「大切な話って……？」

「……短刀直入に聞くけど、理香は魁人を愛してないでしょ？」

「2」兄妹愛

お母さんのその言葉に思わず目を見開いた。

「……っ」

……凶星、だった。

「やっぱり……」

お母さんは知っていたの？私がお兄ちゃんを愛していないって事を――――。

お兄ちゃんの事は好きだ。でも……それは兄としてだった。

体を重ねたら恋愛感情を持つんじゃないかって思ってた。でも私は、お兄ちゃんに特別な感情を抱けなかった。いつまでたってもお兄ちゃんはお兄ちゃんのままだった。

いくらお兄ちゃんが望んでも、私はそんな感情は沸かなかった。

「どう、して」

なんで分かったの？

お兄ちゃんを失いたくなかったから、私なりにちゃんと恋人のようにお兄ちゃんに接したつもりだった。

「見ていれば分かる……。それでも理香に母親だから。理香……、私は、あなたは魁人の側にいるべきじゃないと思う……。理香だって本当はそう思ってるんじゃないの？」

「……」

何も言い返せなかった。だってそう思っていたから……。

「理香が……魁人を愛しているなら、目を瞑ったけど、でもそうじゃないなら理香は魁人から離れるべきだと思う」

確かに離れたいと思っている……。このままじゃいけないって。

私は……堕ちたくない。

お母さんなんかより私の方がもっと酷いことしてる。

……だって、お母さんとお父さんは愛し合って罪を犯した。でも私はお兄ちゃんを手放したくないってだけで肉体関係を持ってしまう

った。

私の時にお兄ちゃんの方から迫ったみたいに、お父さんの方からお母さんに手を出したんだろうという事は分かる。お父さんのお母さんへの愛は盲目的だから……。でも、お母さんはその愛を嬉しそうに一心に受けている。キスをされれば、照れながら嬉しそうに笑うところなんかは中学生みたいな純粹さすら感じる。

私はもう、その純粹さ無くしてしまった……。

「私と違って、理香ならまだ引き返せる……。魁人から離れる勇氣があるなら、私がなんとかするから……。理香はどうしたい？」

それはもちろん……。

「お兄ちゃんから離れたい。でも……」

そんな事をしたら、お兄ちゃんは絶対にお母さんを許さない……。お母さんがどんな目にあうか……。

お兄ちゃんの愛は純粹な愛じゃない、狂気を孕んだ愛だ。もし私を逃がそうしたらお母さんもただではすまない。

「お母さんはどうなるの……？」

自分の気持ちを優先したら誰かがきつと傷つく……。

「大丈夫よ」

そう言ってお母さんは笑った。その笑顔は私を心配させたくなくて言っているのではなく、本当に大丈夫そうだった。

「お母さんはお兄ちゃんを分かってない……！」

お兄ちゃんが怒ったら……。考えただけで怖くなった。私には絶対に見せないお兄ちゃんの怖さ。それを見てしまった事があった。

「分かってないのは理香よ。確かにそんな事したら魁人は私を許さないだろうし、暴力をふるうかもしれない……」

「だったら！」

分かっているならどうして……！

「魁人が理香を離さないで守るように、私には隼人がいる」

お母さんは複雑そうな顔でそう言った。

「あ……」

確かにお父さんなら、お兄ちゃんより1枚も2枚も上手だ……。

そして何より、お父さんはお母さんを傷つける者を決して許さない。だからお母さんは必然的に守られる。

「だから安心しなさい」

確かに安心出来る。

「……お母さんは、お父さんと結婚して幸せだった？」

ずっと気になっていた事だった。でも怖くて聞けなかった。

「……幸せよ」

そう言ってお母さんは目を伏せた。

「でも……、後悔した事も沢山あった」

「……」

「理香は何回か、おばあちゃんに会った事があるでしょ？」

確かに数回だけだけど、会った事があった。おばあちゃんは私が物心ついた時から病院にいて、私を見ると”鈴香っ、鈴香っ”とずっと呼んでいた。そして魁人を見ると暴れ出して、”殺してやるっ、殺してやるー！”ってずっと叫んでいたのを覚えている。

大きくなってから、おばあちゃんがいるのは精神科の病院だと知った。昔、とても辛い事があって心が壊れてしまったのだと――――。

孫なのに、ずっと私を娘の名前で恋しそうに呼んでいて、お兄ちゃんに憎々しそうに叫んでいたおばあちゃん。

「お母さんがああなってしまったのは私のせいなの……」

「え……」

「私はお母さんを何度も裏切った……」

「……」

「お母さんは隼人を恨んでる……。お母さんの中では、隼人は娘をたぶらかした憎むべき息子になってるの。だから隼人に似た魁人を隼人と勘違いして、ああやって暴れるの……。お母さんは私達の関係に気づいてすぐにお父さんと離婚したの……。私はお母さんを憎んだ。隼人と引き離されて、……お腹にいた子も無理やりおろされ

たから」

そう言ってお母さんは言葉を切った。

私達の他に妊娠してた子がいるなんて知らなかった……。それに
おろしたという事実が衝撃的だった。お父さんの性格から考えて、
お母さんの悲しむような事はしらないと思っていた。だからお父さん
のそんなミスをしたのも信じられなかった。

「最低だっと思う……？」

何も言えなかった。私のように罪の証として生を受けるか、まだ
生を受けたか受けていないのか曖昧なまま葬られるのか。どちらが
幸せかなんて分からないから。

「……分からない」

「そう……」

もし私がお兄ちゃんの子供を身ごもったらどうするだろう……？
考えるだけで怖い。命の生死を決断できる権利も度胸もない。

「お母さんは……おろした事をどう思ったの？」

お母さんは少し考えてから口を開いた。

「……私にも分からない。あの時は生みたいって思った。でもこの
歳になって冷静に考えると、お母さんの気持ちがよく分かる。高校
生だった私がもし生んだとしても、1人でちゃんと育てられたか分
からない。……それに、もし生まれた子が重い奇形を持っていたら
……多分私自身も参っていたと思う。きれいな事だけで子供は生めな
い。その子を幸せにするどころか自分まで不幸になる事だってある。
そしてそれを子供のせいにしてしまいそうで、それが一番嫌」

きれいな事だけでは子供は生めない……か。

確かにお母さんの言い分もあっていると思う。でもそれに正解な
んて物は存在しないんだろう……。

「もし理香が妊娠したら、無理維持はしないけど、おろすように言
うと思う」

「……」

お母さんとしての立場と当事者の立場では、全然考え方が変わる

のかな……。

お母さんはあくまで将来を見通して冷静に考える。当事者はその場の感情が先に動く。それがどうこうとは思わないけど……。

「後悔したのはそれだけじゃない。私が隼人を選んだ時、お母さんだけじゃなく友達も無くした。親しかった人、そうじゃない人、いろいろな人を私は騙した。すごい罪悪感にさい悩まされた。みんなが私じゃないお墓の前に手を合わせて涙を流すの……。それが耐えられなかった。死んでいないのに死んだなんて嘘つくなんて、きつと一番酷い嘘だと思う。私は死んでいるってみんなに認識されて、どんどん忘れ去られていく。最後に残ったのは隼人だけだった」

全て捨ててまでお父さんを選んだんだ……。お母さんもそれだけお父さんを愛していたという事。でも私はお兄ちゃんのためにそこまで出来ない。

「私は……。そこまで出来ないよ。お兄ちゃんは大切な人だけど、お母さんがお父さんを絶対的存在であるみたいに、私にとってお兄ちゃんが絶対的な存在じゃない」

「そうね……。だからこそ理香なら引き返せる。後はお母さんに任せなさい」

思わず涙が出た。

私は本当にここから抜け出せるんだろうか……。

「3」鳥籠

お母さんが提案したのは、県外の全寮制の高校に行く事だった。もちろんそれがばれないように、地元の高校を併願で受けてそれを専願と思わせる事。

何より心強かったのは、お母さんがお父さんに協力してもうよう説得してくれると言った事だった。

多分お父さんはお兄ちゃんの気持ちが分かるから反対するだろうけど、結局はお母さんに逆らえないのは目に見えている。これを惚れた弱みというのだろう。

「高校まで我慢出来る……？」

「うん！」

お兄ちゃんから離れる……。それは嬉しくもあり安心するが、寂しくもある。でも離れたいという意識の方が大きいのは確かだ。

その日から私は勉強を頑張った。もし落ちたらせつかくのチャンスがふいになる。それだけは嫌だったから。

お母さんとは表向きあまり喋ってない。いきなり喋り出したらお兄ちゃん何か気づくかもしれないから。

「最近勉強頑張ってるな」

「……うん。受験生だから。でもお兄ちゃんの方が頑張ってるじゃん」

大丈夫、ばれるはずない。だってお母さんもお父さんも私の見方なんだから……。

「お兄ちゃんと同じ高校行きたいなって思っで。多分無理だと思うけど……」

それは嘘。絶対に県外の高校に行く。

「そうか。理香はかわいいな。でももう俺も卒業だぞ」

そう言ってお兄ちゃんは後ろから私を抱き締めた。

「お兄ちゃ、ん……っ、んんっ」

私を虜にするような甘いキスをされた。

顔が離れると、本当に嬉しそうな顔をしていて嘘をついたことに罪悪感を感じた。

「理香がいるなら留年してもいいかな……」

「ダメだよ……っ」

そう言っで頬を膨らませたら笑われた。

こんなぶりっこみたいな事お兄ちゃんにしかない。それだけお兄ちゃんに甘えている自覚はある。

何も知らない人から見たら、仲のいい恋人同士に見えるのかな……？

こんなに愛してくれているのに私はお兄ちゃんの気持ちに答える事は出来ない。ごめんなさい……。

「理香？どうした？」

「え……」

頬に温かい涙が伝っていた。

「な、何でもない」

私は涙を拭って、お兄ちゃんに笑顔を向けた。

私は自分の本当の気持ちが高なのか分かつてる。これは同情……。私を想ってくれているお兄ちゃんを見る度に、私はお兄ちゃんを振り払えなくなっている。ここまで愛してくれているお兄ちゃんに申し訳ないのだ。

そんなに愛おしそうに私を見ないで……。決心が鈍ってしまふ。

「お兄ちゃん、今……幸せ？」

「ああ。理香……ごめんな」

「え？」

「俺の独りよがりの思いを押し付けて。理香が苦しむ事分かつてたのに……俺は自分の気持ちを抑えられなかった。最低な兄貴だよな」

「……っ。そんな事ない！そんな事言わないで……っ！」

私はとても残酷な事言ってる。
そんな事を言われても同情しかわかない。

私はこんなに苦しんでいるお兄ちゃんを突き放そうとしてる。”
私も一緒に堕ちてあげる。ずっと一緒にいてあげる” そう言えない。
どんどんお兄ちゃんと過ごす日が減っていく。その度寂しくなっ
て泣きそうになる。

家族と離れてしまうからというのもある。でも1番の理由はお兄
ちゃんにもう会えないから。ここを出たら、もうお兄ちゃんには会
わないと決めてる。

「親愛の入試は併願高の結果の後だから、怪しまれないと思う」
「分かった」

もう併願高の入試が1週間前に迫っていた。

「やっぱりお兄ちゃんと同じ高校は無理だよ……」

「いや、もしかしたら受かったかもしれないぞ？」

結局私は自分のレベルに合った高校を選んだ。

女子校にして欲しいというお兄ちゃんの願い聞かずに、男女共学
の高校を受けた。

実際に行くつもり的高校はたまたま女子校だったから、ある意味
お兄ちゃんの願いは叶ったのかもしれない。

併願高の入試は、とてもプレッシャーを感じて緊張でガチガチで
受けたがら不安だったけど、ちゃんと合格していた。一応念のため、
特進を受けて滑り止めもしていたけど、滑り止めで普通科に行く事
もなかった。

それを誰よりも喜んでくれたのはお兄ちゃんだった。それを見て
また罪悪感が募った。私はお兄ちゃんを騙しているんだ――そう実
感した。

結果が出たら次の日、私は親愛に言って入試を受けた。

以外と落ち着いて筆記試験が出来て、面接もうまくいった。

お兄ちゃんにばれないように合格通知をポストから取って、お母

さんと2人で喜んでいた。

「これからは何でも1人でしていけないといけないの。今まで理香は魁人にべったりで甘えていたけど、そうはいかない……。もう魁人に会わないって決意したのはいい事だと思う。お金はちゃんと援助するから安心しなさい。心細くなったり、困った事があればすぐに連絡しなさいね。すぐに行くから……」

そう言ってお母さんは言葉を詰まらせた。

「……っ。本当は、もっと側に、置いていたかった……。っ。こんなに早く、別れる、事、に、なるなんてっ」

「お母さん……」

お母さんが泣いているのを見て、私も泣き出してしまった。

「今生の別れじゃないんだよ……。？」

でもお兄ちゃんと再会しないようにしようとしたら、必然的にお母さんにも会わなくなる。

「理香、ごめんね。こんな辛い思いさせてしまって……」

「私こそごめんなさい。わがまま聞いてもらって……」

そう言っとお母さんは首を振った。

「理香は何も悪くない……。悪いのは私達だから」

お母さんは自分を責めている。お母さんのせいでもないのに……。

「お母さんのせいじゃないよ。これは仕方のない事だったんだよ」

そう言っとお母さんを励ました。

どっちが親か分かんないや。そう思いながら苦笑いした。

「後悔なんてしてないよ。これでよかったって思ってる。お母さん

……、今までお世話になりました」

「……っ」

さっきまで治まっていまのに、お母さんはまた泣き出した。

「もっと、たくさん、母親らしい事、してあげたかった……。っ。ご

めん、ごめんね……」

私達はお互いに抱き合った。

この家にいれるのは後少し……。っ……。

そしてとうとうその日が来てしまった。

お兄ちゃん私の様子がおかしい事に気づいて、何があっただと聞いてきたけど、何もないと嘘をついた。お兄ちゃんは納得していなかったけど、それきり問い詰める事はなかった。

お兄ちゃんには相変わらず抱かれていたけど、以前とは違う切なさを感じた。それは恋愛とは違う感情だけ……。

「理香、時間よ」

「……うん」

今は深夜でお兄ちゃんは寝ている。

起きたらどんな反応するのかな……。

夜逃げのようにここを去っていく私を許して……。

これは自分のためにであると同時にお兄ちゃんのためでもある。

最後にお兄ちゃんの顔が見たくて、お兄ちゃんの部屋にそっと入った。そこには安らかに眠っているお兄ちゃんがいた。

「……っ。お兄ちゃん……」

兄として好きだった。兄として愛していた。

「理、香……」

お兄ちゃんが起きてしまったのかと思って焦ったけど、寝言で言っているだけだった。

「大好きだよ……」

そう言っただけ自分の顔をお兄ちゃんの顔に近づけた。

自分からしたのは初めてかもしれない。そう思いながらキスを落としました。

――唇ではなく額に。

それは自分が兄として好きだという証だった。

今までお兄ちゃんに名前と呼んで欲しいと言われても呼べなかった。それは私の中で、お兄ちゃんはいつまでもお兄ちゃん、” 魁人 ” という1人の男として見られなかったから。

「さようなら、お兄ちゃん……」

そう呟いて、部屋から出た。

ーバタン

それは自由を求めた鳥が鳥籠から出た瞬間だった。

「4」新生活

寮に最低限必要な物だけは持つていって、後から他に必要な物を送ってもらう予定だ。

「広さってこれぐらいが普通なのかな……」

外観は幽霊が出るんじゃないかってぐらいボロかったけど、大切に使っているのか中は思ったよりきれいだった。

部屋は8畳で小さなキッチン。そして2段ベッドが置いてあるだけだった。

そう、この寮は2人部屋。まだルームメイトは来てなくて、ほっとしたような残念だったような……。なんにしろ、ルームメイトは1年間は絶対同じらしいから仲良くしたいな。

お母さんは他のにしたらうって言ったけど、1番安いのがここだったからここを選んだ。

「ふうー」

入寮してから寮の説明とかしてくるらしいけど、全部自分でしないといけないっぽいな……。

朝晩のご飯は作ってくれるけど、洗濯とか掃除とか家事は自分でしないといけないのか……。しかも土日は自分でご飯を作らないといけないらしい。これから大丈夫かな？

期待と不安が入り混じった1日目が過ぎた。

その日は、ここが初めての環境だったからなかなか寝付けず、家族がいらないという事が寂しく感じられ知らない内に涙を流していた。

「お母さん、お兄ちゃん……会いたいよ」

起きた時はもう10時過ぎだった。

昨日ほったらかしにしていた部屋の荷物を整理しているとドアがノックされた。

コンコン

ルームメイトの子かな？

「はい」

ガチャ

「……えっ」

目の前にいる人が普通に考えると有り得ない人だったので、驚きを隠せない。

「あー、初めまして。木下さん」

そう言って私に笑顔を向けたのは、おじさんだった。

なんでこんな所にいるの？ここは男子禁制の秘密の花園（？）のはず……！という事は不法侵入？いかにも怪しいおやじだしありえるっ！嫌だっ、こんな奴にいいようにされたくない！

「変態ロリコンおやじ！」

私は近くにあった目覚まし時計を投げた。クッションも目に入っただけ、そんな手加減なんてしてる場合じゃないし、する義理もない！

「いてっ。何すんだよっ！」

それはこっちの台詞だ。こんな女子寮になんでこんなおやじがいるのよ！どうせ襲うなら、私じゃなくてもっとかわいい子がいるじゃん！なんで運悪く私の部屋に来たのよっ！

バン！！！！

ドアを思いっきり閉めた。

「い……っ！おい、開けるよ！」

どうやら手を思いっきり挟んでしまったようだ。でも私はドアを開けるつもりはない。もし開けてしまったら、何をされるか分かったもんじゃないっ！

「いい加減にしろ……」

低い声にビクツとして一瞬力を抜いた時だった。ドアがバタンと開けられた。

「あ……」

そこには怒りを現したおじさんがいた。

ただじゃすまない——そう感じた。

私どうなるの……？ やつとお兄ちゃんと離れて普通の生活が送れると思ったのに。こいつに……こんな訳の分からないおやじに犯されるの？

「変態口リコンおやじとはいい度胸じゃねえか……。俺が、おめーみたいなガキに立つかよ！」

え……？

私はおなじの顔をまじまじと見た。

「なんだよ、その目は。俺はな、お前を見張るために来たんだよ」
未だ話が飲み込めない。意味分かんない。

「はあ……。俺は親愛の教師だ」

おやじはかつたるそうにそう言った。

「……へ？」

親愛の教師……？ でもなんで？

「お前、話聞いてないのか？ 寮のおばちゃん達が旅行行くから留守は親愛の教師が監督につくって言ってただろうが」

「あ……」

そう言えばそんな事言ってたような……。でもそれが男なんて聞いてないし！

「お前がこんなに早く寮に来なきゃ俺だってこんなに面倒な事しなくてよかったんだよ！」

「は……？」

何この言い方……。それでも教師なの！？

「最悪……」

身の危険はなさそうだけど、こんな性格が悪い人と一緒なんて……。

「おい、さっきなんて言った？」

どうやら小さく呟いただけなのに聞こえたようだ。地獄耳……。
「なんでもありません」

本当はなんて言ったかなんて聞こえているはずだ。

「教師に向かつて何だその言い方は」

…… あんたなんて教師と思つてないから。

「スイマセン」

思いつきり棒読みだった。でも謝つたんだからもうほつといて。

「お前、性格悪いな」

あなたには言われたくないです。

「はいはい。もう帰つてもらつていいですよ？私1人でも平気ですから」

「…… かわいくねえな。俺だつて帰りたいのは山々だ。でもお前1人しかこの1号館にいねえからそうはいかねえだろ。他の館とも離れてるし」

「え…… っ！1人！？」

「気づかなかつたのか？他の奴らはあと2、3日しないとこないぜ？」

1人しかいないという事はショックだったけど、そんな事よりこんな奴と2人つきりつていう方がショックだった。

「やつぱり帰つて下さい。あなたと2人でいる方が身の危険を感じます」

「はあ、自意識過剰なんじゃねえの？俺の歳でお前みたいなガキを襲う奴なんてただの気違いだろ」

なんか…… ものすごく失礼な事言わなかった？このおっさん。華の女子高生に向かつてなんて事を……！普通の奴だつたら欲情するよ！そんなに私は魅力がないって言いたいのかつ！

「あんたの方がおかしいんじゃないですか？こんなかわいい子が無防備でいて何も思わないんですか？」

「どこにかわいい子なんているんだよ？何？襲つて欲しいわけ？何が悲しくてお前みたいな貧乳女を襲わないといけないわけ？冗談は夢の中で言え」

ブーッチーン

何かが切れた音がした。

「貧乳だつて立派に生きてるの！あんたにそんな事言われる筋合い
ないよ！」

「……」

自分でも何言つてんだつて想うけど、口から勝手に言葉が出てく
る。

「こんな私を好きって言ってくれる人だっているんだから！」

「……」

「それにつ、それにつ！」

…… それに何だっけ？

「もう気が済んだか？」

そう言つてばかりにしたように鼻で笑つた。

なんなのこいつ……っ！むかつく、むかつくっ！こんなのが教師
なんて信じられない！

「取りあえず歸つて下さい。私は1人で大丈夫なんで」

バン！

今度こそ何も挟まないで閉めれた。

「おいっ！」

ガチャン

鍵を閉めてもう入つて来ないようにした。

「わざわざここまで来てくださつてありがとうございます。じゃあ、
さようなら」

どうかこの変態教師とは関わりがあまりないように願おう。

しばらくはドンドン叩いていたけど、少ししたら諦めてドアの前
から離れていった足音がした。

「……他の先生もあんなに偉そうなのかな？だったら嫌だなー」
はあとため息をつく。

それにしても、私以外誰もいないなんて……。

早めには来たと思つてはいたけど、違う学年の人がいると思つて
たのに……。

お母さんはギリギリまで家にいて欲しいと言つたけど、私がすぐ

家から出たいとお願いしたのだ。

これ以上お兄ちゃんと一緒にいるのが辛かったから。お兄ちゃんを裏切る、という思いで胸が押しつぶされそうになって、何度こっそり泣いて謝った事か……。それなのにここにいるとお兄ちゃんに会いたくなる。

矛盾してるなあ……。堕ちたくはないけど、側にいたかった……。仲のいい兄妹として――……。。

でもそれが叶わない夢だって事も分かってる。普通がよかった。

どう歯車が狂ってこんな事になったの……？

いや、そもそもの間違いは私達が生まれた事が――……。。

「5」接点

「……似てるな」

思い出すのはあの生徒とよく似た女の人。女の人と言ってもまだ高校生ぐらいの幼い顔だった。

『本当に愛していた……』

そう語っていた若い父を思い出す。

結婚を直前に死んでしまった父の愛した人。自分が幼い頃写真で見せてもらった事があった。その人とあの生徒は似ている。

「木下か……。そう言えばそんな名字だった気がするな」

狂っていたらしい母と温厚で優しい父。すぐに別れたのに、どうして2人が結婚したのか……。

聞いた話によると、俺を盾にとって結婚を迫ったらしい。俺は望んで生まれてきた子ではなかった。

「それにしても生意気な女……」

自分の態度も反省するべきだと思うが、教師をいきなり変態と勘違いしたのに謝らないとはどういう事だ。

ついイライラしてポケットからタバコを取り出す。

「うわっ、ひっでー」

自分の右手の指は赤紫になっていた。

「少しぐらい手加減しろよ……」

火を付けてタバコを吸う。

「ふうー」

気にならないとは言えば嘘になる。今は亡き父が愛した女がどんな人だったのか。あの生徒の親戚とかそののかもしれない。多分あの生徒と関わりがあるはずだ。

「校長に頼んでみるか」

親愛の校長はこの男にとっての父方の伯母であり、また幼い頃に引き取ってくれた育ての親だった。

「あ……。ご飯ないじゃん」

昨日は朝はパンでお昼はお母さんが作ってくれたお弁当だった。昨日の晩御飯と今日の朝ご飯は寮のおばちゃん達が親切にわざわざ作ってくれた。そしてお昼ご飯は食べるの忘れてた。

冷蔵庫を見るが何も無い……。即席の食べ物も何もなかった。

「コンビニ行くか……」

確か近くにコンビニがあったと思う。あいつに会わないかな……。多分いるだろうな。

ドアをそつと開けてあの男にはれないように部屋を出た。

本当に誰もいないみたい……。昨日は部屋の片付けに終わっていたから全然気づかなかった。

そつと歩きながら寮を出ていこうとしたその時……。

「どこに行くんだ？」

声が出た方を向くと、不機嫌そうな顔をしたおやじがいた。

「げっ」

「げってなんだよ、げって」

小さく言ったのにやっぱり分かったようだ。この地獄耳……。

「コンビニ行くんです。何か文句ありますか？」

「じゃあ俺のも買って来てくれ。弁当とピースのライト、それとアサヒの……」

「ちよつと、なんで私があんたの物まで買って来ないといけないん

ですか？それに未成年にタバコとかビールなんて売ってくれるわけがないじゃないですか！」

教師のくせに生徒にタバコとか買わせようとするなんて奴なの！？

「まあ、大丈夫だろ。ほら、お小遣いあげるから、な？」

お小遣いつて……。私をばかにしてるの？そんなんで行くわけないし！

「嫌です！それならあんたが買つて来て下さいよ！」

「ああ？いいのかそんな態度で？成績どうなつてもしらねえぞ？」

「あんたに教えてもらうつもりはありませんから！」

自分でしててなんだけど、なんか……。小学生の喧嘩みたい。

「なんだと？お前、絶対俺が教える事になるからな。その時覚えとけよ？」

「はいはい」

なんの教科の担当かは知らないけど、ここは結構大きい学校だから可能性としては低いと高をくくってる。

「しゃーねえ。じゃあ一緒に行くか」

「え！？」

「何が”え！？”だ。俺も行くつもりだったんだから仕方ねえだろ？」

言われて見ればそうだけど……。でもさ……。

「援交みたいに見えるかもしれないよ？」

これは本当にそう思った事だった。私は15歳で、多分こいつは30歳ぐらいと思う。顔が全然似てなくて年が倍近く違った2人が歩いていたらかなり変だ。

「はあああ？」

「だってそうじゃん。顔全然似てないし、年が2倍ぐらい違うし」

「……お前、俺が何歳と思ってんの？」

「え……。30ぐらい？」

「俺はまだ23だ！」

「えええ！？嘘！」

どう見たってそんなに若く見えない。

「相変わらず失礼な奴だな……。親の遺伝だから仕方ねえだろ？お前だって童顔じゃねえか。下手すりゃ、小学生にだって見えるぜ？」

「私だって親の遺伝です！」

そう、この童顔はお母さんに似たのだ。それがコンプレックスでもあるけど、将来はそのお陰で若く見えるから我慢する。お母さんはもうすぐ46歳になるけど、どうみたって30代にしか見えない。

「はあ、下手すれば親子に見えるかもしれないですね……」

それはそれで嫌だけど、援交よりはましかもしれない。

「冗談じゃねえよ。俺子供なんて多分出来た事ねえのに」

……多分？あえてそこは聞かないでおこう。

「私だってお断りですよ。本当のお父さんはあんなにかよりずつとかっこいいですから」

「お前の顔でそんな事言われてもなあ……」

そう言っで鼻で笑われた。

「私はお母さんに似たんです！」

「はいはい」

なんかもう疲れてきた……。

「信じなくてもいいです。コンビニには別々で行く、それでいいですか？」

ああ、はじめからそうしとけばよかった。

「……じゃあそうするか。お前が先行く？」

「そうさせてもらいます」

「あ、そうそう。この辺痴漢出るらしいから気をつけろよ。まあ、小学生みたいなお前を襲う奴はいないと思うけどな」

後半は余計だ！

ムカムカしながら寮を出た。

寮のおばちゃん達いつ帰ってくるの？早く帰って来て欲しい。あんな奴と一緒に空間にいると思うだけでストレスが溜まる……。

コンビニは本当に近くにあつてすぐに着いた。

ピンポーン

「いらっしゃいませ〜」

パンでいっか……。そう思ってメロンパンとチョコパンを取った。
あ、スイーツも欲しい……。でも2つとも菓子パンだしな。うーん、どうしよう。

私は決意を決めてレジに向かった。

「ありがとうございますた〜」

ピンポーン

「ふふっ」

結局菓子パン2つとスイーツを買ってしまった。

そう言えば、甘い物好きなのもお母さんに似たんだっけ……。そんな事を考えながら上機嫌で歩いていた。

コッコッ……。

え……。後ろに誰がいる……。？ 痴漢出るらしいから気をつけろよ”そう言っていたのを思い出した。でも……。気のせいだよね？
ピタ

後ろを振り返ったけど誰もいなかった。

やっぱり気のせいか……。

ほっとして走って寮に帰ろうとした瞬間……

「きゃっ」

いきなり誰かに後ろから抱きしめられた。

「はあ、はあ」

耳元で荒い息が聞こえて背筋が寒くなった。

こいつは痴漢だ……。っ！

抵抗しようともがいた瞬間、ナイフを顔に突きつけられた。

「あ、暴れるな。暴れたらさ、か、かわいい顔に傷がつくよ？」

そう言ってそいつは耳を舐めた。

気持ち悪い

気持ち悪い

気持ち悪い

気持ち悪い

気持ち悪い

全身に鳥肌が立つ。そいつの発する声、胸にふれようとする手。

全てが気持ち悪くて吐き気がした。

振り払いたくても恐怖で体が竦んで動けない。

「助けて……っ」

それは蚊の鳴くよくな細い声だった。

「ふふふっ。だ、誰も来ないよ？」

男の言う通り、ここは田舎でしかも人通りの少ない道。まだ薄暗くて完璧には暗くないけど、誰もこないような雰囲気だった。

男の顔を見ると、油ぎっしゅで肌はボコボコ。髪はヌルヌルしてそう那不潔っぽい髪だった。

誰か、助けてっ！なんで私がこんな目に……！こんな事になるならあいつと一緒に来ればよかった。

どんなに後悔してももう遅い。

悔しさとやりきれなさには私は唇を噛んで目を閉じた。

どんなに助けてと願っても誰も助けになんかこない。

こんな男に犯られるぐらいなら死んだ方がましっ！そう思っている自分がいるけど、本当に死ぬ勇気なんてない。

服のが脱がされていき、もうダメだと思った時だった。

「何してんだよ。おっさん」

声が出た方を見るといたのはあいつ。

助かったと思って体の力が抜けてしまった。

「な、なんだ！お前は！」

「はあ？それはこっちの台詞だ。何小学生に手を出してんだよ？」
そい言つて不敵に笑ったあいつ。

「……」

小学生って……。今度は怒りが沸いてきたかも。

「だ、誰だっけいいだろ！？き、君も殺されなくなかったら、ど、

「どっか行くんだ！」

そう言っただけ男は私から離れてナイフをあいつに向ける。

「そんなんで俺がくたばると思ってるの？」

そう言っただけあいつは男の方に近づいていき、暴れまくってナイフを振り回す男の腕を掴んだ。

「うううう」

カラン

ナイフが落ちてあいつは笑うと、馬乗りになって両腕を捻った。

「や、止めてくれっ」

「お前はどんなんだよ？あいつが嫌がった時止めたのか？」

「……っ」

「もっと苦しめよ……」

ギリギリ……

ボキッ

「あつ、折れちゃったかも……」

そう言っただけあいつは顔を歪めて笑った。

その顔が怖いと思った。本当に殺してしまいそうで……。

「も、もういいよ！」

私は慌てて止めにはいった。

「……分かった」

不服そうな顔をしながらも止めてくれてほっとした。

「で？こいつどうする？」

そう言っただけ男を踏みつけた。

「もiii」

「はあ？」

「警察の人に根堀葉堀聞かれたくないの」

「分かった……。じゃあ放置しとくか」

「うん」

あいつは私に手を差し出した。

「ありがとう……」

手を掴んで立ち上がろうとしたけど、ほっとしたからか腰が抜けて動けなかった。

「……ごめん。動けない」

「さっきは俺を止めてたのにな……」

若干呆れたように言つと、ん、と言つて座つて私に背中を向けた。

「え……」

「早くしろ」

「うん……」

少し躊躇つたけど、置いていかれるのも嫌なので従つた。

「なんでいたの？私が帰つて来てから行くと思つてたのに……」

「腹が減つてたんだよ」

そう言つてるけど、コンビニで何も買つてないのに寮に向かってる。

……もしかして心配とかしてくれたのかな？

「ありがとう……先生」

「はっ、初めて”先生”って呼んだな」

「うん」

少し恥ずかしかったけど、助けてくれた事には感謝してるから、少しだけ素直になろうと思つた。

「顔見せて見るよ？照れてんじゃねえの？」

「嫌！」

絶対真つ赤な顔してるに決まつてる。そんな顔見せたくない！

「見せるよ」

そう言つて首を曲げて私の顔を覗き込んだ。

「……っ！」

見られた……っ！

でも、なぜか先生も顔が真つ赤になった。

「先生？」

「お前照れすぎだろ？見てるこっちが照れるわ！」

そんなの知りませんよ……。

先生は首をもとの向きに戻して歩きだした。

先生が黙々と歩いていくからなんとなく気まずい。

「先生。あの……」

「何だよ？」

「何が話題……。うわー何かない！？

「えと、名前なんて言うんですか？」

「あー、そう言えば言っ てなかったか。古賀……古賀斎だ」

「6」恋慕

古賀斎か……。じゃあこれからは古賀先生？なんか違和感あると
いうか恥ずかしいというか……。そんな事を考えてる内に寮につい
た。

「もう歩けるか？」

「あ、うん。ありがとう」

私は背中から下ろしてもらって自分の部屋に戻った。

あんまり食欲ないけど何か食べないと……。お昼も何も食べなか
ったし。

袋を破ってメロンパンを食べた。

……そう言えば、先生どうするんだろう？またコンビニ行くのか
な？

少し気になつて先生を見に行こうとしたら声をかけられた。

「何してんだ？」

「……っ！あ、先生何食べてんのかなって思つて」

「お前……、俺にたかろうとすんなよ」

「違っし！」

人が折角親切に来てあげたのに……！

「じゃあ、何で来たんだよ？」

「……これ」

私はチヨコパンを渡した。

「俺がこんなもん食うと思うか？」

確かにそれは思った。

自惚れかもしれないけど、もしかしたら私のためにコンビニ行か
ないかもしれないし。そしたらお腹空くし、さっき助けてくれたお
礼に思つたけど……。もっとちゃんとした方がいいとは思っけ
ど、でも”生徒”と”教師”の立場でそこまでしていいのか分ら
ない。

「分かった。今度ちゃんと何かお礼します」

「は？いらねえよ。俺は教師だろうが。生徒を守るのは当然だろう？」
ドキ……

本当に当然のようにそう言うから、なぜか驚いた。初めはもったいない加減の人と思ってた。

なんでだろう。今初めてこの人がかっこいいと思った。

朝起きたら理香も母さんもいなかった。

まだ朝の6時。どういう事だ……？

最近理香の様子が変だったのは分かっていた。寂しそうに、でも何かを決断したような顔をしていた。

父さんは仕事だからいないのは分かる。でも母さんは仕事じゃないし、理香だってこんなに早く家を出るような用事はなかったはずだ。

嫌な予感がする……。それが当たったと分かったのは昼過ぎだった。

ガチャガチャ

昼前になって父さんが帰って来た。なのになんで理香と母さんはまだ帰ってこない？

「……父さん、母さんと理香は……？」

父さんとはあまり自分からは話さない。でもこれはどうしても気になって聞いた。

「ああ、その内分かる」

いつもは無表情の父さんの顔に少しだけ憐れみが含まれている事に気づいた。

何があるんだ……？嫌な予感是不安となって苛立ちに変わる。

そして昼過ぎにドアが開いた音がして、理香が帰って来たのかもしれないと思って玄関に行っただけ、帰ってきたのは母さんだけだった。

母さんは俺を見るなり怯えたような顔をしてすぐに目を逸らした。理香との関係がばれた時から目を逸らす事はあったけど、怯えたような顔をしたのは初めてだった。

何か隠してる……？

「ねえ母さん、理香は？」

俺がそう言った時、体がピクリと動いたのを逃さなかった。

母さんは何か知ってる……。それに何か隠してる、そう確信した。

「理香はどうしたの？」

「し、知らないけど……」

明らかに動揺していて、知ってると言っているようなものだった。

「知ってるんだろ？」

声は低くなつて、無意識に母さんを睨んだ。

「し、知らない……！」

母さんに掴みかかろうとしけど、腕を誰かによって止められた。

「……っ、父さん」

「母さんに手を上げる事はどいいう事が分かってるのか？」

「……っ」

父さんに腕を離されて俺は力なく腕を下ろした。

父さんの目の前で母さんに手を上げたり暴言を吐いたりする事はこの家でのタブー。もちろん父さんのいない時もしたらいけないけど、母さんは父さんにチクったりしないから、たまに八つ当たりをする事はあった。でも手を上げそうになったのは今回が初めて。

別に母さんが嫌いというわけじゃない。どちらかといえば好きだ。

でも理香の事となると我を忘れてしまっ

「ごめんなさい」

俺は素直に謝った。

でも多分俺は父さんの事がなくても、最終的には母さんには手を上げないと思う。いや、上げれない。

母さんは理香に似てるから、どうしても理香と被ってしまって、結局は母さんを傷つける事は出来ない。

「謝らないで。だって私は……」

母さんは泣きそうな顔で俺を見た。その顔を見てなんとなく悟った。理香はもうここにはいないのだと――……。

「ごめんなさい……っ」

「理香はどこにいるの？」

「それは言えない」

さっきまで泣きそうな顔をしていたのが嘘のように、真剣な顔になってしつかりした口調でそう言った。

「なんで？俺には知る権利はある！」

「私だって守秘義務があるの！」

「……」

「理香には県外の高校に行ってもらう事にしたから」

嫌な予感はやっぱり当たった。

「なんで……っ！」

なんとなく分かっていたのと、実際に言われるのは全然違う。

決定打を打たれ俺は激しく動揺した。

母さんの事だ。きつともう会えないように仕組んでるはずだ。俺はもう2度と理香に会えない……？そんな事あったまるか！

理香を求めてきつと俺は血眼になって、狂ったように理香を探してしまっ。そして見つけたら今まで以上に理香を束縛するだろう。自分の手の届く所……いや、俺の腕の中で閉じ込めてしまっ気がする。2度と逃げないようにして……。

「理香と魁人は一緒にいるべきじゃない。ううん、一緒にいたらい

けないの！一緒にいたら2人ともダメになる！」

「でも母さん達は堕ちたじゃないか！」

「確かにそうね……。でも私達とあなた達は大きく違ってる！理香は……、」

「俺を愛してない。そう言いたいのか？」

「知って、いたの……？」

母さんは驚いて目を見開いていた。

知っていたよ。ずっと前から……。理香が俺を兄としか見ていない事なんて……。――。

だから底なしに甘やかして愛した。俺なしじゃ、俺に甘えなきゃ生きられなくなるように。

俺を愛して欲しかった。俺ほどの愛でなくても、それこそほんの少しでも愛してくれたら俺は幸せだった。でもそればかりは仕方ない。だから理香にとって俺が1番であればよかった。

誰も愛さず、ただ俺に甘えていればよかったのに、理香は俺の手を通り抜けてしまった。

「それでも俺は……理香を愛してる。手放す事なんて出来ない。母さんが教えてくれないなら自分で理香を探すだけだ」

そう言っただけで俺自分の部屋に戻った。

「理香……」

部屋にあった写真を取って見つめた。

「……っ、どうして……っ」

涙が写真にぽとりと落ちた。

理香が俺から別れていった理由は本当は分かっている。理香には俺との関係が辛かったんだろう。……。それは分かっていた。でもそれに慣れてもらおうと思っていた。でもその前に理香は俺のもとから去ってしまった……。

「……ああ、愛してる。本当に愛しているんだ」

狂おしいほどに、盲目になってしまいうぐらいに。こんなにも焦がれて愛してる事を理香は分かっていたはずなのに……。

俺は涙を拭って決意を改にした。
絶対に捕まえて見せる。そして今度こそ、何があっても手放すも
のか——……。。

「7」繫糸

「新人生入場」

パチパチパチ……

新しい制服に身を包んで扉から入場した。

お母さんは入学式には来ると言っていたけど来るのかな……？お兄ちゃんにばれないように行くのはかなり難しいだろうな……。

お兄ちゃん今どうしてるのかな？はっ、ダメダメ、お兄ちゃんの事を考えちゃダメ。お兄ちゃんの事を考えてたら、いつまでたつても前に進めない。きつとお母さんとお父さんがなんとかしてくれる……。私が心配する必要はない。

1学年それぞれ10クラスあつて、女子高なのにかなり人数がいるんだなと驚いた。でも中学の時は1クラス40人もいたけど、ここでは1クラスだいたい35人。

分かつてはいたけど、女の子ばかりってなんか違和感感じる……。

この学校は全寮制じゃない。でも寮に入っている子の方が多い。その理由は寮費が激安だから。こんなに安くして利益はあるんだろうかと本気で思う。

噂によると親に虐待されてたりして家から出たい子や、自立したい子がここにくるらしい。ついでに3日前に来たルームメイトも親から離れたくてここを選んだと言っていた。

ルームメイトの名前は本庄茜。物事をはっきりいうタイプで、さばさばした明るい子だった。

すぐに仲良くなれて、これから1年間うまくいきそうではあった。

先生とはあれから相変わらず憎まれ口を叩いていたけど、始めみたいに敵意丸出しじゃなくて友達とふざけ合っているような感じだった。

寮のおばちゃんが帰ってきて先生が帰る時に寂しいと思ってしまったのは自分でも驚いた。多分家族と離れて寂しかった時に先生といたからそう感じたんだろうなと思った。

「担任の先生の発表をします！」

今まで静かだった講堂がざわざわとさわぎだして、いつの間にか校長先生の話やPTAのお祝いの言葉が終わっていて驚いた。こんなに時間がたつてたのか……。

担任の発表は3年からで、みんながキヤーキヤー言っていたけど、ここにいる先生が誰がよくて誰が嫌とか全然分からないからぼーっと聞いていた。

それにしても平均年齢高いな……。男と女はちょうど半々ぐらい。ほとんどの人が40過ぎで、50代のぐらいの人がほとんどだった。30代や20代ぐらいの人なんてちらほらとしかないない。

「1年5組の担任は……」

あ、私のクラスだ。

「数学担当の古賀先生です」

え……。

”絶対俺が教えるからな”まさかそれが本当の事になるとは……。しかも担任。

自然とにやけた。なんとなくだけど嬉しい——そう思った。

写真を取って教室に入ってこれからの説明。

今週はオリエンテーションや健康診断、いろいろあって授業はないらしく嬉しかった。

自己紹介は明日あるらしい。

最後に校章や名札生徒手帳などの小物をもらって最後の挨拶をして帰る事になった。

廊下にクラスメートのお父さんやお母さんが来てたけど、私のお母さんは来てないみたいだった。

やっぱり無理だったのかなあ……。小学生じゃないんだし寂しく思うのは情けないって思うけど、みんなは親が来てくれてるのにな

ちだけこないっていうのはやっぱり寂しい。

仕方なく1人で教室を出ようとした。

「木下っ！」

声を発したのは古賀先生だった。

「何ですか？」

「……敬語キモイからやめろ」

「はあ！？普通逆じゃないの？」

寮の時は始めこそ丁寧語で話してたけど、途中からほぼタメ口だった。でもさすがに、みんなの前でそれはちよっとなって思ってた。うしたのにその言い方は何！？

「あんた失礼だね」

「お前の方が失礼だろ？教師にタメ口なんて使いやがって」

「はあ？意味分らないんだけど。あんたがタメ口使えっていったんじゃん」

「仕方ないだろ。敬語とか使われたらキモイし」

「……訳わかんない。じゃあどう喋ればいいの？」

「まあ、いいか」

そう言つと、先生は周りを見て誰も聞いていないか確認してから私の耳に顔を近づけた。

え、え……？な、何……？

至近距離に人の顔、しかも異性の顔を近づけられるなんて家族（特にお兄ちゃん）しかないから変に緊張してしまう。

「お前のルームメイトについて少し話あるから」

内緒話をするように小さな声でそう言われた。

え……、茜の事……？

「それってどういう」

「理香！」

私の声はある人によって遮られた。

「お母さん……！」

絶対来てないと思ったのに……。来てないと思ってた分、来てく

れていたのがとても嬉しく感じた。

「大丈夫だったの？」

私はお母さんに駆け寄った。

「うん。お父さんが何とかしてくれたの」

「そっか……」

やっぱりお父さんの力は大きいな……。

「初めまして。木下さんのお母様ですか？」

私は思わず古賀の顔を見た。

何がお母様だ！私なんかよりあんたの方が気持ち悪い……！

「あ、は……い」

お母さんは目を見開いて信じられないという顔をしていた。

「お母さん……？」

「僕の顔に何か付いてますか？」

「あ、いえ！何でもありません！」

お母さんはハツとしたような顔になってそう言った。

お母さん？どうしたの？

「僕は木下さんの担任の古賀といいます」

そういつて人畜無害そうな笑顔をお母さんに向けた。

なんか寒気が……！その笑顔キモイ！

「……古賀？」

お母さんはそう言って難しそうな顔をした。

「はい。……校長と同じ名字が気になりましたか？」

「え、あ、はい」

お母さんは焦ったようにそう言った。

絶対それが理由じゃない……。じゃあ何で……？

「校長は僕の伯母なんです」

「え！？そんなの初めて聞いたんだけど！」

「こら、理香！先生にそんな言葉使いしたらダメじゃないの」

「……はい」

「構いませんよ」

そう言つて笑うのを必死に耐えている古賀にイラツときた。

挨拶もそこそこに私はお母さんと学校から出た。

茜の話はまた今度という事になった。それにしても茜の話って何だろう……。

茜の事は気になるけど、今もつと気になるのはお母さん。ずっと何かを考えているように難しい顔をしてる。

「お母さん？」

「えっ、何？」

「……ううん。何でもない」

久しぶり（つて言つてもそんなに時間たつてないけど）に会つたからいろいろ話たかったけど、お母さんは心ここに非ずで話しかけづらかった。

古賀と知り合いつてわけでもなさそうだったのにあの反応はなんなんだろう。お母さん一体どうしたのかな……。

「8」代用品

俺は打ちのめされた。

今まで自分は出来ない事なんてないと信じていた。思い通りにならないのは理香の心だけ——そう思っていたのに……。

どんなに必死になっても理香の居場所、いや、手がかりすら見つからなかった。

始めは理香の部屋を隅々まで漁った。何か少しでも手がかりになる物はないのか……と。

理香の部屋に隠されていた前願書の高校を片っ端から調べていったけどどれも外れだった。

調べてから分かったけど、これは多分時間潰しの為に母さんが用意したのだろう。この願書のせいで俺は1カ月を無駄に過ごしてしまった。

次は理香の友達に片っ端から聞いていった。でもみんな揃って知らないと言った。

どうして知らない……？それとも隠してるのか？でも何の為に？俺がしつこく聞けば聞くほど怪訝そうな顔になって眉をひそめた。その理由は俺が兄であるにも関わらず、理香の通う学校を知らないからだろうと思っていた。でも違った。その理由が分かったのは7人目の女の子に理香の場所を尋ねた時だった。

「あのさ、ちょっといいかな？理香がどこの学校行ったか知らない？」

「……あなたは？」
女の子は眉をひそめた。

まあ、普通はそうだな。いきなり友達がどこの学校いつてるのかなんて聞かれたら不信に思うよな……。

「俺は木下魁人。理香の兄貴」

「どうしてお兄さんが私にそんな事聞くんですか？お兄さんだった

ら知ってるんじゃないですか？」

確かに……。でも本当の事言うわけにもいかないよな。

「うん。確かに変だよな……」

こういう奴は鋭いから諦めるか……。

「ごめんな、変な事聞いて」

「……私は理香の場所知ってます。でも知ってたとしても私はあなたなんかには教えません！」

「え……」

それってどういう……

女の子の口から信じられない言葉が出てきた。

「お兄さん、理香に虐待してたんですよね！？そんな人に理香の場所を教える訳ないじゃないですか！」

「……っ」

虐待、待……？確かにそうとられてもおかしくない。あれが性的虐待と言われても頷ける。でも一体誰が……？

「誰がそう言ったの……？」

俺はこの後聞かなきゃよかったと後悔する事になる。

「そんなの理香に決まってるじゃないですか！」

理香が……？

「嘘だ……」

確かに理香が俺を兄だとは思えないのは知っていた。でも俺の与えた愛撫に応えてくれたじゃないか、兄としてだけど”好き”と、そう言ってくれたのに……。

理香にとっては俺の存在はそこまで苦痛だったのか？俺がこの世にいない方がマシだと思えるくらい……。そこまで俺が……嫌い、だった？

嘘だと思った。いやそう思ったかった……。でもこれは母さんが手を回した事じゃない。俺に会いたくないという理香の意志だ。

「もしかして理香を好きだったと言うんですか……？」

女の子の目はまるで異常者を見るような目だった。

そんなにおかしい事なのか？好きになったのが妹だったただけだろ？妹だから好きになったわけじゃない。

ダメだという事なんてずっと前から分かってた。でもこの気持ちは消えない。それどころか消そうと思えば思うほどこの想いに捕らえられて身動きが出来なくなる。

この想いはどうやってたら捨てられる？そんな事誰にも聞けなかったし、聞いた所で消せると思わなかった。

「まさか本当に……？」

俺が頷くと、その子の顔はどんどん醜く歪んでいった。

「異常者、気違い！おかいいんじゃないの？気持ち悪い、気持ち悪い……っ！」

いつもだったら”理解して欲しいとも思わないし、理解出来るとも思っていない”そう思うのに……。まるでそれは理香の本心のように思えて俺は打ちのめされた。

「もう話しかけないで下さい！」

叫ぶように女の子は言うと、走りながら去っていった。

俺はナイフが突き刺さったみたいな鋭い痛みを初めて感じた。

「……ははは」

普通の人はやっぱりそう思うのか……。でも、それでも……

「好きなんだ……」

どうしようもないぐらい、何を捨ててもいいと思えるぐらいに――――。

でも俺はその日から諦めた。どんなに探しだって親が俺を阻止するつもりならどんなに頑張ったって無理だと思ったから。

その日から俺は大学にも行かず墮落した日々を送った。

こんな俺を見たら理香はどう思うだろう。呆れるだろうか？それとも責任を感じて泣くだろうか？もし責任を感じるなら、少しでも罪悪感を感じるのなら……。同情でもいい……。俺の側にいてくれ……。それ以外は何も望まないから、兄として理香に接するようにするから――――。

でもそんな俺の願いなんて叶わなかった。

俺は柄の悪い奴と付き合って、酒に溺れる毎日。俺の部屋には酒のビンやタバコの吸い殻が溢れていて、今までの俺からだと考えられないような状態だった。

そんな俺を心配して母さんはよく俺の家に来たけど、俺は無視した。

母さんさえいなければこんな事にはならなかったのに……俺の心配？はっ、ふざけてんのかっ！笑わせるなよ！

「ねえ、魁人。今日はいい？」

「……ああ、いいよ」

そう言っただけはばかな女に薄っぺらい笑いを向ける。

医大生という肩書きが無くたって俺の容姿に惹かれる奴はいる。別に大学を辞めたわけではない。最近連んでいるこいつらは俺の事は名前ぐらいしか知らない。そして俺も同じ。下手したら名前だっで知らない。そんな女達とラブホに行く毎日。

理香を抱くようになってから他の女を抱く事なんてなかった。でも今は女を見境無しに抱いてる。”自暴自棄”まさにその言葉がピッタリだった。

「あつ、魁人……っ、もつと……」

うるさい、俺の名前を呼ぶな。俺の名前を呼んでもいい女は1人だけ。お前じゃない。

俺は持つてきていたハンカチを女の口に入れて紐でハンカチが落ちないように縛る。

「うー、んっ、んん」

「俺、女のあえぎ声嫌いなんだ。だから我慢して？」

そう言っただけ一方的なセックスをする。女を気持ちよくさせたいなんて考えずに、自分の欲求を満たすためにだけに腰を振る。

それなのに嬉しそうに下の口からよだれを垂らすこいつらは淫乱だと思ふ。きつと誰にでも足を開く女なんだろう。そしてそんな女ばかり相手にしてる自分もばかだ。

……本命がいるくせに何しるんだ？

ある意味当てつけだった。

こんなに墮落した俺を見て後悔すればいい。全て理香のせいだよ？理香が俺から離れたりしたから俺はこうなったんだよ？

「……っ、はっ」

俺はゴムの中に欲望を吐き出した。

体は満たされても、心は満たされない。体は熱いのに関心は冷め切っていた。

目をトロンとさせ、どこか夢見心地の女を放置して俺は着替えて金をテーブルに置いた。

「ホテル代」

「え、もう帰っちゃうの？」

寂しそうな顔をして縋るような目で俺を見てきた。

うざい……。俺はこんな女なんかより、ちゃんと割り切ってる女がいい。こんな女は後々迷惑になるのは分かってる。

「ああ……」

「また、また暇な時シようね！」

「……暇だったらな」

「うん！」

女は笑顔になって嬉しそうな顔を俺に向けた。

「また」はもうないけどなーそう思いながら俺はホテルを出た。
「あのっ、ずっと好きでした……っ！」

久し振りに大学に行った俺にある女が告白してきた。告白なんて別に珍しい事じゃない。でも俺はその場で固まってしまった。

女は俺が女癖が悪い事や、誰とも付き合わない事を知っていて、別に付き合っただけとかそういう事は望まなかったのだらう。すぐに逃げるように走っていった。

俺は走っていった女を追って腕を掴んだ。

「いいよ。つき合おうよ」

俺がそう言うと、女は俺の言った言葉を理解出来なかったのか顔

をきょとんとさせた。だからもう1度言った。

「俺と付き合って下さい」

「え、あ……はい！」

女は照れて嬉しそうに笑った。

女は気づいていない、自分を通して誰を見られているのか……。

「好きだよ……」

理香……。

女は自分にかけられた言葉だと思って喜んでいた。それが自分ではないと知らずに……。

「9」虐待

結局お母さんは何もないからって言い続けていた。絶対何かあると思ってたけど、聞かない方がいいのかなと思ってしつこく追求しなかった。

私はずっと気になっていいる事を聞くか聞かないでおうか迷った。聞いてしまったらいけない気がしたし、そもそもお母さんが私の満足する返事をくれるとも思わなかった。でもどうしても気になって聞いてしまった。

「お兄ちゃんどうしてる……？」

お母さんは体を少しビクツとさせたけど、迷ったように口を開いた。

「理香を探してるみたい……。家の中に何も手がかりになるような物がなかったから、理香の友達に片っ端から聞いてるみたいだけど

……」

「え……」

そんな……。友達の何人かには私の行く高校は言っている。お兄ちゃんがその友達を見つけるのは時間の問題のような気がする。

「……どうしよう」

友達には悪いけど、適当な高校の名前を教えればよかった。

「大丈夫。ちゃんと手は打ったから」

「手は打ったって……どうやって……？」

お母さんは申し訳ないって感じの顔になって教えてくれた。

「理香が魁人から虐待を受けてるって理香の友達に言ったの。兄がもしかしたら理香がこの学校に行くか聞きに来るかもしれないけど、秘密にしておいてってお願いしたの」

「……っ！」

「ごめんね……。それしか思いつかなかったの」

複雑だった。お兄ちゃんを悪者にする事に罪悪感を感じた。でも

……そう言われれば友達だって、お兄ちゃんに私の通っている高校を言わないだろう。

「……ううん。でもお兄ちゃん諦めてくれるかな」

お兄ちゃんはそれだけじゃ諦めないかもしれない。お兄ちゃんの私への愛はそんなもので諦めるようなものじゃないとどこかで自惚れていた。

「大丈夫よ……。理香の友達に理香から聞いたという事にしてって頼んだから。ごめんね」

「え……」

もし友達がお兄ちゃんにそう言ったら……お兄ちゃんは罪悪感を感じてもう私を探さないかもしれない……。その事に安堵すると同時に、寂しさが生まれた。

「それでも諦めないようならまた何か手を打つから」

「……ありがとう」

でもそれを素直に喜べないのはどうしてだろう。お兄ちゃんは今、どんな気持ちで過ごしてるのかな……。

「そろそろ帰らないと……。本当はゆっくりしていきたいんだけど、仕事があるの」

お母さんは名残惜しそうに言って駅に向かった。

「バイバイ……」

駅に向かうお母さんを見ながら私も寮に向かおうとした。

「木下」

「古賀……先生」

「お前、今呼び捨てにしようとしただろ？」

「気のせいだよ」

古賀……先生は私を怪しそうな顔で見てる。

「そんな事よりなんでここにいるの？まさかつけてた？」

「アホか。そんなわけねえだろ。なんでそんなキモイ事しねえといけねえんだよ」

確かにそれもそうか……。

「本庄の事、早いこといつとこうと思つてな」

そう言えば何か言つてたな……。

「ちよつと来てくれ」

「は？」

私は古賀に手を引かれて歩いていき、だんだん人氣が無くなつてきた。

なんでこんな所に……？コンビニに行つた時に暴行されそうになつた事を思い出す。古賀は私を助けてくれた……だからそんな事するはずない……！そう思つてゐるのに……だんだん恐怖が積もつてきて体が震えそうになる。

古賀の手が大きくて、まるでそれが逃がさないといつてゐるやうに感じた。手を振り解きたいけど振り解けない。

「大丈夫か？顔が真っ青じゃね？」

「……大、丈夫」

でも全然大丈夫じゃない。そんな事は古賀だつて気づいてゐるだろう。

古賀の手が私の顔に触れようと近づいてきた。その手が……あの男が口を塞いだ時の手と被つて思わず声を上げてしまった。

「きゃ……っ」

古賀はハツとしたような顔になつて、悪い……と謝つてくれた。

古賀が悪いわけじゃないのに……。寮から歸つた時はそんな事ならなかつたのにどうして……？

「こつちこそごめん……」

私が俯いてゐるとネクタイがシュルと解ける音がして思わず顔を上げた。

「……ん」

そう言つて古賀は私にネクタイを渡した。

「え……？」

意味わかんないんだけど……。

「これで手首巻け」

「は？」

「これつけたら大丈夫だろ？」

古賀の気遣いは素直に嬉しかった。……でもさ、もし他の生徒や先生に見られたらどうするの？男教師を縛ってる女生徒……。私だったら100パーセント引くよ？

「……………いいです」

「はあ？人の親切をなんだと思ってるんだよ？」

確かに親切に言ったのかもしれないけど……………と思ったのは勘違いだった。だってあんた口角上がってるって！

「変態教師……………」

生徒に縛らせようとする教師……。まさにその言葉がピッタリだと思った。

「なんだと…………？」

「だってそうじゃん！」

そう言うつと頭を軽く叩かれた。

「何すんのよ！」

「生徒の癖に生意気だからだろ？」

「何それ！」

あれ……………いつの間にか普通に話せてる。もしかして、わざとこういうふうにしたのかな……………？

「明らかにそうだろ？つーか、お前絶対俺を教師だと思ってねえだろ？」

……………否定は出来ないな。

「それより話って？」

「話逸らしただろ？……………まあいいか、ここ入れ」

「分かった」

もう恐怖なんて感じなくて、古賀の後について教室に入った。

「で？茜の事って何？」

「まあちよつと待て。……………俺が今から言う事絶対誰にも言うんじゃないぞ？それが約束できるか？」

古賀の顔が真剣だったから、私は思わず息を呑んだ。

「……う、うん」

真剣なままの顔で古賀は口を開いた。

「実はあいつ……親から虐待受けてたみてえなんだよ」

「10」親譲り

「虐待……？」

「ああ。この学校にそういう奴が来るって聞いたことあんだろ？」

「うん……」

「はつきり言つてそう言う奴は多い。でもあいつの場合、特にひでえらしい。詳しく何があったとかは教えらんねえけど……、いきなり叫びだしたりとかする事があるらしい……。だからそんな時は寮のおばちゃんたち呼べよ？」

「う、ん……」

信じられなかった。今日茜を見た時は普通で、今までだってそんな素振り見た事なかったのに……。

「ここはそういう所なんだよ。虐待されてる奴を保護するのがこの本当の目的。ここの校長がそういう人なんだよ。全く俺も苦勞する……」

ここの校長ははつきり言つて写真ですらはつきり見た記憶はないけど、すごい人だと思った。入学式の時ちゃんと話聞いてなくて反省した。

「あとな、お前もいろいろと大変だと思う。辛くなったり耐えられなくなつたらすぐに言えよ？」

「え……」

「多分みんな本庄の事はつかで、お前に構つてくれねえだろうからな。……悪いな、こんな役引き受けさせちまつて」

寮の激安の理由はこれか……。虐待を受けた子でもお金を心配しないで逃げれるように、そしてそれを助け合わないといけないからこんなに激安なのか。

「うん。そうするよ、古賀」

私は安心させるようにそう言ったのに、古賀はなんか……若干怒つてる？

「どうしたの？」

「……お前、さっき古賀って言っただろ？」

「……え」

“うん。そうするよ、古賀”

あ……口が滑ってそんな事言った気がする。

「気のせいじゃないの？」

あくまでもしらはつくれよとする私。

「ああ？んなわけねえだろ？俺はこの耳でしっかり聞いたぜ？」

どうやら誤魔化せないみたい……。

「まあ、別にどうでもいいじゃん。話ってそれだけ？じゃあもう帰るから」

そう言って席を立って逃げるようにドアに向かった。

「はあ、なんでこんな奴が……」

古賀はなぜか悩ましげに言った。

「何か言った？」

「いや、なんでもねえよ……」

「じゃあまたね。先生」

私はドアを開けて教室を出た。

「はあー」

理香が出て行ったのを見届けて斎はまたため息をついた。

異性の好みは親に似るものなのか……？ まさか生徒を好きになるとは思わなかった。

始めはただ、オヤジがよく話していた女と似ていたから気になった。オヤジが好きだったという女とどういう縁があるのか？ただそれだけだった。

あいつに会うまでその女の事なんて忘れてたが、あいつに会ってすぐに思い出した。

始めは生意気な女だと思った。こんな奴と似た奴を愛したオヤジはマゾだったんじゃないのかとマジで思った。

でも寮で一緒にいて、普段は生意気なくせに急に素直になったり、夜になると寂しくなってる俺のどこに來たりする……そのギャップにやられたんだと思う。

あの奇妙な2人だけの暮らしで分かった事は、実はすごく寂しがりやで甘えたということ。初めてはツンツンしてると思ったが、どうやらツンデレらしい。

その甘えた姿を俺だけにしか見せたくないという独占欲、俺のものにしたいという所有欲。生まれて初めてそんな欲求が生まれた。

今まで女を好きになった事、付き合った事は何回もあった。でもそんな感情はあまり沸かなかった。

俺は俺、相手は相手、束縛したいと思ったりしなかった。何より俺が束縛されなくなかったからだ。少しでも俺を束縛するような素振りをみせる女にはすぐに嫌気が差した。

自分なりに恋愛していたつもりだったが、俺は冷めているらしく、いつも女は”本当に私の事好きなの？”と不安を爆発させた。それが嫌で、本気でうざかった。

でもあいつにはきつとそんな感情は沸かないと思う。それどころか、束縛したい、束縛されたいって思う。

本気で人を好きになるってこういう事なのか？……分からない。でも今まで会ったどの女より本気だという事は分かる。

あいつは俺の事……ただの教師としか思ってたなさそうだし。っー

か、なめられてねえ？

「はあ……」

他の奴だったらふざけくじゃねって思うが、あいつにはムカつかねえんだよな……。多分それぐらい惚れてるって事だろうけど。

にしても……。ここが女子高でよかったぜ。もし女子高じゃなかったら、男に対してすげー視線送ってるかもしれないし……。。

なんでここまで好きになっちゃったのか……。自分でもよく分かんねえ。でもこれはもう執着に近いもんを感じる。

……。あいつは好きな奴とかいんのか？まあ、いたとしても絶対俺に振り向かず。それでも振り向かなかったら……。？俺はあいつを壊すかもしれないねえ。

手に入らないのなら、いつそ誰の手にも渡らないように壊してしまえ。そんな怖い考えが俺の中にある……。そんな自分が怖いと思いつつこれが本当の俺だと思う。

「理香……。俺を好きになれ。じゃないと俺は……」

それは愛しい人に向けたような切なく、苦しくなるような声だった。

「オレハオマエヲコワシテシマウカラ……」

それは狂気を孕んだ歪んだ愛の囁きだった……。

好みか父に似たのなら、この歪んだ愛は母から受け継いだ物だった————……。

「11」歪親（前書き）

少し痛いかもしれません。

「11」歪親

古賀祐太と江藤唯から斎は生まれた。それは、決して望まれて生まれたものではなかった。

祐太と唯はいわゆる幼なじみで、唯は祐太が好きだった。しかし祐太は唯を幼なじみだとしか思っていなかった。

祐太が自分じゃない違う女の子を好きになるたび唯はその女の子に嫉妬し、どす黒く醜い感情を抱えていた。

唯は小学6年になった時に祐太が好きになった子を本格的にいじめた。今までもいじめたりしていたが、それは今までの比ではなかった。

なぜならその子と祐太は両思いで、放課後教室で祐太とその女の子がキスしているのを見てしまったからだだった。

「この雌豚が……。あんたに祐太は似合わないよ？」

唯は水浸しになった女の子に冷たい眼差しを向けた。

「祐太があんたみたいに不細工で臭いゴミみたいな女、好きになるわけないじゃない」

女の子は弱々しく唯を睨んだ。

「何？その目は？まだ自分の立場が分かってないのね」

グリグリグリ……

「……っ」

唯は上履きのまま女の子の手を踏みつけた。

「いいね、その顔……」

そうやって唯は歪んだ笑みを零した。それは小学生の笑顔ではなかった。――……。――。

「そうだ、ついでにここ舐めなさいよ」

唯は便器を足で差した。

「あんたに水ぶっかけたせいで濡れちゃったしね？」

「は……？そんなの出来るわけないじゃない！」

「出来る出来ないじゃなくてするんだよ！」

跪いている格好になっっている女の子の頭を蹴った。

「いい加減にしなさいよ！先生に……っ」

「チクるの？」

そう言っただけは女の子をばかにするように嘲笑った。

「あんたと私……先生はどっちを信じる？それに友達も……」

悔しそうに顔を歪ませるが、女の子は何も言い返せなかった。なぜならみんな自分より唯の方を信じると分かっていたから。

唯はずる賢く、みんなを味方に回してこの子を悪者にした。いじめられているのは唯、いじめているのはこの子だとみんな信じている。

「あんたの味方はいるの？」

女の子は悔しさからか悲しさからか、涙を流していた。

「ふふふ。いないよねえ」。ほらっ、舐めな！」

唯は女の子の頭を持って思いっきり頭を床に擦りつけた。

「ぶっ、や、やめ……っ。ごめんなさい！ごめんなさい……っ！」

「ふんっ、役に立たないね。でもやっとしおらしくなったね……」

唯は女の子の前髪を掴んで顔を自分の前までもってきた。

「うっ、うっ……」

「ブツサイクな顔」

唯はまるで穢らわしいものを見るような蔑んだ目を女の子に送った。

「なんで……こんな事……」

「あんた……、まだ自分の罪が分かってないのね」

今まで唯は女の子にどうしてこんな事をするのか教えてくれなかった。でも罪なんて、女の子には見に覚えがない事だった。

「それはあんたが祐太をたぶらかした事！」

「……っ」

唯は掴んでいた手の力をさらに強めた。

「祐太に色目なんて使うなんて……。全く、どういう教育されてき

たの？」

女の子は訳が分からなかった。自分はそんな事してない——そう思った。

この女の子と祐太の関係は、大人が微笑ましいと思えるようなそんな関係だった。”恋に恋してる”まだそんな感じの淡く幼い恋だった。

しかし唯にはそれがなんであろうと、祐太が他の女の子を好きになるのが許せなかった。そして唯は祐太ではなく、女の子たちに怒りを向けた。

祐太が悪いんじゃない、悪いのは祐太をたぶらかす醜くて卑しい女……そう思っていた。

「私はそんなつ、ぐ……っ」

「口答え？」

唯は掴んでいた手で女の子の頭を床に叩きつけた。

怖い……女の子の目には恐怖が浮かんでいて、もう反抗なんて出来なかった。反抗したり口答えをしたりしたら殺される……そう本気で思った。

唯は女の子の目が死んでいるのがわかった。——もう自分に逆らわない、と。

でもこれで満足する唯ではなかった。嫉妬で狂うとはまさにこの事だった。

便器を洗っているブラシを持ってきて口に突っ込んだり、便器を舐めさせたりしていた。

相手の目が死ねば死ぬほど唯は怒りが収まる気がした。でもそれと同時に、私の辛さはこんなものじゃないとも思っていた。

結局唯に散々いじめられた女の子は転校していった。

唯をいじめた事でみんなから冷たい眼差しを送られたのが耐えられなくなったのだらうと噂され、だれも女の子に同情するものはいず、また真実を知る者もいなかった。

唯は自分がどれだけひどい事をしているのか、また祐太に向ける

愛が異常なものだと気づかなかった。

純粹に一途に祐太を愛してる——そう思っていた。

中学に入って、唯は女のいたぶり方を変えた。それは、いじめから強姦へ——。

いじめはばれるリスクがある事と、より女として一生残るトラウマを残すという理由から……。

そのために唯は自分の体を使った。敢えて柄の悪い男に近づき、体の関係を持つかわりに女を強姦してもらうように頼んだ。唯は男を誘惑するために、おしゃれや体の手入れを怠らなかった。

はじめはやっぱり祐太以外の人に抱かれるのは嫌だった。でも祐太に好きな子が出来てその決心がついた。

祐太に変な虫が付かないように私がなんとかしないと。例えどんな事しても————……。

歪んだ愛が、自分も傷つけていると唯は気づかない。

高校に入ってさらに唯は残酷な事をしだした。

レイプした様子をビデオで撮り、それを裏で売り始めたのだ。

法的に許されていない行為、さらに犯されていれ女の子の年齢もまた法にふれているという事もあり高値で売買され、その収入のほとんどが唯のものになった。

そして用済みの女は裏で売りさばく。けれども誰も、どこにでもいそうな高校生である唯がそんなに残酷な事していると気づかなかった。いや気づくはずがなかった————……。

そんな唯が止まるきっかけになったのは、木下鈴香という存在だった……。

唯は大学も祐太と同じ所に通った。祐太がサークルに入ると聞いた時、サークルに入ろうと思ったが、唯は自分が苦手な学部に入ったため、唯は努力してその学部に入った。しかし、そのため勉強しなくてはならず、またレイプした男達の処理に追われそんな暇はなかった。

唯は同じ学部に入ったという事と、この大学の女子が少ないとい

う事で安心しきっていた。ちゃんと祐太を見張れる……もう、変な女を寄せ付けたりしない。

けれども祐太に好きな女が出来てしまった……。それが木下鈴香——理香の母親だ。

初めてファミレスであった時は中学生か高校生だと思った。それぐらい鈴香は童顔だった。

初め会った時に祐太が鈴香を好きだと気づいた。でもどうやら鈴香にその気はないようだった。いつもならそく回してしまっているが、あまりに幼く、穢れを知らない印象を受けたため唯の良心が顔を出した。

中学生の頃からしていた事だが、鈴香は誰よりも無垢に見えて唯は躊躇ってしまったのだ。だから唯は警告をした。

”私は祐太が好きだ”と……。

でもそれはなんの役目も果たさなかった。相変わらず祐太と鈴香はベタベタしていて、ついに唯はいつもの強行手段に出た。これで邪魔者は消える——そう信じて……。

けれど不思議な事に鈴香をレイプしようとした奴らはことごとく返り討ちに合ったようにぼろ雑巾のようになっていた。

「おいっ！これはどういう事だよ！こんな話聞いてねーぞ！」

「……ごめん」

そう謝りつつ、心の中ではそんな事思っ てなかった。

どういう事……？男の話からしてきなり妨害が入ったみたいだけど……。SPとかついてるはずないし。となるとたまたま？いや、それにしても不自然ね。1度や2度じゃないし……。

取りあえずこの男は用済みか……。

わめきまくる男を唯は冷めた目で見ていた。

「あんたはもう用済みね……」

「は？」

「いらない、そう言ったの」

「はあ？なんでだよ！俺は今まで愛のためにいろいろしてきたのに

……！」

「ばかな男ね……。本名ですら知らないくせに。

「頼んだ覚えはないけど？あんたが勝手にしてくれるって言っただけだしね？」

「……っ！でも俺らあんなに愛し合って……っ」

「あはははは」

「愛し合って……？私が愛しているのは祐太だけ。あんたなんて好きになるはずない。」

「あんたはやっぱりばかね……。私が消してきたのは祐太が好きになった女なのに、あんたは私が入らない女だと思ってる。確かに気に入らない女はあるけど、それは”祐太が好きな女”だからそうじゃなかったら別に嫌いじゃない。」

「ど、どうした……？」

男はいきなり笑い出した唯に驚いた。

「おめでたい奴ね。でももう、あんたとは関わる事はないから」
こいつなら顔が割とかわいいからきつと男娼として売れるかな——と恐ろしい事を唯は考えていた。

「バイバイ」

「あんたの名前も覚えてないけど、一応最期の挨拶はしておくね。今度会う事は2度とない。あんたは裏の社会に売られるから——」
「……。」

「ちよっ、愛！」

唯は男に妖しい笑みを見せて手を振った。

さて、あの女どうしようか……。

唯が選んだ答え——それは唯自身が直接手を下す事だった。

「12」歪親2

唯は鈴香の映った写真をリビングで睨んでいた。

この子は少し用心深く作戦を考えた方がいいかもしれない……。次々と返り討ちにされるのはきつと偶然じゃない……。何か鈴香を守ってるはずね。

「どうしよつか……」

憎いこの女を陥れるにはどうすればいい？

「この写真……」

声をした方を振り向くとお母さんがいた。

お母さん今日仕事じゃなかったのか……。危ない、危ない、写真を見るのは自分の部屋でしないとね……。破ったり燃やしたりするかもしれないし、そんな所見せるわけにはいかない。

にしても、お母さん鈴香の事を知ってる……？

「お母さんこの子知ってるの？」

「えっ、あ、まあ……」

何？そのぎこちない答え方……。

「どうして知ってるの？」

「あ……、病院に来たことあるのよ」

お母さんが働いてる病院に鈴香が？でも1日何人もの患者が来るのに、それだけで普通顔なんて覚えてる？

「確かお母さん産婦人科……だったよね？」

性病とかそういう類で来たんだろうか？あの純粹そうな顔で、もう処女じゃないのか……。中学でヴァージンを捨てた唯だが、鈴香は処女だろうと思いきんでいた。男嫌いと祐太が言っていた気がするが、それはその時つき合っていた彼のせい……？

「性病で来たの？」

「唯、あんまり聞かないで頂戴。看護師には守秘義務があるんだから……」

「はい」

隠されると余計気になるんだけどね……。

「唯はこの子と友達なの？」

友達……？はっ、そんなわけない。

「うん。そう」

笑って嘘を言った。

そうだと言ったらお母さんは何か教えてくれるかもしれない――
そう期待して……。

「なんか男の人とあんまり関わらないの……何でかなあ？」

それは過去の男で何かあったから？そして病院……？クラミジア、
淋菌、もしかしてエイズにかかったとか……？

私は性病になるなんてへましない。ちゃんとどんな時だってコン
ドームはつけてる。つけないのは祐太だけ――そう決めてる。

「あんな事があつたらね……」

「あんな事って……？」

お母さんはハツとしたような顔になった。余計な事を言っしま
ったというように。

「何があつたの？」

「……それは」

「鈴香の力になれるならなりたいの……」

嘘の言葉はスラスラ出てくる。

「鈴香ちゃんにとつては忘れたい事だと思うの……。だから唯に話
すのは……」

そう言ってお母さんは目を逸らした。でもお母さんの心が揺れた
のを見逃さなかった。

もうひとがんばりすればきつと話してくれるはず……！

「私の心の中にだけに止めとくよ……。どんな事実があつたって引
いたり軽蔑したりなんてしないから……。お願い、教えて。鈴香を
支えたいのっ」

お母さんは教えてくれるだろうか？教えてくれないなら自力で調

べるただけだね……。

「本当ね？」

「うん」

力強く頷いた。

さあ……何を隠しているのか……。脅すネタにはなるだろうか？

唯は柄にもなく少し緊張した。

「子どもを……おろしたの」

「え……」

おろした……？子どもを……？

てつきり性病の類だと思っていた唯は思いがけない言葉に驚いた。
子どもが子どもを生む……まさにそんな感じがした。

「それって、いつ……？」

性病だったら祐太じゃないと思った。でも子どもは……？それだ
つたらもしかしたら祐太の子どもかもしれない……。

そう思うと、唯は狂いそうになるぐらいの嫉妬を覚えた。

もしそうなら生かしておけない。なんで、なんであの女が……つ。
祐太の好きになった女は全員排除してきたし、セフレを作るような
人じゃない……。つまり普通に考えると、あの女が祐太の初めての
女になる。そんなの……絶対許さない――。

「2年前だったと思うわ」

2年前……だったら祐太じゃない。

唯は心底ほつとした。

「そんな事があったんだ……」

「本人は生みたいって言ったんだけど、母親が反対してね……。何
が何でもおろして下さいって必死に頼むもんだから、ほんとはその
子の意見を聞かないといけなかったんだけど……」

おろしたのか……。

その相手はどんな人だったんだろう。今でも付き合っているのだ
ろうか？でもそんな気配ない。

取りあえずこれを使って近づかないようにするか……。それでも

近づいたらばらしたらいだけだしね。

私こんなに甘かったけ？いつもならそくばらしてると思うんだけどなあ……。

次の日、唯は鈴香と祐太と一緒に帰るのを見てしまった。

なんで……？祐太に近づかないでっていったのに……っ！許さない、許さないっ！絶対に……っ。

唯はその次の日すぐに行動に出た。

「鈴香ちゃん」

鈴香に声をかけると、少し気まずそうな顔をしていた。

「唯ちゃん……」

私にはばれてないと思ってるの？ばれてるよ、普通に。

「鈴香ちゃん酷いよね。私の気持ち知ってるくせに……」

そう言っただけは俯く。

「ごめん。でも私祐太の事そんなふうには……」

そんなふう……？

「そんな事どうでもいいんだよ！」

そう、そんな事は関係ない。ようは祐太があんたに好意があるかないかなんだよね。

祐太は1度だって私の事をそんなふうに使ってくれたことなんてない。こんなに好きなのに……、ずっと前から好きなのに……。

「でもそんな事が出来たのも今までだけ……」

そう……もうそんな事したら許さない。

「高校の時子どもおろしたんだよね」

唯は不敵に笑いながら鈴香の耳元でそっと囁いた。

「……っ！」

鈴香は”どうしてそれを”という顔をしていた。

いいきみ……。もっと苦しめ。これは私がした事じゃない。自分の犯した罪だから私が何か危害を加えるより傷つくよね？

「ばらされなくなかったら、今後祐太に近づかないでね」

ふふふ……。本当はばらすつもり満々だけどね？でもその前に、

もつと苦しめ。

私なんかよりもっと……。

そして死んで罪を償ってよ？

けれども、鈴香は唯を裏切って祐太に会った。それは普通の人から見ればサークルだから仕方ないと言えるような事だった。でも唯はそう思えない。

なんでまた約束を破ったの？どこまでもずうずうしい女……。口だけじゃ分からないよね。いいわ、直接手を下してあげる……。

唯は歪んだ笑みを作って鈴香に近づいた。

「鈴香ちゃん」

後ろからそう声をかけると、鈴香はビクッと体を振るわせて唯の方を向いた。

「約束破ったよね？」

「……ごめん」

「ごめん？本当にそう思ってるの？本当は思っていないよね？思ってたらそんな事しないもんね。……人をばかにするのもいい加減にしないとダメだよ？」

「本当にそう思ってるのなら私に付いて来てくれるよね？」

唯は断れないように威圧をこめて言った。

さあ……これからがパーティーの始まりだね。

唯は自分の家に鈴香を連れて来た。

「入って」

「……うん」

鈴香はこれから何が起こるのか――そう考えているのか顔が真っ青だった。

いいね。人が恐怖に震えるその顔は……。

リビングに鈴香を通して椅子に座らせた。

「お茶もってくるね」

唯はそう言ってキッチンに行った。

「ふふふ……」

怪しく笑いながら唯はお茶を作った。

「どうぞ」

鈴香は少し疑うようにお茶を見た。

お茶に何か入ってると思ってるの？いれるわけないよ？だって薬なんかで人格を崩壊させちゃったら苦痛に歪む顔が半減しちゃうからね。

「別に何も入ってないよ？安心して飲んでね」

唯がそう言うと、鈴香は顔を強ばらせた。そして恐る恐るお茶を飲んだ。

「どう？」

「おいしいです……」

本当においしいって思ってるの？顔が強張ったままだけど。

「よかった」

唯はそう言って作り笑顔を鈴香に向けた。

「唯ちゃん、あの……」

「鈴香ちゃん、私の部屋に行こうか」

そう言って唯は鈴香の手を引っ張った。

鈴香にどれだけ私が祐太の事を思っているのか思い知らせないかね……。

階段を上がって2階の部屋を開けた。

その部屋を見て鈴香は絶句したようだった。

一面に祐太の写真が貼ってあった。それは隙間が無いぐらい大小いろいろに。

「すごいでしょ？」

そう言って私は鈴香に笑いかけた。

ここは私の宝庫……。いくら積まれたってこの部屋は売らない。これを見れば、どれだけ私が祐太を好きか分かったよね？

最後にせっかくだから私のコレクションを見せてあげるよ……。

「この写真はね、祐太が12歳の誕生日の写真で、こっちが小学校最後の遠足。それでこれが……」

鈴香が逃げようとしたのを見て唯は腕を掴んだ。

「ダメだよ、逃げちゃあ」

唯はそう言って笑った。

せつかく見せてあげてるのに……。こんなの、もう2度と見る機会なんてないよ？あまりにすぐくて感動しちゃったよね？自分でもよく集めたなあって思う。

そうだ……。あれも見せてあげようか。私のもう1つの努力の結晶を……。

「これを見て」

そう言って唯は鍵のついてある少し大きめの箱の鍵を開けた。

「ひっ」

鈴香は声をあげた。

なんで声なんてあげるの？素敵な写真だと思っただけ……。

中にはたくさんさんの写真が入ってあった。でも全部普通の写真じゃない。暴行を受けたと思われる女の人や女の子の写真が入っていた。全部とても悲惨で目を逸らしたくなるようなものだった。

けれど唯はそれが自分がどれだけ祐太を愛しているかを示すものだと思っている。邪魔な女……。つまり祐太に近づいてきた悪い虫を排除しただけ——そう信じていた。

「目を逸らしちゃダメだよ？ちゃんと見ないとね」

そう言って唯は無理やり写真を鈴香に見せて説明しだした。

「この子は中里弥生って言って、祐太の初恋の子。この子がバカでブスでさー、なんでこんな子祐太好きになったんだろうね？」

あ……。違ったけ、最初に好きになったのは小学校の時だったけど……。あの時はいいめだけにしたんだよね。今思えばもっと徹底的に痛めとくんだった。

そこに写っていたのは唯が中学になった初めてレイプさせた女の子だった。その子で顔は精液まみれで、涙を流していた。顔にはぶたれた後があって、手は縄で縛られていた。他には無理やり男のものをくわえさせられたり、鞭で打たれていたり、目をそらしたくな

るものだった。

「あー、これは祐太な惚れた雌豚。デブでさー、このあとどっかの風俗に売られたよ」

唯はクスクス笑いながら言った。

本当はそれだけじゃない。それだけだったら唯はわざわざ手を下したりししない。この子に告白されてから祐太はこの子を意識するようになったのだ。

唯が持っている写真に移った女の子は、鉛筆やボールペンを女の子の部分にたくさんさしてあって、全身がロープで縛ってあった。そして体のあちこちに口ウが垂らされていて、その部分が赤くなっていた。顔は苦痛に歪んでいて、目は絶望の色に染まっていた。

「どうしてこんな事……」

鈴香は震える声で絞り出すように言った。

「祐太に変な虫が付かないようにするために決まってる」

そう――全ては祐太のため……。

「いつも祐太に近づく女や祐太が好意を持った女はこうやって消してるの」

そう言いながら唯は笑った。

「いつもそうやって祐太の前から消してるのに、祐太はいつも私とは違う子を好きになるんだよね。どうしてだと思っ？」

唯は鈴香の方を向いた。

「いつも私が側にいるのに……。あ、私と祐太は幼稚園の頃からの知り合いで、幼なじみってやつ？でも私はそうは思ってないんだけどね」

「唯ちゃん私をこの子達みたいにしたいの？」

鈴香の顔は蒼白で今にも倒れそうだった。

「察しがいいのね」

察しがいいも何もこんな写真を見せられ気づくと思っけど……。でもそれだけじゃない。鈴香は私がこういう人間だって気づいたはず。

今まで鈴香を強姦しようと手を回していたのが私だって。

「まあそうか。今までだって襲わそうとしたオヤジ達が逆にやられて帰ってきたしね。私の本性を気づいたのは鈴香ちゃんが初めてなんだよね」

そう……多分薄々は分かっていたよね？誰がそんな事してるのか。今までは私が直接手を下さない限り、なんでこうなったのか分からない子がほとんどで、何も知らないまま女の子達は売られて行った。

「ロリ系が好きなオヤジ達に頼んだんだけどみんな失敗しちゃったから、本当は不本意だけど、自分の手で消すことに決めたんだよね」
鈴香の顔は血が通っていないかのように血色が悪かった。

ふふふ……。もっと顔を歪ませて苦しめばいい。そして償え、祐太をたぶらかした事を……。……。

唯は引き出しからサバイバルナイフを取り出した。

「13」歪親3

「ずっと持ってたけど、使うのは初めてなんだよね」

そう言って唯はナイフを舐めた。

「どういふ死に方がいい？ やっぱバラバラにされて公衆全面に晒されたい？ それともホルマリンにつけて大学に置いておこうか？」

ふふふ……。どれもいいね。でもすぐになんて殺さないよ？ ゆっくり時間をかけていたぶってあげるね。

「唯ちゃんはどうして私をそこまで憎むの？」

どうして……。？ そんなの決まってる。それを知ってるはずなのに、この女はわざわざ私に言わせるの！？ 私をどれだけかにすれば気がすむの！？

「わざと言ってるわけ？ 私があんたを憎んでやまないのは、祐太が初めて本気で好きになった女だからよ！ 今までだって祐太が好きになった子はいたけど、それは恋に恋している程度だった。だからあの程度ですんだんだのよ！ どうして私じゃなくてあんたなのよ！ 私は15年間ずっと祐太だけを見てきたのに、会って半年もしないあんたなんか祐太を盗られないといけないのよ！」

そう……。みんな殺さなかったのはそこまでに至らなかったから。

でもあんたは殺さないと気が済まない……。っ！

なんで特別かわいいわけでも特技があるわけでもない普通の女が祐太に愛されて、ずっと祐太に愛されたくていろいろ努力した私が愛されないのよっ！ そんなの絶対間違ってる……。！

「あはははははは」

鈴香はいきなり狂ったように笑いだし、唯は驚いた。

何こいつ……。とうとう狂ったの？

「私と唯ちゃんどっちの方が狂ってるかな？」

そう言って笑った鈴香の顔は、聖母マリアのように純粹そうに見えるのにその笑みはどこか怖かった。

唯は初めて人を怖いと感じた。

「唯ちゃんはどうやって私が中絶した事を知った？」

……何、いきなり。

唯はいきなり豹変した鈴香を見て警戒の色を現した。

私と同じ人種なの……？分からない……。でもこの女もどこか狂っている。外見は純粋な少女のように見えるが、アンバランスな危険さを感じる……。

「お母さんがあそこの看護師だけど、それがどうしたって言うの？」

「別に」

別に？じゃあなんでわざわざ聞いたのよ？

「訳分かんないんだけど」

この女は何がしたいの？

さっきまでビクビクしてたのが嘘のように堂々としてる……。しかも冷静だ。狂っているようには見えない……。

「でもどうでもいいや。今から私に殺される事には変わらないもんね」

何言ってるんのこの女……。殺すのはこの私。そして殺されるのはあんたよ？人をばかにするのもいい加減にしなよっ！

唯はナイフを鈴香に向け、鈴香を刺そうと手を振り上げた。

すっとナイフが鈴香の顔の横を通って、頬が切れた。けれど鈴香は顔色1つ変えなかった。

なんなのこの女は……。もう恐怖の限界を超えて怖がると事が出なくなつたの？いや……。そんなはずない……。この女はある意味正気だ。

それとも私が怖くないから逃げないの？

「逃げないのね」

唯が不機嫌そうに声を発した。

「だって逃げても無駄そうだし」

この女は諦めてるわけじゃない。本当にそう思ってるだけ……。私は鈴香ちゃんが恐怖に歪む顔を見たかったんだけどね……。」

つまらないね……。そもそもこんなんじや罰にならない。

唯は完全にやる気を削がれてしまった。そしてその隙に唯はナイフを鈴香に奪われてしまった。

「なっ！」

唯は驚きナイフを奪い返そうとしたが出来なかった。

「あんたどうするつもり！？」

唯は焦った。なぜなら今まで反対の立場になった事がなかったから……。唯はいつも狩る側の人間だった。

「唯ちゃんに私の前から消えてもらおうと思って」

「え……。！？」

唯の顔が恐怖に染まる。

鈴香の口調は至って冷静で淡々としていた……。しかしそれは本気だと、その威圧感のある声のトーンで分かった。

「だって、私は祐太を失う訳にはいかない」

鈴香の声は別に懇願するようでも、切なそうな声でもなく相変わらず淡々としていて、唯はそれに恐怖を感じた。自分とは違う執着心を感じた……。

「唯ちゃんにとって祐太は狂わせてしまうアクセルなら、私にとっては祐太はブレーキだから」

意味が分からないし、この女の得体が知れない。

「な、何言ってるんのあんた。頭おかしいんじゃないの？」

唯の声は震えていた。

「それはお互い様」

鈴香はそう言って笑った。あの……穢れを知らないような笑みで――――。

唯今まで感じた事のない恐怖を感じて部屋を逃げ出そうとしたが、鈴香に腕を掴まれた。

痛いっ！あの細い腕のどこにこんな力が……。

「逃がさないから。大丈夫、唯ちゃんみたいに殺そうとは思ってないから」

鈴香の方を見ると、やはり鈴香は笑っていた。

あまりの恐怖に唯はその場にへたり込んだ。

「この顔に一生見れないような傷をつけてあげようか？私は唯ちゃんみたいになんてあげない。生き地獄を味あわせてあげる」

唯はガクガク震えて絶望に染まった目で鈴香を見た。

コノ女八危険ダーーそう本能で唯は悟った。

鈴香は唯の部屋にあった祐太の写真を破りだした。

「やめてっ」

これは私の宝物……っ！祐太がつ、祐太がつ！

写真を破る事は唯にとって祐太を傷つける事に等しかった。

唯は破られた写真を必死にかき集めた。

「気持ち悪いの唯ちゃん。こんなだから祐太に好きにはなってもらえないのよ」

鈴香はそう言って祐太の写真をかき集めている唯の背中を踏みつけた。しかし唯はそれには何も反応を示さなかった。

背中に痛みを感じたがそんなのどうでもいい。写真を集めないと

……。私の大切な宝物だから。

そんな唯を見て鈴香はナイフを唯の顔に向けた。

「ひっ」

唯は悲鳴をあげた。

「やっぱり唯ちゃん。邪魔。生きてても意味ないんじゃない？」

今までだったら言い返していた。しかし鈴香に言われると言い返せなかった。鈴香の発した言葉は今までの人と違って、本当にそうだと思わせてしまうような力があつたから。

「祐太だって唯ちゃんみたいなたに想いを寄せられたら迷惑」

鈴香のその言葉は唯の胸にナイフのように突き刺さった。

存在を否定される事よりも何よりも、祐太に不要だと言われる事が唯にとっては1番怖かった。

「そんなことない！」

けれどもこの言葉は懇願に近かった。

「何言つての？そうに決まってる。いるだけで迷惑。死んだ方がみんな喜ぶよ？」

鈴香は笑顔でそう言いながらナイフを唯の喉にあてた。
本気で私を殺すつもりなんだ……。

怖い。

怖い。

怖い。

怖い。

怖い。

「やっぱり、殺してあげる」

唯は逃げようとしたが腰が抜けてうつぶせに倒れた。

鈴香はそんな唯を見下してナイフを振り下げた。

唯には自分の顔に向かってくるナイフがスローモーションに見えた。

嫌だっ！死にたくない！死にたくない……！私は祐太と幸せになるんだから。そのためにここまで頑張ってきたんだから……っ！

ナイフは唯の顔スレスレで床に刺さった。

唯はあまりの怖さに気を失った。

そして気がつくと手に手錠が付けられており、ぼーっとしてる間に刑務所に入れられた。

唯はあまりその時の事は覚えてない……。嘘だと泣き叫ぶ両親、友達のきつい視線……。どれも曖昧にしか覚えてない。

金をたくさん費やしたので唯の懲役はあまり長くはなかった。

唯は刑務所の中もずっと祐太を思い続けていた。それは執念のよう激しく、しつこさのあるような愛で……。

唯の祐太への愛は薄まるどころか、日に日に濃く、雪のように降り積もり、肥大するばかりだった。

「祐太、祐太……」

唯は1秒だって祐太を忘れた事はなかった。

祐太……、祐太は少しでも私を思い出してくれてる……？

唯は刑務所から出て1人暮らしを始めた。

もともと未成年だった事と、模範生だったためたった3年で刑務所を出ることが出来た。いろいろ金を積んだ事が一番の大きな理由だが。

唯は早速祐太に会いに行こうとした。

祐太が私に会いたくない事は分かってる……でも、でも、会いたい……。

唯は刑務所に入った事で歪んだ心が少しましになっていた。

唯が見たものは、嬉しそうに、そして愛おしそうに鈴香に微笑んでいる祐太の顔だった。

「……っ」

唯は胸がえぐられたような感覚に陥った。

私は……、私はそんなふうな祐太を見た事がない……。今まで祐太が好きになった女に対してもそんな顔見た事なかったのに……っ。本当に鈴香の事が好きなんだ。愛しているんだ……。

唯は初めて敗北感を感じた。どんなに頑張ったって勝てない……と。

唯はその日、悔しくて、悲しくて泣いた。

ずっと前から好きだった。この思いは誰にも負けないのに――
――……。でも祐太の心の中に住んでいるのは鈴香だけ――。

諦める事なんて出来ないと思っていた。この思いは何があっても必ず成し遂げると……。

しかし狂気の姿を隠してしまった今の唯は、その思いが折れてしまった。

けれどもその数日後――鈴香は亡くなった……。

唯は驚きより何より喜んだ。

鈴香が死んだ……！これで私にもチャンスがある……っ！

いつの間にか姿を消していた狂气的な愛が、鈍くなっていた祐太を求めて止まなかった激しいまでの情熱が……、唯の中に蘇った。

今度こそ……どんな事をしてでも祐太を手に入れる……。

唯は今まで酷い事をたくさんしてきたが、祐太が嫌がる事――それだけはしなかった。間接的に祐太が傷つく事をしていたが、直接はしていない。

それは純粹に祐太に愛されたかったから……。しかし、僅かに残っていた純粹ささえも唯は捨てた。

唯は鈴香を失ってボロボロになっていた祐太に近づいた。

始めこそ祐太は唯を拒んだが、もともと唯は兄弟のように仲の良かった幼なじみ……。祐太は最後には唯を許した。そして前のような幼なじみに戻っていった。

祐太はずっと鈴香が亡くなった事を引きずり悲しみに暮れていた。唯はそんな祐太を見て鈴香を憎んだ。

どうして死んでまで祐太を縛るの。鈴香、あんたは死ぬんじゃ足りない……。存在そのものが消えてしまえばいいのに……。

行きようのない恨みを持て余していた唯だが、今度はそれを利用する事にした。

鈴香、地獄で見てなさい……。必ず祐太を手に入れて見せるからね。

唯は悲しみに暮れる祐太にどんどん酒を煽らせ、そして強烈な媚薬を飲ませた。これは最後の最後まで抵抗する女を快楽に溺れさせるために使っていた薬で、かなり強力だった。

だんだんと薬が回ってきて潤んだ目をした祐太に目をむける。

祐太は酒に強かったから勃たないという事はないよね……。

「……祐太」

唯が耳元で囁くように言葉を発すると祐太はピクンツと体を震わせた。

「……っ、悪い。俺帰る」

完全に薬が効いてきたんだね……。

「気分悪い……？」

唯は心配するように祐太に触れた。すると手を振り払われた。

「ごめん」

今触れたらもう理性の糸切れるかと思ったのに……。目の前にはちょうどいい女がいるのに……。そこまで……。そこまで鈴香に操を立てるの？もういないのに、死んだのに……。っ！いい加減私を見てよ！ずっとずっと私は祐太の事見てたんだよ？

唯は祐太の顔を素早く掴んでキスをした。

「……っ！」

唯は祐太の口をこじ開けて舌を絡ませねっとりとしたキスをして、顔を離れた。

「祐太、鈴香の代わりでもいいから……。私を抱いて……」

人の代わりに抱いてと言う事が、これほど悲しい事なんて思わなかった。屈辱的で悔しくて、プライドがずたずたになった気分だった。

でも……。それでも祐太が欲しいから。それによって祐太が悲しむ事になっても、例えどんな汚い手を使っても——……。事

初めて祐太に抱かれる日はきつと今までにないぐらいに幸せなんだろうと思っていた。——でも現実は、ただただ悲しいだけ。胸が驚掴みにされたように苦しくて、そこには喜びなんつひとかけらもなく、悲しみと悔しさ……。その涙しか落ちてこなかった。

初めて処女を捨てた時も辛かった。比べようもないぐらいずっとずっと辛かった……。

祐太は唯を抱きながらずっと鈴香の名前を呼んでいた。それは唯が今まで聞いた事がないぐらい熱くて、甘く、切ない声で——……。……。

「14」歪親4

唯は笑みを浮かべてそれを見ていた……。それとは妊娠検査薬。やっぱり妊娠したのね……。

唯が祐太を誘った日、それは唯にとつての危険日。そして媚薬のせいで祐太は何度も自分の精を唯の中でも放った。もちろん酔いっぶれる直前まで酔っていた祐太はコンドームを付ける事を忘れていた……。

「ふふふ……」

屈辱的な思いはしたがその見返りはちゃんとあった。

祐太の性格からして、唯からおろしたいと言わない限りおろして欲しいと言えない事は分かっていた。しかもあの日……あれは唯から誘ったとはいえ、鈴香の代わりにしていた事に祐太が罪悪感を感じているのも分かっていた。

祐太は唯が自分に好意がある事も知っている。だから余計祐太が唯におろしてなんて言えるわけないのだ。祐太はきつと唯を利用したと自分を悔いているから……。

すべては唯の計算通り……。

もしもの時に備えて唯はおろせないまで気づかなかったように待とうかと思っていたが止めた。明らかにおかしいと思われてしまうからだ……。

きつとそれでも祐太は唯の側にいてくれるだろう。しかし騙されたと感じるだろう……。それが唯は嫌だった。

祐太に愛されたい……。少しでもいいから。

その思いから唯は中期中絶が出来る段階で祐太に告げる事を決めた――。

中期中絶……その時期におろすとなるとお金もかなりいるし、母体もかなり傷つける事になる。初期中絶の時とは違ってもう赤ちゃんが人の形をしている……。

中期中絶をするのはそれなりのリスクを伴うのでしてくれる病院も少ない。

祐太におろすチャンスをおげようと思いつながら本当は逆だった。なぜならそんな負担がかかると分かっているおろすなんて言えるだろうか……？ある意味自業自得だと祐太は思うだろう。そして祐太は罪悪感と申し訳なさから責任を取ろうとするだろう。中絶出来ない段階なら仕方なく、もしくは騙されたと思いつながら責任を取ると言いかもしれない。でもギリギリでも、おろせる段階で責任を取ると言えば、それは祐太が決めた事になる。

”中絶を出来るチャンスがあつたけど責任を取る”と、”中絶が出来ないから仕方なく責任を取る”とでは重みが違う。あくまで決断したのは祐太という事になるのだから……。

18周目になった時に唯は妊娠していると祐太に告げた。

「……祐太。あのね、私妊娠したの」

「え……」

酔っていて記憶はおぼろげだったが、やったという事実は覚えてはいるので、祐太は頭が白くなった。

唯が祐太の所にわざわざ来て告白するという事はその子が誰の子どもか想像はついていても、心のどこかで違う……俺の子じゃないと否定する部分があつて自然と口が開いた。

「俺の子……？」

唯はこくと頷いた。

祐太は自分の犯してしまった過ちを酷く悔やんだ。

唯は心の中ではこれでもかってぐらい喜んでる。これで祐太を縛れる――と。

でももちろん表情には表さない。ごめん……私が気をつけていれは――そういう表情をしている。

「病院は……？」

「行ったよ。もう18周目だって……。生理が不順だったから全然気づかなかったの」

これは嘘。唯の生理はずっと一定で、ほとんど決まった日にきている。遅れたり速まったりすると言っても、またに1、2日前後するぐらいだった。

「祐太……私どうすればいい？」

これがもつと前なら学生だからと断れたかもしれない。今も学生だが、もう就職先も決まっけていてもうすぐで学生という枷はなくなる。つまりもう経済的事情では断りにくいのだ……。

断らないよね？そんな事祐太は出来るわけないよね。けれど祐太から返ってきた答えは違った。

「……ごめん。おろしてくれ」

「え……」

予想外の言葉に唯は驚きを隠せない。

「金は全部払う。もちろんそんな問題じゃないって分かってる。でも、本当にごめん……。唯には本当に悪い事したと思ってる……」

でも責任を取って唯の側にいる方が酷い事だと思うから」

「なん、で……」

責任を取るの方がいいに決まってる！そのためにわざわざ好きでもないガキを孕んだのに……！祐太をつなぎとめる、それだけのために！

「俺はきつと唯を愛せない……」

「そんなのっ」

「俺が本気で愛せるのはこれから鈴香だけだ」

「……っ！」

鈴香、鈴香、鈴香、鈴香！なんで鈴香なの！？

許さない……。あんたの血縁をみんな呪ってやる……。

昔の祐太だったらそんな事言わなかった。優しくて人を傷つける事なんてめったに言わない人だったのにつ。これも何もかも鈴香のせい……。

「……そんな事、させない」

唯はぼそつと呟いた。

「え？」

「うつん。何でもないよ」

祐太……私は諦めないからね……。

唯の祐太への思いはもう執拗なまでの執着に等しかった。

唯は諦めた振りをしながら外堀を固めた。

”この子は1人で生むの。父親は祐太なんだけどね。私は前科があるから仕方ないよね……” 同情を誘うように哀れな女を見事演じた。

初めこそはみな、犯罪者なんだから当然だろうと思っていたが、あまりに不憫そうな唯を見て、周りは責任を取るべきだと祐太に圧力をかけた。近所の人達は唯が具体的に何をしていたか知らなかったからそんなふうと言えたのだ。

その圧力に負けて祐太は唯と結婚する事になってしまった。

これでやつと祐太を手に入れたと思ったのも束の間だった。

祐太はこれまでと同じで幼なじみのように唯に接した。キスはもちろん、子供が生まれてからもセックスもしなかった。

周りからはいい優しいいい夫と言われる……。もちろんお金もちやんと入れてくれるし、浮気もしていない。でも祐太は夫としての夜の役割を果たしてない。

祐太はどうしても私を女として見てくれないのね。こんな関係を望んだわけじゃないのに……！

子供の名前は斎と名付けたが、唯はほとんどほったらかしだった。あくまで目的は祐太であって、自分と祐太の子供だからといって斎に興味なんて抱かなかった。それどころか邪魔でうっとおしいと思っていた。

「おぎゃあ、おぎゃあ」

うるさい、うるさい、うるさい、うるさい……っ！折角殺さないでおいたのに……この役立たずがっ！

唯は斎に虐待を何度もふるったが傷は隠れる所に、そして殺さないで程度に計算してしていた。

もし斎が死んでしまっても事故に見せかける事は出来るだろうが、祐太と別れる危険があるから。そして虐待をしていると知られたらそれこそ別れられるだろうと唯は考えていた。

祐太に対してイライラした事はなかったが、あまりに自分を見てくれないので唯は祐太に苛立っていた。

そんなに鈴香を想っているのなら、いつそ誰も愛せないように祐太の心を壊してしまおうか……そう考えてしまうほど唯は歪んでしまっていた。けれども唯はそれが人とは少し違うと思っていても異常だとは思っていない。

そんなある日、祐太は唯が自分の子供を虐待している事実を知ってしまった。

「うるさい……！少しは静かにしなさいよ！」
「ばん……！！ばしっ！！ばしっ！！」

「唯……」

唯はハッとして声をした方を向いた。
まだ帰ってくるには大分早い時間だった。

「祐太……」

「なんで、なんで？それよりこの状況をどうしたら……っ！」

「おぎゃあ、おぎゃあああ」

張り詰めた空気の中、斎の鳴き声だけが異常に響き渡った……。

「お前……いつから」

「……」

「いつからだって聞いてんだよ！」

唯は何も言えなかった。

「唯……、もう別れよう」

「……っ！」

「唯だけが悪いんじゃない。始めから無理があっただ……」

「そんな事……っ」

「どちらにしろ、俺はもう唯とはやっていけない」

「そんな……！嫌よ！嫌よ……っ！そんなの私は絶対に認めないか

らね！

結局唯は納得しなかったが祐太と唯は離婚する事になった。

「15」歪親5

「斎……今まで気づいてあげられなくてごめんな」

斎は泣き疲れたのかぐっすり眠っていた。

離婚はスムーズにはいかず、2年たつてようやく離婚する事が出来た。唯の祐太への執着はまるで呪縛のようなしつこさがあり正直祐太は恐怖を感じた……。

「これから2人で頑張ろうな」

そうは言うものの、祐太はまだ26歳で下に兄弟もいなかったの
で子育てなんて右も左も分からなかった。そんな祐太を支えてくれ
たのが家族だった。祐太は4人家族で、父、母、姉がいて、父も母
ももう60過ぎで姉は自分より10歳も上だった。

特に斎の面倒を見てくれたのは姉だった。

父も母も仕事人間で、父は小さな会社だが社長を、母は学校の理
事長をしていた。姉も教師をしていて多忙であったが、バツイチで
その理由が子供を生めない体だったからだだった。だからこそ姉は自
分の子供のように斎をかわいがってくれた。

しかしそんな穏やかな生活も10年たったある日壊れていった。

祐太！祐太！どこ……？どこにいるの？

「うあああああ！！祐太はどこ！私にかえせええええ！」

唯は祐太と離婚してから半狂乱だった。家族はそんな唯を手に負
えず、精神科の病院に連れて行った。

「何、ここ……。私は正常よ！こんな所に入れられるぐらい気違い
じゃない！私は祐太を見つけるんだから、この手をはなせ！！」

唯はあれから髪の毛はボサボサで肌もボロボロ。目の下にはくっ
きりとくまができていて、顔はやつれ、祐太と離婚してからまだ半
年しかたっていないのに、まるで10歳も老けたように見えた。

「唯、落ち着きなさい」

そう言った母親を唯は思いっきり睨んだ。

落ち着いて……？落ち着いてなんていられるわけじゃない！早くしないと祐太の心が完全にはなれてしまう……。

唯は結局無理やり病院に行かされて、よくわからない病名を付けられ、しばらく入院する事になった。

唯の家族は内心ほつとしていた。家族の誰も唯を手を負えず、唯に恐怖心を抱いていたからだ。

「はずせえええ！！」

唯は他の患者に暴力などふるう可能性があるという事で家族の許可のもと拘束されていた。

「こんな事してただですむと思っているの！！殺しててやる！殺してやるうう！」

唯はいつも看護師が来ては同じ事を言っていた。

唯のきつい睨みを受けながら恨みのこもった言葉を聞くと、恐怖に震えたり鬱になる看護師もいた。

何年経っても唯は入院した時と変わらなかった。始めから諦め気味だった唯の両親も唯はもう普通には戻らないだろうと完全に諦め、ただでさえ少なかったお見舞いももう来なくなった。

唯はそれに対して別に何も思っていなかった。唯の頭を占めるのはいつも祐太の事だった。

「どうして私の所に来てくれないのおお！！いい、それでもいい！私が祐太を追いかけるから……！ずっとずっと何があっても……」唯が発する言葉は支離滅裂だった。

唯はこのままじゃここを出られないと思い、だんだん叫んだりする事を止めていった。

一刻も早くここを出ないと……。祐太、会いたいよ。

そして唯がやっと退院出来た時にはすでにあれから8年の月日が経っていた。

一応両親の家には帰ったけど、唯の両親はもう唯の面倒はもう見れないと手切れ金として500万円を渡した。もちろん祐太の居場所も教えてくれなかった。

唯はそのお金をで探偵を雇い祐太を探したが見つかる事は出来なかった。

誰かが祐太を隠したの？もしくは祐太が私にばれないようにしている？

けれど唯は祐太を諦めなかった。血眼というよりはじっくりと細かく、見落としがないように探した。そして、1年と少しというところで唯はやつと祐太を発見した。

祐太……、祐太……、やつと見つけたああ。もう何があっても逃がさないからね……。ふふふ。

唯はその日すぐ祐太には会いに行かずに、祐太の周りをいろいろと調べ始めた。

「バツイチ、独身で子持ち。私と離婚してから誰とも付き合っていないだね」

祐太はやつと私の思いに気づいてくれたの？やっぱり祐太は心のどこかで私が好きだったのね。だから私に悪いって思ってた誰とも付き合ったりせずに私を待っていてくれたのね。もう……。っ、やつと素直になってくれたのね！

唯はもう現実と妄想を混濁させていて、明確な判断が出来なくなっていた。

唯は祐太を見つけてから1ヵ月後に祐太に会う事にした。

祐太喜んでくれるかな？ううん、きっと喜んでくれるよね！

ピンポーン

「どちら様ですか？」

祐太のお母さんだね？どうしよう、緊張する！

「あ、唯です。昔お隣にすんでいた江藤唯です」

「……唯ちゃん？」

「はい……。っ！」

「ちよつと待ってね」

――ガチャ

「どうぞ」

「ありがとうございます！」

唯はリビングに通されお茶を出してもらった。

「あの……祐太は」

唯がそう聞くと、祐太の母親は困った顔になった。

「祐太は、あなたに会いたくないみたいなの」

「え……」

そんなばかなはずはない。だって祐太はやつと自分の本当の気持ちが分かったんだよね？……もしかして今までお見舞いに来なかった事悪いって思ってるのかな？気にしてないって言えば嘘になるけど怒ってないよ？だって祐太も苦しんだんだよね？だから許してあげるよ。

「でもね、私はあの子に母親に会う権利はあると思うの」

「え……」

母親？あの子？

「え……？斎に会いに来たんでしょう？」

斎……？誰それ……。

「あの斎って誰ですか？」

「誰って……あなたの子供でしょう？」

子供……？私の？

ズキッ

『この役立たずが！』

『おぎゃああああ、おぎゃあ』

「……っ」

思い出した。あれね……。私があれに会いたって？もう2度と顔も見たくない……。泣き止まなくてうるさし、何にも自分で出来ないただの物体。

「大丈夫？」

「あ、大丈夫です」

「……斎の事覚えているでしょう？」

「はい」

「びつくりした。一瞬忘れたのかと思ったわ。でもそんなはずないわよねえ。あんなにかわいい自分の子供なんだもの……」

「……」

「あの事は祐太に聞いたわ……。でもそれは唯ちゃんだけの責任じゃないわ。誰も支えてくれる人がいなかったんでしょう？あまり自分を責めないでね」

「……はい」

別に責めたりはしていないけど、今はそんな事はどうだっていい。祐太は？祐太はいつ帰ってくるの？

「もうすぐで帰ってくると思うから待つてる？」

「あ、はい。あの……祐太はいつぐらいに帰って来るでしょうか……」

「……」

「……祐太には会わない方がいいわ」

私達は愛し合っているのにどうして？このままじゃすれ違ってしまふ……。でもこの様子だと祐太に会わせてくれなさそうね。

「今日はもう帰ります……。また日を改めて来てもいいですか？」

「ええ、いいわよ。きっと斎も母親に会えるのを楽しみにしてるわ」

唯は妖しい笑みを浮かべて祐太の家を去った。

祐太……もうすぐで会えるね。

唯は家族がいると祐太がいろいろ気にするだろうと思い、仕事場で祐太を待った。

「祐太……！」

祐太を見つけた唯はすぐに祐太に駆け寄った。

「……唯？」

祐太は驚いた顔をしつつ口を引きつらせていた。しかしそんな祐太に気づかずに祐太のもとに駆けていった。

「会いたかった……」

唯は祐太に抱きついた。

「おいっ」

祐太はそんな唯を引き剥がした。

祐太ったら照れてるのかな？照れなくてもいいのに……。

「ずっと、ずっと会いたかったんだよ？祐太もそうだったんだよね？会えなくてごめんね……」

そう言うなり唯は祐太の顔を両手で包んで深いキスをしようとしたが、祐太に手を振り払われてしまった。

「祐太？」

「なんでここが分かったんだ」

「なんでって……探したからだだよ？ごめんね、遅くなって」

「もう俺達は終わったんだ」

何？何を言ってるの？私達は愛し合っているのに……？

「祐太、どうしたの？」

「はつきり言って迷惑なをだ。もう唯とやり直すつもりはないし、斎に会わせるつもりもない」

え……？

「唯、もう俺の事は諦めてくれ」

「な、んで、そんな事……言つの……？」

祐太は私の事愛してないの？ううん、そんなはずない。だって私のために操まで立ててくれたんだから。

「10年以上たった今でもやっぱり好きなんだ……」

唯の顔が自然と綻ぶ。

祐太はやっぱり私を愛してるのね……。けれども唯の期待は裏切られる事となる。

「愛しているんだ……。今でも鈴香ただ1人を」

すずか、スズカ、鈴香……？

「鈴香……」

ああああああ……！！

あの女ああー！！もうこの世から消えているのに、何年も、何年も祐太を縛り付けている憎い女！

あんな女を、あんな雌豚をいつまで祐太は思ってるの！？あいつにそんな価値なんてないのに……！

祐太は私のものなのに……！いつまで待てば祐太は鈴香の呪縛から解けるの！？

もっ……これ以上は待てない……。

唯はカバンに手を入れた。カバンの中の物を素早く抜いてスイッチを入れて祐太の体に当てた。

パチパチパチ

祐太は目を見開き、一瞬にして地面に倒れ込んだ。

「祐太ごめんね……。でもこれは鈴香の呪縛を解くためだから」

唯はそう言いながら妖しく笑った。

私ダケシカ目ニ映ラナイヨウニシテアゲル……。

「ふふふ……」

唯が持っていたのは強烈なスタンガンだった。

ここどこだ……？

祐太が目を覚ますと、薄暗い部屋の中にいた。

ジャラ

「……っ」

なんだこれ！鎖……？

よく見ると手足が全て鎖に繋がれていた。

なんだよ、これ……。っ。一体どうなってるんだ！

少したって冷静になった祐太はなぜこんな事になったのか考え始めた。

いつもみたいに仕事に行って……。

「……っ」

そうだ唯に会ったんだ！そっからなんか話してたのは覚えてる……

……。でも途中から記憶がない……。という事はこれは唯が……。！？

背筋がぞくりとした祐太はここから一刻も早く逃げようと手足がむしやりに動かしただが鎖が切れる気配はなかった。

――ガチャ

「祐太、起きたの？よかった……！」

そう言っただけは祐太に抱きついた。

「おいっ！これはどういう事だよ！」

「……だって、こうでもしないと祐太逃げるよね？」

「当たり前だろ！早くこれ取れよ！」

そう言っで祐太は鎖を動かした。

「だめ。祐太はずっと私とここにいるんだから……」

そう言っで唯は妖しく笑った。

「ふふふ……。これからはずーっと一緒だからね？もう逃がさないから……」

祐太は唯の嬉しそうな、けれども有無を言わせないような顔を見て本気だと悟った。

「こんな事してどうなるか分かってんのか……。これは立派な犯罪だろ！？」

「犯罪……？愛する2人が一緒にいて何が悪いの？」

「はあ？俺はお前なんて好きじゃない！好きなのは鈴香だけだっって言っただろ！」

祐太がそう言っただ瞬間、お腹に鈍い痛みが走った。唯が思いっきり祐太を蹴ったのだ。

「祐太……、嘘でもそんな事言ったら許さないよ？」

唯は笑っていたが目が笑っていなかった。

本能的に恐怖を感じた。もうこいつには何を言っても無駄だ。こいつは完全に狂ってる……。逆らわないのが懸命な判断だろうが、ずっとこのままにいるつもりなんてさらさらない。チャンスが来たらここから逃げよう——祐太はそう心に誓った。そしてその日から祐太は唯に順応になった。

祐太はやっぱ私を愛していたのね……。祐太は毎日私に好きっで、愛してるって言うてくれる……。祐太にそう言われるのは初めてで、まるで中学生みたいに舞い上がった……。やっと、やっと祐太を手に入れた……！

祐太が自分を愛してると思ひ込んだ唯は、だんだん祐太の鎖を1本……また1本と外していった。しかし最後の1本だけはなかなか

外さなかった。

「唯、まだ俺の気持ちを疑ってるのか……？」

「そんなんじゃない……、でも鎖を外したら祐太がここからいなくなってしまうんじゃないかって不安なの……」

唯と祐太はあれからキスもして体も重ねた……。唯にとっては幸福な時間であり、祐太にとつてら苦痛の時間だった。

「唯……俺を信じろ……。俺はお前を愛してるよ」

祐太は愛してるや好きと言う時、主語を決して唯とは言わなかった。それは祐太のささやかな抵抗だったが、唯はそれに気づいていない。

そして……、唯はとうとう最後の鎖を外した。

祐太はこれで逃げられる……！とほっとしていたが、それが安全のための鎖だったと知らなかった——……。

「16」歪親6（前書き）

唯がかなり狂っています（．．．） 閲覧にはご注意ください。

「16」歪親6

祐太は久しぶりの自由な体に開放感を覚えた。しかしこれで全てが解決した訳ではない。これからどうやって逃げるのかを考えなくてはならない。

鎖を外してもらったっていつても、すぐに逃げられるわけじゃない……。

家から出るドアの鍵は全部で5つも付いていて2つは鍵、2つは暗証番号、そして最後の1つは指紋照合式……。そして自分の部屋にも外側からかける鍵が2つ付いている。しかも窓もすごい鍵がかかっていて、その上からダンボールで外から中が見えないように完全に防備している。

周りの奴らはこれをおかしいとは思わないのか……？ いや、思っていると思うが、唯に声をかけられないんだろ……。取りあえずしばらくはまた様子見だ。唯が俺を完全に信じたら逃げるすきも出るはず……。

祐太は周りから助けが来るというのは諦めた。唯が相手では警察でも歯が立たないだろうと思ったのだ。

そうして祐太は3カ月ずっと我慢した。ただ”逃げる”それだけを考えて――。そしてとうとうその日が来た。

唯が祐太に買い物に行こうと誘ったのだ。

「祐太を信用してないわけじゃないよ？ でも一応ね……」

そう言っただけは信じられない物を祐太に付けた。

それは首輪だ。見た目はファッションぽいのでチョーカーに見える。でも祐太には首輪にしか見えなかった。飼い主が飼い犬に付けるような……。まるで祐太は唯のものだという証のように見えた。でもそれだけだったら別にいい、問題は次に唯が言った言葉だ。

「これ、爆弾がついてるからね？ 私から逃げようなんて考えちゃダメだよ？」

まさか……嘘だろ？

しかし今までの唯を見ていたらやりかねないと思った。

祐太は背筋が寒くなるのを感じた……。

でもそれと同時に唯が俺を殺すはずないという確信があった。唯が俺に危害を加えるのは何度もあるが、唯は俺に依存しすぎている……。だから唯はどんなに俺に切れて暴力を振るったりしても殺しはしないはずだ。

祐太は震える手で首輪に触れた。

「嘘だと思ってる？」

「え……、いや」

「ふふふ……。本当だよ？これがスイッチ」

そう言って唯は笑いながら祐太にスイッチを見せた。

「……っ」

本気が……？

祐太は本能的な恐怖を感じた。

俺は唯から逃げられるのか……？いや、逃げられるのか逃げられないかじゃない。逃げないと俺が狂ってしまう……。

祐太はもう精神状態がギリギリだった。唯から逃げる——それだけを支えに今まで正気を保ってこれたようなものだった。

「じゃあ行こっか、祐太！」

唯はデート気分でルンルンだったが、祐太にとっては拷問でしかなかった。

必ずスイッチを奪って今度こそ逃げてやる——。祐太はそれだけを考えながら唯に従った。

唯は祐太のために服や靴、祐太の好きな食べ物をいろいろ買った。全ては祐太に喜んでもらうために——。

「祐太他に欲しい物とかない？なんでも買ってあげるからね」

唯はどこでこんなにお金を儲けてくるのか祐太には疑問だった。家にかけてある鍵だってかなり高性能で明らかに普通の奴だったら買えないだろうと思うぐらい高い物もあった。でもそれは知らぬ

が仏と言うものだった。

唯は捕まる前にしていたような事を懲りずにやっってお金をたくさん儲けていたのだ。レイプ、薬の運び屋、人身売買なんでもしていた。全ては祐太を閉じ込めるために――。祐太を離さないために――。

「いや、別にいい。あのさ唯、俺も働きたいんだけど……。なんか女に奢ってもらうのは気が引ける……」

それは本音だか目的は違う……。唯から離れたいのが1番の理由だった。しかし唯がそれを許さないのも分かっていた。

「……祐太。気にしなくていいよ？私がしたくてしてるだけなんだから。祐太はいつでも私を愛してくれていたら、それだけでいいんだから……」

唯はそう言つて祐太の手を握った。

唯はそれが祐太にとつては1番苦痛だと気づいていない――……。……。

祐太にとって唯の手は重い鎖のようにも、そして絡めつく蛇のようにも見えた――。

唯は祐太を試してみようと思った。それは祐太を完全に信じてはいないという事――。

祐太は私を裏切ったりしないよね？そう思いつつ不安になる。本当に私を愛してくれているのか、もう裏切ったりはしないのか。

唯はお手洗いに行くと言つてあげ祐太にカバンを預けた。スイッチの入っているカバンを――。

祐太は信じられない気持ちでカバンを開けた。

「これだ……」

カバンの中にはスイッチが入っていた。

これは罠か……？それとも唯が俺を信じてくれた……？分からない。でもこれが最初で最後のチャンスかもしれない。

祐太は意を決して逃げる事にした。スイッチを壊れ物のように持つとその場を去った。

「はあ、はあ、はあ」

心臓がうるさいぐらい鳴ってる……。手は有り得ないぐらいの冷や汗でベトベトしている。

もうあれから20分たった。唯は俺が逃げていることなんてとっくに分かっているはず。でも何も起きていない……。つまり俺は成功したのか？

「はは……、やった！これで俺は自由だ！やっと、やっと……っ！」

どこにいけない？警察……？自分の家……？

やっぱり警察か……？だが、家族の安否が心配だ……。

祐太は迷った結果自分の家に向かった。

「祐太。信じてたのに……。もう許さないよ」

そう言っただけで歪んだ笑みを浮かべた。

祐太は体を動かすのが久しぶりだったため、すぐに息が切れて体も思うように動かなかった。

祐太は唯のカバンに入ってたお金を使ってタクシーで自分の家に向かった。

「……斎」

タクシーにいる間も気持ちははやるばかりで、祐太は息子の事が気になって仕方なかった。

「お客さん、着きましたよ」

「ありがとう。お釣りはいらさない」

そう言っただけで運転手に万札を渡した。

もう斎は学校から帰ってきてるだろうか……？姉さんや母さんは多分帰って来てないだろう。

「お父さん……？」

声をした方を見ると、そこには驚いた顔をした斎がいた。

「斎……っ」

祐太は斎に駆け寄ろうとした。

「あ……、父さん危ない！」

「え……？」

祐太は頭に鈍い痛みを感じて気を失った。

「あ、ああ……。父さん……。っ」

悲鳴のような声を上げながら斎は祐太に駆け寄った。

「父さんっ、父さん……。！」

そんな斎を見下ろしている女がいた。それは唯だった。

唯は首輪に発信機と盗聴器をつけていたのだ。だから祐太がどこに行くのか手に取るように分かった。

「斎……」

自分の名前を呼ばれて斎は顔を上げて唯を見た。

「……」

斎は怖さで竦みそうになりながらも唯を力いっぱい睨んだ。

「祐太に似たのね……」

そう言っただけはしゃがみ込み斎の顔はじっと見た。

唯が斎に触れようとした瞬間斎は唯の手を振り払った。

「このくそガキが……」

そう言っただけは斎の顔をぶった。

「……っ」

「今日の事はもう忘れるのよ……」

バチッ

「う……。っ」

斎は気を失った。

どうすれば祐太が私から逃げないのか……。その答えを唯は出した。

唯が祐太を連れてきたのは大きな倉庫……。ただの倉庫ではない、冷凍庫だ。

「祐太……。ずっと私といってね」

唯は注射器を出した。

「大丈夫……。まだ凍ってないね」

でも凍ってしまうのは時間の問題だった。

唯が持っている注射器に入っているのはカリウム水溶液。ただの

カリウム水溶液ではない。濃度はかなり高く致死量だ。

「愛してるよ……」

そう言っただけは祐太に注射を刺した。

そつと唯は祐太に口付けする。もう心臓が止まり時が止まってしまった祐太に――。

唯にとつてこれが祐太に対する愛情表現だった。

冷凍庫にいるということもあり祐太の体はすぐに冷たくなった……。

「ああ……、祐太。私幸せだよ」

腐る事も朽ちる事もなく私と一緒にいてね。私の命が尽きるまでずつと、ずつと……。

「はっ、はっ、んん……っ。好きよ祐太……、愛してる」

息を荒げながら唯は祐太と繋がった。

「祐太も興奮してるのね……、こんなに硬くしてっ。ああ、きもち……」

死姦をしているという意識はもうなかった。ただ愛し合っている――それだけしか思っていなかった。

唯は完全に狂っていた。薬漬けになっているように目はいつていた。

唯にとつては今までで一番甘美で満たされていた時間だった。けれどもそんな時間は長くは続かなかった……。

隠していたつもりだったが、祐太の死体が仕事場の人間に見つかったのだ。

唯は警察にすぐに捕まり、今までしていた犯罪が次々明らかとなつて、死刑判定が出てもおかしくなかった。けれども精神判定の結果、懲役15年に確定した。

そして何年たった今でも唯は祐太を想い続けている……。そして夜になると狂ったように祐太の名を呼び続けている。

「16」歪親6（後書き）

気分を害してしまった方、申し訳ありません。次からは本編に戻ります。

「17」 発狂

虐待か……。

さつきから古賀の言った事が頭から離れない。古賀の話を聞いてすぐに寮に戻った。

茜がいなかった事にほっとしながらベッドに倒れ込んだ。

どうやって接すればいい？そればかり考えてしまい、今までどうやって接してきたのか分からなくなる……。

「理香？寝てるの？もうご飯んだけど……。早く起きなよ」

「あ……。うん」

あれ？いつの間にか寝てた……？

「あたし先に言っとくからね」

「……分かった」

別に茜に何の変化もない。よく考えたら変化するとしたら自分が色眼鏡付けてるって事なんだけど……。

茜が部屋から出て行ったのを見て、すぐに起き上がって髪を適当に整えた。

時計を見るともう6時半で、改めて爆睡していたんだと思った。でも古賀の言った事が正しいとすると、虐待を受けていたのは程度は違うけど茜だけじゃないって事……。何人もそんな子がいるんだ。

重い足取りで1階に下がっていった。

「理香遅い！もう食べる時間なくなるよ？」

「ん……。なんかまんまり食欲なくて」

それは本当の事だった。多分今の私は顔色もあまり優れていないだろう。

「大丈夫……？」

茜が心配そうな顔をして言った。

「大丈夫だよ」

私なんかより茜の方が元気そう……。私の考えすぎか。そう思うと少し体が軽くなった気がした。

そもそもかわいそうとか、どうしたらいいとか、そう思ってる時点で偏見だ。何か起こればその時に考えればいいよね……？

そうは思うものの、やっぱり気になつて茜をちらちら見てしまう

……。

「あたしの顔に何か付いてる？」

とうとうそう言われてしまった。

「え、うつん」

そう言つて顔を逸らしてしまった。

……感じ悪いと思つたかな。

「理香どうしたの？なんか今日、変……」

「……ごめん」

「や、責めてるわけじゃないよ？」

茜は焦つたようにそう言つてくれて、余計に申し訳なさを感じた。

「はあ……」

これならいつそ話してくれなかった方がよかったかも。でも古賀だつて親切で言ってくれたわけだからなあ……。

そんな事を悶々と考えている間に就寝時間になつて、相変わらず心配してくれている茜に悪いと思いながら布団を被つた。

ザアアア……

いつの間に降つてきたのか、余りにも激しい雨の音に目が覚めた。あ、そう言えば窓開けっ放しだったけ……。このままじゃ床塗れちゃう……。

まだ寝ぼけたままの目を擦りながら窓に近づいた。

うわっ、水しぶき飛んで来るじゃん……。

風も強くてカタカタ網戸が鳴っていた。

「ん……、んっ」

風のせいでなかなか窓が閉まらない。

両手を使つて窓を閉めようとした時……

ピカツ！！！

「……っ」

雷！？

ゴロゴロ……

しばらくしてから小さな音聞こえてほっとしたが……

ピカツ！！！！

ガラガラガラ！！ドンッ！！

「ひっ……」

近くで落ちた……！？

「きゃああああー！！」

「……っ！？」

後ろから叫び声がして驚いて振り返ると、体をガタガタ震わせた茜がいた。

「茜……？」

雷の音に驚いたのかな……？

「いやああ！来ないで……っ！ごめんなさい、ごめんなさいっ！」

茜の側に寄ろうとしたらいきなりそう叫ばれた。

茜は怯えた目をして体をガクガクと震わせていて、ただ事ではないと分かった。”いきなり叫び出す事とかあるらしい……”古賀が言っていたその言葉を思い出した。

「茜……？」

もう1度声をかけても相変わらず”ごめんなさい”と謝るだけだった。

どうすればいい……？そうだ、誰か呼べばっ……っ！

「殴らないで、いい子にするから……。ごめんなさい、ごめんなさい」

そう言い続ける茜を気にしながら部屋についてある電話の受話器を急いで取って、寮のおばちゃんに電話をかけた。

たぶんパニックになっていて、言っていた事は支離滅裂だったと思う。でも寮のおばちゃんたちはすぐに部屋に駆けつけてくれた。

「本庄さん、もう大丈夫だから……、お母さんはもうここにはいないから」

「いやあ！いやあああ！！」

過呼吸になりながら苦しそうにおばちゃん達をはねつけようとする。でもとうとう息が苦しくなったのか、茜は倒れ込んでしまった。

それを見たおばちゃんは袋を茜に被せ、なんとか息を整えさせた。そして息が整ってきた茜に薬と水を渡す。茜はそれを掴みとって飲んだ。

「はあ……、はあ。……すいません」

茜はおばちゃん達の方に顔を向けながらも、目を逸らしながら言っただ。

多分こんな所を見られなくなかったのだろう……。

「いいのよ……。入学する前に言っただでしょ？あなたはが謝る事じゃないでしょ。悪いのはあなたじゃないんだから」

「……」

「ほら、涙を拭って」

そう言っておばちゃんはハンカチを渡した。

「……っ、すいません」

茜は隅の方で噤り泣いていた。

「今日は落ち着くまでそつとしといてあげて……」

「……はい」

「あの」

”家でどんな事があつたんですか”そう続けようとしたが、おばちゃんに止められた。

「詳しい事は直接本庄さんに聞いてちょうだい。私達が言う権利はないから」

「……はい」

何となく、茜と違って冷たく感じたのは気のせいだろうか？でもよく考えたらあんな状態の茜と私が同じように接されるわけないか……。

「出来るだけあの子を支えてあげてね……」

「は、い」

支えるってどうやって……？ 私にはとても出来そうにない。今だって自分の事でいっぱいっぱいなのに……。

”支えてあげてね……” おばちゃんはそのを軽く言っただけなんだろうけど、私には重く感じた。

茜が落ち着いて眠ったのでおばちゃん達は自分達の部屋に帰って行った。

お兄ちゃんから逃げるためにここに来たのに、なんかいろいろ大変そう……。

「はあ……」

嵐が止んで静かになった外を見ながらため息をついた。

その夜は茜の事が頭でぐるぐる回って、なかなか寝つけなくて、眠れれそうになった時にはもう朝方になっていた。

「理香！起きて！」

「……ん？」

「起きないんだったら、置いてくよ！」

「え！？」

ガバツと慌てて起きて時計を見ると、もう7時半だった。

「ちょ……っ！もう朝ご飯の時間終わってるじゃん！」

寮の朝食タイムは6時半から7時半までで、それを過ぎるともうご飯を出してくれないのだ。

「何で起こしてくれなかったの……」

「何回も起こしたのに全然起きなかったんだよ……」

呆れたように茜は言った。

あまりにもいつもと変わらない茜を見て、一瞬昨日の事が夢のように思えた。でもあんなに鮮明に覚えているのに夢のはずない……。

「ん……、ごめん」

そう言っただけで学校に行く準備をしたけど、茜は週番で早く行かないといけなかった。茜は先に行ってしまった。

「はあ……」

なんとなく茜と同室の事が重荷に感じる。変に身構えてしまうというか、気をつかってしまうというか……。茜はそんなふうに接して欲しくないと思う。でも今の私には普通に接する事が出来ない。

――例えそれがそれが偏見だと分かっている……。

相談したくても昨日入学したばかりの高校に親しい友達なんているはずない。

「古賀に話してみようかな……」

1 人事のようにぼつりと呟いて自分の部屋を出た。

「18」距離

「セーフ……」

なんとかギリギリに教室に着くと、ほとんどの生徒がいてこつちを振り返った。

別に私を見ようとしたんじゃないくて、ドアの音で反射的にこつちを向いたのは分かるけどなんとなく恥ずかしい……。

私が席につくとちょうどチャイムがなって、ほんとに危なかったな……とひしひし思った。

それから1分もしないうちに古賀が来て、今日する事を軽く説明していった。

朝は古賀に相談してみようかとも思ったけど、なんか自分の事が自分で出来ないみたいでなんか嫌だなあ……。ただでさえこの前助けたもらったのにまた助けてもらうというのは申し訳ないのもあるけど、自分のプライドみたいなものがそれを許さないというか……。

「はあ……」

「木下さん僕の話聞いてる……?」

「は?」

知っている声なのに、声のトーンや口調が全然違って、思わず「は?」と口から出てしまった。

「……木下さん、話聞いてませんでしたね?」

いや、まあそれは否定しないけど……。あんな誰だ!なんでそんなに気持ち悪い口調になってるの!?やばい。”僕”って誰ですかって思わず聞きたくなったよ……。っ!

「今日放課後残って下さいね?」

そう言っただ奴は笑ったけど目が笑ってないよ!っていうか怖い!

「はい分かりました。古賀……先生」

古賀に負けないうちに私も思いつきり笑ってやった。

「すいません。話を続けますね……」

そう言って古賀は中断していた話を再開した。

今日の予定は自己紹介と校内オリエンテーション。昼までで学校が終わり、帰ろうとしたら古賀に呼び止められた。

「……何？」

「放課後残って下さいって言ったでしょう？」

「あー……」

そう言えばそういう事言ってたっけ……。すっかり忘れてた。

それにしてもこの作り物みたいな笑顔キモいんですけど……。これは学校用の顔だと思うけど、はじめに地を知っちゃったからなあ……。他の子はなんとも思わないのかもしれないけど、かなり違和感感じる。

私は古賀に茜の事を教えてもらった場所に連れて来られた。

……もうあの時のような恐怖は感じない。

「別に本性ばらしたりしないから安心してよ？」

どうせこの事だろうと思って先に口を開いた。

「はあ？別にそんなのどうでもいいし。俺がお前を呼んだのはその事じゃねえよ。だいたい、お前が俺の事言っただとしても誰も信じるわけねえだろ？晴れてお前は嘔吐き扱いだぜ？」

「……」

なんだこの自信は……。っ！なんで私よりあんたの方が信頼されてるって自信持つて言えるわけ！？

私のそんな考えが分かったようで、古賀はばかにしたように笑いながら口を開いた。

「お前みたいながキと違って、俺はいろいろ経験積んでんだよ」

「つまり年寄りって事か……」

「はあ……。なんでそんなひねくれた事しか言えねえの？」

「だって本当の事じゃん」

「……はあ。このままじゃ話が進まねえから切るわ」

古賀が折れた形になったのに、なんか呆れられた感じで敗北感みたいなものを感じた……。

「昨日、大変だったんだろ？」

「え……、なんで知ってるの？もしかしてストー」

「ストーカーと続けようとしたら頭を軽く叩かれた。」

「なわけねえだろ」

「いたっ！頭悪くなったらどうするの！」

「悪くなるほど頭良くねえだろ」

「……っ」

確かに頭はそんなに良くはないけど、悪いって訳でもない。少なくともこの学校では上位のはずだ。

「寮にいる美、相沢さんに聞いたんだよ」

さつき下の名前で呼ぼうとしたよね？それだけ仲良いつて事……？

私はあの人達の事おばちゃんって言ってるけど、全員が全員おばちゃんって訳じゃない。2、3人だけ若い人がいる。

「あのおばちゃんと仲良いんだ？」

相沢って人が誰なのか分からないけど、敢えておばちゃんと言った。

なんか分からないけどもやもやって言つか、変な感じがする。

「……別にそんなんじゃないし」

そう言っつて古賀は目を逸らした。

怪しい……。

「もしかして彼女……？」

「ちげーし。……ただの元力ノだ」

元力ノ——なぜかその言葉が頭に響き渡った……。

「今日見る限り本庄は大丈夫だったみたいだが……、お前はあんま元氣ねえよな？」

「……」

なんで分かつちゃうんだろ。確かに昨日の事でちよつと落ち込んでいたのは事実だ。でも……、それを古賀に言ってもいいのかな。呆れられたり薄情とか言われたりしないかな。

「この学校はな、虐待されてる奴には優しいがそうじゃない奴には

冷たいところがあんだよ」

「……え」

でもそれって仕方ない事なんじゃないの？

思っていた事が顔にでていたようで、古賀は私の疑問に答えてくれた。

「この学校で働いてる奴らは教師も寮の奴らもほとんどこの卒業生なんだよ。そんでほとんどが虐待を受けてきた奴らだ。だから虐待を受けてない奴らを妬んでるっていうか、ムカついてる――みたいな奴が多いんだよ。もちろんそうじゃない奴だってたくさんいるぜ？」

そう言われてみれば教師のほとんどが女の人だったけ。その時あんまり何も思わなかったけど、今なら頷ける……。

「だからお前が本庄の事に戸惑ったり、嫌だとか思ったらほとんどの奴らはお前の気持ちなんか考えねえで、酷い奴だとか、最低とか思う奴が出てきたりしやがんだよ」

古賀はさもめんどくさそうに眉を寄せながら言った。

「だから、なんかあったら俺に言えよ？他の奴らはあてになんねえから」

そう言って古賀は私の頭をくしゃつと撫でた。

古賀のその言葉に私は救われた気がした。

……心が軽くなった。

あんな事を思っていた私を非難せず、そして私に安堵をもたらしてくれた……。

「大体なあ、いきなりの寮生活に戸惑ってんのにいきなり普通じゃない奴とルームメイトになってストレス感じねえ訳ねえだろ……。少しは一般生徒の気持ちも考えろよな――」

古賀は独り言のようにそう言った。

「昨日みたいな事はこれから何回もあると思うが、あんま気にすんなよ？」

「……うん」

自分の弱さを見られたみたいで少しだけ恥ずかしがったけど……、でもきちんとこういう事は言うべきだと思って口を開いた。

「……ありがとう」

恥ずかしくてきつと情けない顔をしていると思ったから古賀の顔が見れなくて、俯きながら私はそう言った。

「はっ、お前に礼言われるなんてな！顔あげてみるよ」

「……嫌」

2回目だし、確かに感謝みたいな物はしてるけど、やっぱりなんか負けたような気がして素直になれない。

「ま、いいか。教師として当然の事をしただけだし」

古賀は茶化したように言ったけど、本気でそう思っているとは分かった。多分私じゃなくても同じように接するだろうと。私が特別なわけじゃない、古賀が”教師”で私が”生徒”だから――……。そう思うとなぜか悲しくなっ、胸がぎゅっとなった気がした。

なんで……？こんな事、今までの先生には思わなかったのに……。 ”教師”と”生徒”その立場になぜか距離を感じた――……。 ”教師”と”生徒”その立場になぜか距離を感じた――……。

「19」心傷

「あ……」

思わず隠れちゃった……。

そこにいたのは泣いている女子生徒と、その子を慰める古賀……。女の子の顔は古賀の胸板に顔をうずめていて、誰か分からなかったけど、古賀にしがみついているのが分かる……。古賀はその子の頭を優しく撫でていて、顔も優しくそんな顔をしていた……。

なんとなく見てはいけないうものを見てしまったような感じがして、すぐにその場を去った。

ドキドキドキ

なんだろう……。妙に胸がドキドキする。

もしかして禁断の恋ってやつ！？古賀ってロリコンだったの？絶対からかってやろう！

そう思うのに、なぜか心は沈んでいく……。

本当にどうしたんだろう。からかうネタになるような事を発見したのに。

うつん、あの子は泣いてた……。多分私の時みたいに慰めているんだろう。うつん、多分そうだ。きつとそうに決まってるっ！

でもそれと同時に私も古賀にとってただの生徒のだと見せつけられた気がした……。 ”古賀の地を知ってるのは私だけ” その事で優越感のようなものを感じていたのに。

そんな事を考えていた自分にハッとした。どうしてそんな事ばかり考えてるの……。？別にそんな事どうでもいい事なのに……。？

胸がざわつくのはどうして？泣きそうになるのはどうして……。？もしかして私……。古賀に恋してる？うつん、そんなはずない。

だって私には恋なんて出来るはずない……。兄と関係なんて持つて、そのたびに快樂を感じていた狂った私が普通に恋をする事が出来るはずないんだ……。？

でも、そう思っただけでも後悔の念のようなものが感じられるのはどうしてなの？お兄ちゃんに抱かれたのは初めこそは強姦と言っているものだったけど、2回目からは同意の上だったのに……。

”お兄ちゃんを手放したくない”その一心で私はお兄ちゃんを受け入れた……。恋愛感情があったわけじゃない。そんなものは欠片すらも沸かなかった。

自分が決めた事を後悔なんて出来るわけない、してはいけない――。

その時は後悔なんてしなかったのに……。

どんなに否定しようともやっぱり私は……

「古賀を好きになっちゃったのか……」

でも私は好きになる権利なんてない。――もう純粹だった昔には戻れない。

「はは……」

それ以前に古賀は私の事を完全に生徒としてしか見ていない……。どんなに頑張ったって無理だ。”生徒”と”教師”その壁が大きすぎる。

恋なんてしなかった。……違う、したくなかった。だってしてしまえばきっと辛いだろうと思っていたから。

いつ好きになった？昨日慰めてくれた時？寮生活の中で？レイプされそうになって助けてくれた時から……？

「……っ」

分からない、分からない、分からない……。

本当に苦しくて辛いよ……。

もうこの気持ちには蓋をしよう。叶わない恋なんだから、……それにもし万が一にでも叶ったとしても、私は自分を許せないから……。

多分これが初恋なんだと思う。小説や漫画のように甘いものじゃなく、ただただ辛くて苦しくて……、そして切なくなるものだと知った。

こんな思いをするぐらいなら……恋なんて、したくなかった……。悲しくて、苦しくて……。それは家から出て行った時と似ているようで全然違う。

お兄ちゃんと別れた時はただただ寂しかった。……でもそれ以外の感情は沸かなかった。

そしてやつぱりそうだと悟った。

「私は……お兄ちゃんを愛していなかった」

口にだして言えば、それがさらに事実のように思えた。

今日は健康診断だったという事もありぼーっとしていた。うつん、それは嘘だ。ぼーっとしようとしても思い出すのは古賀の事……。

考えたくない、忘れてしまいたい。

――そう思うのに、私の頭はうまくいかない。

その日は古賀の方を出来るだけ見ないようにして過ごした。見ると、女の子を慰めていた時の事を思い出して見るのが辛かったからだ。

茜と一緒に寮に帰ったけど、今日の茜の様子は変だった。なんかぼーっとしていていつもより口数が少ない。

……もしかして、昨日の事気にしてるのかな？朝はいつもと変わらないように見えたけど、普通だったら今までみたいには出来ないよね……。

「……理香、ちょっといい？」

茜は辛そうな、でも真剣な顔をしていて思わず唾を飲み込んだ。

「昨日は、ごめんね……？」

茜は本当に申し訳なさそうな顔をしていた。

「え、うつん。ちょっとびっくりしたけど……」

「ありがとう」

茜はそう言っただけで力無く笑った。その笑顔はすごく儂く感じた。

「雷は……苦手なんだ。辛い思いがあるから……」

「そうなんだ……」

茜は深呼吸をして決心したように口を開いた。

「あたしのとこね、お父さんが小さい頃に無くなって再婚したんだ」
「……」

「お母さんは優しい人だったし、新しいお父さんも良い人だった……」

” だった ” それは過去形……？

「でも、2人の間に女の子が生まれて、……っ」
そう言って茜は言葉を詰まらせた。

その顔が辛そうに歪んでいて、そんなに辛いんなら言わなくてもいい——そう言いそうになった。知りたくないと言えば嘘になる。でもそんなに言いたくない事だったら無理に言わなくてもいい。茜の傷をえぐってまで、知りたいとは思わない。

「茜……」

「2人が私を邪険に扱った」

2人……？それって本当のお母さんも？自分がお腹を痛めた子供なのに？

今までお母さんに甘やかされて育ってきた私には考えられない事だった。お父さんはお母さんさえいれば子供は二の次みたいな所があったけど……、それでもそれなりに愛してくれた。

だからお父さんに虐待をされたのだと思った。でもこの言い方だと2人に……？

「お父さんに冷たくされたのはそんなに辛くなかった。むしろ仕方ないって思った」

「……」

「でも……お母さんに冷たくされるのは辛くて……。お母さんの事、大好きだったから」

茜の痛々しい心の叫び声が聞こえてくるようだった。

「ふ……、でも今思えば全然まし」

今まで声が震えていたのに、いきなり低い声になって淡々とした口調になった。その目は光を無くし暗闇をのようだった。

「あいつが私に襲いかかった。怖かった、何も分からなかった。で

も逆らったら殺される、それだけは分かった。死にたくなかったら抵抗したらいけない。生きるために何度も何度も終わりのない悪夢を見た」

段々と茜は狂ったように声は大きくなって、話すスピードも早くなった。

「誰にも言えない、相談できない。なんで私がこんな目に？誰も私を助けてくれない……！でもある日ばれた！雨も雷も酷い日だった！お母さんに見られた！すごく嫌だった、死にたいってぐらい辛かった！……でもそれと同時に安心した。これで終わる！きつとお母さんは私を助けてくれる！お母さんは言った。”信じられない！この泥棒猫が！！”私をぶちながら、踏みつけながら、まるで汚物を見るような目で！！あはははははっ！うふふ……」

「……っ」
見ていて痛々しかった。

私は何も言わずに茜をギュツと抱き締めた。

「あ、あ……、ああああ！！」

泣き崩れる茜を抱き締めながら、私が茜を守らないといけない――
――そう強く思った……。

「20」友達

「きゃあああああ!!」

「大丈夫!？」

「……う、ん。はあ、はあ、はあ」

私は茜を抱き締めながら背中をさすった。

茜は3日に1回ぐらいの割合で夜になると叫び出す。なんでも、あの時の事が夢になって蘇るそうだ。

茜に聞いた話では、大雨の中外から出され肺炎になり、足の骨も折れていて腕には紫色の内出血、顔には擦り傷が出来ていたそう。そしてそれが近所の人に見つかり国に保護されしばらくの間施設にいたそうだ。

そんなに辛い思いをしていたのに私はこうやって慰めたりする事以外何も出来ない。自分の無力さを感じた。

「大丈夫、大丈夫……。もう怖がらなくてもいいから……」

「ひっぐ……。ううっ。ありがとう」

そう言ってやっと落ち着いた茜は安心したように眠りに落ちた。そのせいで寝不足になったりした事もあったけど、別にそんな事はどうでもよかった。

私が茜に頼りにされる事で必要とされていると思えたし、何よりそうする方が自分にとって過ごしやすい方法だと分かったからだ。私が茜に優しくすれば、その分寮のおばちゃん達も優しくかった。

それは純粋な動機じゃなかったし、自分でも偽善だと思った。罪悪感が押し寄せてくる度に、しないよりましだと自分に言い聞かせた。

「理香、いつもありがとう……」

「ううん」

”ありがとう” と言われる度胸が痛くなる。だってそんな事を言ってもらえるぐらいの事をしてないから……。

はじめはサバサバして自分の事は自分でするみたいな子だと思っていたのに、実際は全然違う……。壊れ物のように弱くて脆い女の子だった。

「おい、お前最近顔色悪いぞ？」

週番になって職員室に日誌を取りに行った時、古賀にそんな事を言われた。

学校の口調じゃないのを聞くのは久しぶりで、思わずドキッとしてしまった。

「は？気のせいじゃないの？」

ドキドキしたのを隠すようにぶつきらばうに行つた。

「……あれから大丈夫か？最近寝れてねえんじゃねえの？」

「……」

確かにあんまり眠れてはいない……。でもその分心が軽くなった。

「無理すんな」

「無理なんてしてない……！」

そう言つて職員室を飛び出した。

無理なんてしてない……。友達を助けてあげるのは当然の事。うん、本当は違う……。だって自分の体を削つても助けてあげないと周りになんて言われるか……。直接は口にする事はあまりなくても、目が、態度が、そう告げる。お前は冷たい人間だ、薄情な奴だ、と――。

「さつき古賀先生と何話してた？」

職員室を出てすぐの所に教え茜がいて思わず目を見開いた。

なんで茜がここに……？

「茜、なんでここに……？」

「理香が週番だと思つたから何か手伝おうと思つたんだけど……迷惑だった？」

そう言つて茜は眉を八の字にした。

「うつん！そんな事ない！ありがとう」

そう言つたけど、心は穏やかではなかった。

——古賀があんな事いうから。あんな、本当の事……。

茜は確かに重荷だった。でも、人の役にたつてる——その事で今までの自分を支えてきたのに……。あんな事を言われたらもう自分をごまかせなくなる。今まで気づかない振りをしてたのに——……。

「どうかした？」

「ううん、何でもないよ」

私がそう言うのと茜はほっとしたような顔になった。

それを見てまた罪悪感が募る。茜がもっと悪い人だったらよかったのに……。それならこんな思いはしなくていい。

茜が素直であればあるほど、純粹であればあるほど、このジレンマを抱える。

「いっつもはあたしが理香のお世話になってるんだから何かあったら言つてよ？」

「ありがとう。でも何にもないよ」

言えるはずない、——ううん、言つてはいけない。

相変わらず私は古賀を無視した。でもその理由はあの女の子を思い出すからじゃない。古賀に見透かされるような気がしたから……。醜い感情を古賀には知られたくなかった。

「木下さん、いつも大変ね」

そう言ってくれたのは虐待をされていない人と虐待をされてる人、どちらの言い分も聞いて、公平に接してくれる寮のおばちゃんだった。

「え……」

「おばちゃんは本庄さんよりあなたの方が心配だよ……。あの子が安定するのに比例するようにあなたはどんどん疲れた顔してるよ」

「え？気のせいですよ」

そう言っておばちゃんに笑いかけた。

自分でも体が疲れているのは自覚してる……。鏡を見たら少しやつれたなあって思うし、目の下にはくつきりとしたクマまで出来て

る。

私の笑顔が変だったのかおばさんは眉をひそめたが、それ以上は何も言わなかった。

そしてまたその繰り返し。でももう慣れた。作り笑顔を作って茜を励まし、いつもと変わらない学校生活を送る……。色褪せた面白みのない日常。それは私が望んだ物ではなかった。

今日で週番が終わる……。1つ肩の荷がおりて私は少し気が楽になった。

いつもだったら古賀に会いたくなかったから、日誌をもう1人の子に取ってきてもらったり、返してもらったりしていた。でも今日は週番の子が休んでしまつて私に取りに行かざるを得なくなった。

幸いにも、朝は古賀がいなくて机からそつと日誌を取った。返す時も、古賀がいなくて願つて私は職員室に行った。

古賀がいなくてほつとしながら日誌を置いた。

「え？」

職員室を出ようとしたら誰かに思いつきり腕を掴まれて思わず振り返った。

「古賀先生……」

古賀は怒っているような悲しんでいるような、なんとも言えない顔を私に向けた。

「お前、最近俺を避けてるだろ？」

古賀の喋り方が学校モードではないことに驚いた。

聞こえるか聞こえないかの微妙な位置だけど先生が何人かいるのに……。

「そんな事ないよ……」

そう言いながら私は古賀から目を逸らした。

「はあー」

ため息……。私、古賀に呆れられちゃったのかな……。

嫌だ、と思うのと同時に、それでもいいか……という諦めにも似たような感情を抱いた。

「素直じゃねえな」

「……話はそれだけですか？それじゃあ私、忙しいんで帰ろうとしたら手を思いつきり引つ張られた。」

「ちよつ、先生！？」

古賀が連れて来た所はあの場所――茜の事を古賀が教えた所。思えば私の苦痛が始まった場所だとも言える。

「痛いっ！離して！」

「じゃあ何があつたか言えよ！」

「別に何も無いって！」

「……言わねえと帰さないぜ」

古賀は今までにないほど低い声でそう言った。

「何よ……、それ。なんでそんな事されないといけないの！？」

「俺がどれだけ心配したと思つてんだよ！」

「……っ」

でもそれは教師として……。だったらそんな心配なんていらない。教師として心配してくれていると分かっている期待してしまう私がばかで虚しくなる……。教師としてでも自分を心配してる事に喜んでいる自分が滑稽だ。

「ほつといて……っ」

そう言つと同時に体をぎゅつと抱きしめられた。

「やめっ」

拒否の言葉を口にするも、それはとても弱々しい。だつて抱きしめられた事が嬉しいのも事実だから――……。――。

「理香、先生何してるの……？」

その声を聞いて背筋が寒くなった。こんな状況を見たらほとんどの人が誤解するだろう……。

古賀もハツとしたように私から体を離れた。

こんな時じゃなかったらきつと寂しいとか思っていたと思う。でも今はそんな事全然思わなくて、ただただ見られたと事実に体が震えていた。まるで、悪い事をしていて見つかったように……。

恐る恐る声のした方を見ると、そこにいたのは茜だった――
……。

「21」忠告

「先生、理香……、何してるの？」

「……っ」

どうしよう！どうしよう……！！私はばれてもそんなに問題にはならないだろうけど、古賀にとっては人生を左右する問題……っ。

「そんなの決まってるじゃないですか。抱きしめてるんですよ」

そう言って古賀は私を抱き寄せた。

はぁ！？何言ってるの、この男！なんで自分からばらしてんの！？しかも口調違っし……。

「ちよっ」

私が暴れようとすると、さらにきつく抱きしめてくる。

嬉しいけど……今はそんな事言ってる場合じゃない！

私は思わず古賀を叩いた。

「あ……っ、ごめ」

叩くつもりはなかった。でも結局叩いちゃった。

「冷たいですねえ……」

そう言って古賀は笑った。

「先生……？」

「ちようどよかった！本庄さん、僕を慰めてくださいよ？」

そう言って今度は茜に抱きついた。

茜は見る見るうちに顔が真っ赤になってかわいかった……っ。ってそんな事言ってる場合じゃない！

「な、何してるんですか先生……！！」

そんな2人の姿を見てなぜかイラッとなった。

「何って……、これが僕なりの愛情表現ですよ？」

こいつ……っ！何が愛情表現なの！？ただの変態教師じゃん！……やっぱりあれは特別な意味じゃなかったんだ！みんなにそうしてるの！？さっきまでドキドキしていた自分が情けないっ！

「この変態教師！茜、もう帰るよ！」

「あ……、理香っ」

無性にイライラしながら茜を古賀から引き離れた。するとなぜか古賀は私を引っ張って耳元である事を囁いた――。

「……っ」

何、今の！？

ぱつと古賀を見たけど、相変わらず営業スマイルのままだった。

「理香……古賀先生とは本当に何も無いの？」

古賀から離れた後にいきなりそんな事を言ってきて、少しドキツとした。でも私には気持ちがあっても、あつちは何にも思っていない。

「……ないに決まってるじゃん。あいつがただの変態教師なだけ」

「……そっか」

何故か茜は残念そう……。

「茜……？」

「この前私が泣きそうになった時すごく優しくしてくれてさ、少し特別なのかなって思ったけど……。そうじゃなかったのか」

「……古賀、先生の事好きなの？」

少し寂しそうに、そして切なそうな茜を見てそう直感した。

案の定茜は頬を赤く染めた。

え……？本当に？憧れとかじゃなく恋愛感情で？

思わず息を呑んだ。

もしそれを聞いてしまったら私はどうなるんだろう。協力するの

……？でももし古賀が好きだと正面切って言われたら私は……。

「あたし……、古賀先生が好きなんだ」

ドクンと体中に血液が流れていった気がした。

「……え」

やっと出たのは絞り出したような声……。

「先生なのに？」とか「本気で好きなの？」とかいろいろな言葉が頭には巡ったけど、それを口に出す事は出来なかった。

「協力……してくれる？友達だし」

”友達”その言葉が頭に重くのしかかった。

嫌だなんて言わせないような圧力を感じたのは気のせいだろうか？蛇に睨まれたカエルのように私は身動きが出来なくて、首を縦に振って頷く事しか出来なかった――……。――。

それから相変わらず茜は叫び声だしたりする事が何度もあった。いくらそれによって精神的に疲れていてもそれを表にださないようにして、古賀の事は全然見ないようにしていた。

”協力する”とは言ったものの、何もする事はなかったし出来たとしても何もしたくなかったのが本音だ。

「……ん」

朝起きてみると、茜が部屋にいなかった。

いつもならいるのになんでだろ……？

不思議に思いながらも身支度をして食堂に向かった。

「おはようございまーす」

食堂に入ってそう挨拶すると今まで騒がしかった食堂がいきなり静かになった。その静けさは重く、そして突き刺さるような鋭い視線を感じた。その視線はどれも私に注がれていた。

その空気があまりにも居心地悪くて逃げたくなった。

一体何があったの……？

「……っ」

私が歩こうとすると足を引っかけられて思わず転びそうになった。周りの子達はクスクス笑っていたり知らん顔していたり……。

沸々と怒りが沸いてくるけど我慢。……でもなんでいきなりこんな事するの？

辺りを見渡すとばかりにするような目線や軽蔑をするような目線がほとんどで、思わず後込みそうになった。

何なの？全然分らない。

そして奥にいたある光景に目が行った。

何人かの生徒やおばちゃんに囲まれて1人の女の子が泣いていた。その子は私がよく知っている子で思わず名前を呼んだ。

「茜っ」

そう叫んで茜の側に行こうとした。

なんで泣いてるの？いつもだったら私の所に真っ先に来たのになんで今日は違うの？

「あ……っ」

パターンー！

また足を引っかけられて今度は派手に転んでしまった。

「……っ、痛っ」

相変わらず周りはクスクス笑っている。

「いい気味」

「自分のした事に比べればどうって事ないじゃない」

「何被害者ぶってんの？」

そんな囁き声が聞こえた。

いい気味？私のした事？被害者ぶる？意味が分からない。私が何

したって言うの！？

「もういい。みんな……」

その言葉を発したのは茜だった。そしてみんなはシーンとなり茜の方を見る……。

「茜……」

そう言ってみんな茜の所に寄っていく。

私は分けが分からずただ呆然とするだけだった。

「茜がかわいそう」

「優しいね、茜は……」

みんな口々ににそう言う。でも私にはこの状況が全く理解出来ない。

「意味分かんないんだけど……」

イラつきから出てきたのはこの言葉。

なんでいきなりこんな目に遭わないといけないの？昨日までは普通だったのに……。わたしにはこんな事される記憶なんてない。

「はあ？」

「何が意味分かんないだよ！しらばつくれるのもいい加減にしたら？」

「うちらはあんたが何したか、とつくに知ってたんだよ！」

口々に何かを言ってるけど私にはさっぱり意味が分からない。

「しらばつくてなんかない！私は何したって言うの！？」

「あんた、それ本気で言ってるの！？」

そう言って、信じられないと言うような目を私に向けた。

「あんたが茜をこんな目に遭わしたんでしょ！？」

「こんな目……？」

私は顔を上げた茜を見た。

「……っ」

思わず言葉を失った。

顔は打たれたような跡があり、きれいだった髪は乱雑に切られていて痛々しく映った。そしてスカートで覆いきれない足はまだ出来たばかりだろうと思われる紫色の痣が出来ていた――……。た

これを私が……？何言ってるの？勘違いもいいとこ。そんな酷い事、するわけないじゃん……。

「茜……、どうしたの？」

ふらふらとしながら茜の方へ寄る。

なんで、なんで……茜がこんな目に……？やっと、やっと親から離れられて平和な普通の日が送れるはずだったのに……。

すると茜から思いもよらない答えが返ってきた。

「……理香が、私の事嫌いなのはよく分かった。でもこんな事する人なんて思わなかった。あたしはずっと理香の事友達だと思ってた。でもそれはあたしだけだった……」

「え……」

どういう事……？私茜にそんな事してないのに……！

「もう顔も見たくない。さよなら」

今まで聞いた事がないくらい冷たい声で、私の心に茜の言葉は突き刺さった。

周りからヤジが飛んできたけどそんなの全然頭に頭に入らなかった。

思い出すのは古賀があの上に囁いたあの言葉。

”本庄には気をつける”——……。 ”

「22」悲観

その日から地獄は始まった。

靴を隠されるのは当たり前、教科書も学校に置いていたらすぐに破かれるか落書きされてる……。

机に落書きする事はなかったけど、これは先生にばれないようにするためだと思う。教科書や靴なんて自分から言わない限りはばれないけど、机だったら消してる途中で先生が来る可能性があるからだ。

気づいている教師も何人かいたけど、自業自得という目線を送るだけで見て見ぬふりだった。あからさまないじめがない限り動いてはくれないのだと悟った。

なんで私がこんな目に遭わないといけないの？私は何もしてないのに……！

何も出来ない自分が情けなくて悔しくてトイレで泣いたりした事もあった。トイレに入ってバケツの水をかけられた事はなかったけど、私の教科書や雑巾……いろいろな物を投げられた。

いつまで続くの……？

正直私は限界だった。唯一味方と思っていた古賀は何もしてくれない。絶対気づいているはずなのに……。

私は古賀が何もしてくれないのは、何か理由があるんだと自分に言い聞かせた。そうしないともう心の支えが無くなる。

——でもある日、それを打ち砕くような出来事が起こった。

あの場所で唯と古賀が抱き合っていたのだ。2人はまるで恋人同士に見えた……。

それは古賀とよく2人で会った場所……。

もしかしたら古賀に会えるかもしれないという淡い期待を抱いてここに来た。古賀なら私の事を信じてくれる——そう思っていた……。

「先生……、あたし辛い。理香の事友達だって信じてたのに裏切られた」

「……知ってるよ。辛かったね」

「先生……っ」

古賀も私じゃなくて茜の事信じてる。

「私……先生の事が……」

ドラマや漫画でよく見るシーン。私はそれを見たくなくてそっとその場を離れた。

「……はあ、はあ」

吐き気がする。気持ち悪い……。

私はただの邪魔者でしかない。私を信じてくれる人は誰もいない。私の味方はいない――。

「あ、ああ……。うっ、く……。っ」

私は茜に何をした？偽善ではあったけど、私なりに茜に尽くしてきた……。それは結局自分の独りよがりでしかなかったのか……。

茜はもしかしたら私の醜い部分に気づいていたのかもしれない。

だから私から全てを奪った……？

でも茜についていた傷は……？あれはどう説明すればいいの？もしかしたら誰かが茜を傷つけてその人に茜は私がしたように言えども言われた……？茜も誰かに脅されている？

――そうできっとそうに決まってる。でも実際は私がそう信じたかったというのが大きかった。だって茜が私をはめるなんて考えたくなかった。

でも相変わらずいじめは無くならないし、辛い日々は続く――。

学校に希望がない。辛い事しかない。そうなると思いつくのは家族の事。自分から家を出て行たくせに、家に帰りたいと思ってしまう。あの頃は罪悪感がつきまといっていたけどそれなりに幸せだった――。

何より自分を愛してくれている兄に優越感のようなものを感じていた。誰もが憧れるような容姿と頭を持った兄がこんな平凡な私を

愛してくれている。そして兄は私を甘やかしてくれた。このままだと墮落してしまうと分かっていたけど側にいたのは兄を繋ぎ止めておく意味もあったけど、何より優越感が気持ち良かった。そして女としての幸せもまた感じていた。自分は愛されているんだと感じた事が出来たから、お兄ちゃんが私を必要としてくれて誰よりも大切にしてくれたから――……。――。

当たり前すぎてそれが幸せだと気づかなかった。ううん、そう思う前にそれを罪悪感や背徳感によって打ち消していた……。

お兄ちゃんとは離れるべきだと思って家から出てきたのに……何を今更後悔してるの……？寂しいから、辛いからって墮落するのは違う――。

でも、それでも辛くて……私は土日に寮に外出届を出した。もちろんお母さんに言わずに――。

この時私はそれがさらに自分を傷つける事になるなんて思いもしなかった――……。――。

家に帰ると言っても家族に会うつもりはなかった。ただ、お兄ちゃんの姿が見たい――そう思っていただけだった。

泊まるのは出来たらホテルがよかったけど、こんな事でお金を使うわけにもいけないので、近くにあるネットカフェで泊まるうと思っていた。

ここのネットカフェは結構設備が充実していてシャワーはもちろんベッドなんかもあって寝泊まりには困らなかった。

家の周りですろろするわけにもいかず、私は取りあえずネットカフェに行った。

思い立ってすぐに行動しちゃったけど、よく考えたらまずかったかな。

……もしお兄ちゃんにばれてしまったらお母さんに申し訳ない。自分がとても優柔不断に思えて嫌気が刺した。

そんな事を考えながら沈んでいると隣の部屋から微かに押し殺したような声が聞こえた。

……なんだろ？

ただ本当に少し気になったただけだった。

耳をすまして聞いていると子猫のような甘い声とやらしい水音……

…

「……っ」

友達に聞いた事はあった。でも実際にそれを目の当たりにするのはもちろん初めての事で私は思わず口を覆った。でないと叫んでしまいそうだったから。

本当にこんな所でする人いるのか。カラオケなら声が漏れる事もないしドリンクもフリーだから客や店員にばれる可能性は低い。でもこんなに薄い壁じゃ筒抜けじゃない。

「あっ、……ん。じらさないでえ……、ちゃんと、さわっ、ひあっ」

クチュクチュ……

もう嫌あ……。

泣きそうになりながらそつとその場を去ろうと思っていたけど、私はその場で固まってしまった。

「え……？どこ？ちゃんとと言わないと分からないよ？」

そう言ってクスクス笑う男の声に聞き覚えがあった。

「……お兄、ちゃん？」

蚊の鳴くような小さな声は女の喘ぎ声で消えてしまった。

隣の部屋に入って”何してるの！？”と叫びたくなる衝動を抑えた。言ったつてどうにもならない事は分かっていたから……。

お兄ちゃんはもう私の事を好きじゃない——その事実だけが胸に刺さった。

お兄ちゃんは絶対に私以外の人を好きにはならないと自惚れていた。自分勝手な考え、なんという自信。自分がとても愚かな人間だと思わざるを得なくなった。

私に傷つくような資格なんてない。
でも確実に私の心は冷めていった。

あんなに私を好きだと言って溺愛していたお兄ちゃんですら心変わりをする――。人の心なんて簡単に変わってしまうんだと感じた。

友達だと思っていた子は手のひらを返したように私を遠ざけ、中立の立場であるはずの先生も寮のおばちゃんも誰１人として味方になっではくれない。そして最後には誰よりも私を愛してくれていた人まで心変わりしてしまった。

私は誰にも必要とされていない不要な人間なのかもしれない――
――……。

その事実は悲しかったけど、私なりに出した答えだった。

「23」計画

「あ……っ、頭変になっちゃう」

「はっ、狂えよっ！」

美沙は俺を思いつきり締め付けて気を失った。

「……まだ俺イってないんだけど」

でも気を失っている女を抱くほど興奮しているわけでもない。これが理香だったら我慢なんて出来ないだろうけど。

理香に似てるとは思うけどやっぱり全然違う。

ブランド物が買えなくて偽物を買う奴がいるけど、俺もそんなもんだった。と言っても本物はちゃんと手に入れるけど……。それまではこれで我慢する。

美沙の服装、髪型、変えられるものは全て理香と同じにした。美沙はそれが俺の好みだと思っているみたいだけどそれは全然違う。

でも理香と美沙の絶対的な違い……それは美沙を抱く時は必ず後ろから、バックでしか抱かない。理香の時はバックで抱いた事なんてない。理香の顔が見えないのが嫌だったし、何より理香のイッている顔を見るのが好きだった。自分がイク時よりも理香のイク顔を見た方が満たされた。

今までそれが当たり前だと思っていた事が理香を失った事によって分かった。

今でも理香を好きなのは変わらない。いや、会えないからこそ余計にこの思いは降り積もる……。

こんなにも理香に依存している。理香のいない世界は全てが色あせて見える。

美沙がいる事によって少しはマシになった気もするけど、変わらないような気もする。美沙は俺にとってはその程度の存在……。

でも目を瞑りながら美沙の声を聞いているとそこに理香がいるような錯覚に陥る。それだけ声は似ていた。だから後ろで抱きながら

喘ぎ声を聞き、サラサラのあまり長くない髪を撫でると理香を抱いている錯覚に陥る事も始めは多かった。

……でもその回数が増すたびに理香との思い出が上書きされていく気がして、だんだん理香の感覚が無くなっていく気がして抱くのが段々萎えつつある。

美沙はばかで自分を通して誰を見ているのか気づいてはいない。それは幸いだっただけど、それが今は見ててうざい。ばかな女は見ているだけでうざく感じる。

始めは純粋な女だった。でもセックスの快楽を教えると、すぐにその虜になって今では自分で腰を振っている始末。

……はつきり言って醜い。こんなに貪欲な女だとは思わなかった。そろそろ潮時かもしれない……。

俺は理香のなり損ないに飽て、もう美沙を捨てる事にした。

母さんは俺が美沙と付き合ってから俺がマシになった事もあつてほつとしていた。……でも俺から理香を奪った母さんにこのままで終わらせるつもりはない。

父さんがいるから直接は手を下せないけど間接的に母さんを傷付ける事は出来る。

自分の事を棚に上げて理香を奪っていった母さんへの恨みは大きかった……。

「美沙、俺達もう別れよう」

「え……？」

いきなりの事に美沙は驚きを隠せないようだった。

当たり前だよな。だって今まで俺は美沙を甘やかしてきた。理香のような底なしのような甘さではなかったけど、普通の恋人達なんかよりも何倍も甘やかしてきたのは事実だ。そして昨日もそうだった。

「どうして……？ だって昨日も普通に……」

「飽きた。つーか俺、他に好きな子いるから」

「……！」

美沙はかなり衝撃を受け驚きをそれを隠せないようだった。まあ当然だよな。俺、そんな雰囲気全然させなかったし。そもそも美沙の前で女と話したのだって数えるほどしかない。しかもどれもぶつきらばうだったし……。

「嘘だよな……？どこが悪い所があつたら言つて？直すから……っ、なんでもいう事聞くから……、お願い、捨てないで……！」

美沙は涙目になりながら俺に縋りつく。

うわー、かなりうざいな。縋れば縋るほど萎える。

でもこうなる事は分かつていた。そしてこれがある事に利用するつもりだった。

俺がこれから計画している事……それは自分でも悪い事、酷い事という枠組みの中に入っているという事は分かっている。でも罪悪感を感じたり良心が痛んだりはいしない。理香を失った俺はどこまでも残酷な人間だった。

でもこれがあんな結果になるなんてこの時の俺は思いもしなかった――――。

俺と美沙は結局別れなかった。あれから美沙は驚くぐらい俺に従順だ。まあ分かつてはいた事だけ……。

周りからは今までと変わらないように見える。でも実際は全然違う。

暴力こそは振るったりしなかったけど、人が見ていない所ではかなり冷たい。無視なんて当たり前、反応しても不機嫌。そんな俺なのに美沙が別れようとしなのは、今までの俺を知っているから。もしかして前のように優しくなってくれるかもしれないと美沙は期待してる。そして知っている奴が周りにいる時は以前のように優しいから。だから美沙は俺を諦められない。

セックスは前と変わらずにするけど、抱き方が全然違う。

後ろからバックは変わらないけど、今までのように優しくなんてしない。愛撫もほどほどに自分が気持ちよくなるだけのセックス。でもそれでも美沙は感じる淫乱な女になっていた。そして極めつけ

は中出し。

ばかな美沙はそれが気持ちいいといっている。
もちろん行為の後はピルを飲ませている。ちゃんと飲むように俺の目の前で飲ませるようにしている。

そしてそんな行為が続いて1カ月半位たった時、美沙は泣きそうになりながら俺にある事を告げた――……。
「……生理がこないの。調べたら妊娠してた」

「24」計画2

「……で？なんでそれを俺に言うの？」

「なんでって……、それはっ」

「俺の子供なわけないだろ？」

そう言った瞬間美沙は顔を歪め、信じられないという顔をした。

「何？その顔？だって俺達がやった後はちゃんとピル飲んでただろ？」

「でも私はっ」

「俺としかやってないとか言うつもり？そんなにお金欲しいわけ？お前みたいな淫乱女はどうせ他の奴でも喜んで股開いてたんだろ？」

俺は冷たく、見下したような視線を送った。

「……っ。私はっ」

美沙はそう言葉を切ると、涙が我慢出来なくなったように喫茶店を出て行った。

周りにいた女達は興味深々という感じで聞き耳をたてていてそれがうざかった。

「妊娠……か」

そう呟きながら俺はクスツと笑った。

それからしばらくは美沙から連絡が無かったけど、きっと来るだろうと連絡を待っていた。そして1週間後ケータイから電話があった。

「もしもし……」

『魁人……あの事について、もう1度話したい……』

「……分かった」

俺は家に誰もいない日を選んで家に呼んだ。

俺が美沙を家に呼ぶのは初めての事で少なからず美沙は驚いていた。

本当はここには呼びたくなかった……。ここにいていいのはたった1人だけ……。でもこればかりは仕方ない。これからする事は人に見せたくないからな。

そしてとうとう約束の日が来た。俺は駅まで美沙を迎えに来て家に向かった。

「大きいね」

「ん……まあな」

まあ普通の奴からしたらでかいよな。

医者だからと言って全員が全員金持ちなわけじゃない。院長や開業医、有名な医者はそれなりに金持ちだけど、他は普通の奴が思っているほど金持ちじゃない。確かに普通の奴らよりは給料はいいけど、”医者”という肩書きから服にしろなんにしろ高い物を買わないと箔が付かない。無理して外見ばっかかこつけるから金がなくなる。変なプライドがあるから外見ほど実際は金ないんだよな……。

「どうぞ」

「……お邪魔します」

俺が家に案内すると美沙は家をキョロキョロ見渡した。

「珍しい？」

「え……、ううん。初めてしたから」

そう言っただけで美沙は顔を赤らめた。

「……ご両親は？」

「いない」

「そっか……」

「俺の部屋行つといてくれる？お茶用意するから。俺の部屋2階の1番奥だから」

美沙は頷いて2階に上がっていった。

俺はお茶を入れて自分の部屋に行った。

美沙は部屋にあった写真立てを見ていたけど、俺が入ってきた事に気づいてそこから目を離した。

「気になる……？」

「え……、うん」

美沙はためらいがちに俺を見た。

写真には俺と理香が笑顔で写っている。まだ俺もあどけなさを残した昔の写真――。

美沙は理香と自分が似ている事に気づいただろうか……？まあ、今更どうでもいい。

「この人は俺の大切な人……」

「……っ」

美沙が顔を歪めたけど俺はそれに気づかない振りをした。

「で、本題だけど……。どうするの？それ」

そう言っただけは美沙のお腹に目を向けた。

「それなんて言わないで……、この子は物じゃない」

そう言っただけは愛おしそうにお腹に手を置いた。

それを俺は白けた顔で見ている。何がそんなに嬉しい？どうして醜く膨らむだけのお腹にそんなふうな顔を向けられる？

「そう……。そこまでお前がしつこいとは思わなかったよ。ほら……」

……

そう言っただけは美沙に10万ほどのお金を渡した。

「これが欲しかったんだろ？」

でも美沙は首を振ってそれを受け取ろうとしなかった。

「……私、産むから」

「は……？」

「魁人には迷惑かけないから。1人で産んで1人で育てる」

「やっぱりな……。美沙だったらそう言うと思うけど。でも産んでもらっちゃあ困る。だって生まれてくる子のDNA鑑定でもされたら俺が親だって出るからな……」。

「何それ？それで俺に親になって欲しいっていうのが本音？」

「そんなんじゃないっ」

「はつきり言っただけ。そんなんされたら俺がどんな目で見られる

か分かってる？俺の子でもないのに、まるで俺が勝手に生ませて捨てたって事になるんだけど……」

まあ、実際に美沙のお腹にいるのは俺の子だけだ。

美沙が浮気しているかどうかは分からないしどうでもいいけど、俺が中出した後に飲ませていたのはピルじゃない。ただの栄養サプリメント。

「それは……」

「そんなに生みたいの？」

美沙はその言葉に驚いたように顔を上げ、こくこくと頷いた。多分俺が折れたと思ったのだろう。

「いいよ……なんて言うと思ってるの？」

そう言って俺は口角をつり上げ、美沙の髪を引っ張って床に叩きつけた。

「……っ」

「そんなにおろせないなら俺が手伝ってやるよ」

俺は美沙のお腹をこれでもかって言うぐらい蹴ってやった。

「手伝ってやってんだから感謝しろよ、ほらっ、ほらっ！」

「……っ。やめ……、赤ちゃん、があ……」

美沙は泣きながら俺に何かを訴えるような目で見るが俺にはなんの感情も沸かない。ただ狂ったように笑いながら蹴り続けるだけ。

「あははははははははっ」

「うう……、ああ」

美沙は涙と鼻水で顔はぐちゃぐちゃ。髪は酷いぐらい乱れていて理香の面影なんて欠片もなかった。

俺はこの時重大なミスを犯した事に気づかなかった。俺達を息を潜めながら見ている人影があつたのを――……。

俺は美沙に万札を握らせて家から追い出すように扉を閉めた。

「はっ、はははは」

俺にはもう良心という物が無いのかもしれない。だって全然罪悪感なんて感じない。それどころかどこかスッキリしている自分がい

る。

……俺はもう壊れてしまったのだ。理香に狂わされて惑わされて、堕ちてしまった。

そしてそれから3日後、俺の家に美沙がやって来た。両親に連れられて――……。

「お宅はどういう躰をなさってきたの!? ……この子が、この子が3日前に家に帰ってきた時、どんな状態だったか……っ！服は乱れて顔も髪もぐちゃぐちゃ……まるで、暴行でも受けたようにっ！いえ、あんなの……すでに暴行と何ら変わりないわ！」

母さんはその話を聞きかなり憔悴していた。ただ譫言のようにすいません、すいませんと謝りながら涙を流していた。

「ふんっ！子供が流れてよかったわ！こんな人が父親じゃ、生まれてくる子がかawaiiそうだわ。それに美沙とこんな人の血が混じった子供なんて想像するだけで吐き気がする！」

母さんは美沙の母親に虐げられ罵られ、かなり参っていた。

でもそれよりも辛いのは俺のせいでそんなに傷ついた女がいるって事。そしてその引き金を引いたのは母さんであるという事。その事実に苦しめばいい。それが俺が母さんに与えた罰――。

母さんは昔からそういう人だった。普通なら俺が悪いと思うのに、母さんの場合は自分を責める。だからそれを利用した。

母さんにとってはそうやって間接的に傷つける方が精神的なダメージが大きいと知っていたから。

結局これはお金で解決した。くそうるさいばあは父さんが用意した大金を目の前にして口を閉ざしたのだ。

自分の子供がかawaiiそうだと訴え怒鳴っていたのが嘘のようにヘコヘコ頭を下げて媚びるような目を向けてきた時はさすがに吐き気がした。所詮この世のほとんどは金で回っている。

「やっぱり金が欲しがっただけだったんだろ？」

軽蔑したような目線を美沙に送ると泣きそうな顔をしていたがそれは無視した。

結局母さんは俺に対しての罪悪感か、俺から解放されたかったのか、それとももうこれ以上俺が厄介事を犯さないようにするためか……、とうとう理香の居場所を教えた。

――全ては俺の計画通りだった。ある事を除いては……。

「25」策略

私の部屋は今では1人部屋。問題を起こした生徒が使っ部屋で一番奥に作られた特別な部屋だ。

退学にするかどうかは保留中らしい。なんでも虐待を受けている子がほとんどだから退学にしたいくても出来なかった子が多かったらしく、退学の手続きはなかなかされないらしい。

カチカチ……

私はカッターナイフを手握っていた。

……よく、リストカットしたら気分が楽になるって言うけど本当かな。

スツとカッターの刃を手首に当てる。

ナイフの刃が暗い部屋で月の光を反射して妖しく光った。

「……」

……ばからしい、やめよ。

カッターの刃を収めてぽいつと投げた。

退学になったらどうしよう……。またお母さんに迷惑かけるな。

……お母さん、ごめんなさい。

学校に行きたくない……。そもそも寮にいたくない。

ご飯を食べる時も選択する時も、部屋から一步外に出たら地獄……。

……。安らげるのはみんなから離れた隔離されているような自分の部屋だけ……。

こんな状態じゃ卒業なんて絶対無理……。

学校へ行つて靴を袋に入れて教室へ行き、机の落書きを消て、ゴミ箱から教科書をとつて……。そんな事を繰り返す毎日。

頼れる人はいない。私に出来るのはいつかこのいじめに飽きてくれるのを願うだけ……。

昼休みにふらふらと屋上へ行つた。

「……ここから飛び降りたらどうなるんだろう」

楽になる？全てから解放される？もう何も考えなくてもいい？

――ガシャ

フェンスを乗り越えて下を見た。

結構高いな。ここから飛び降りたら一瞬で死ねるのかな……？

フェンスから手を離して飛び降りようとしたその時――

「何やってんだよ！」

怒鳴り声が聞こえて思いっきり腕を掴まれた。

「……なんで」

なんで今更私に構うの！？助けて欲しかった時には助けてくれなかったくせに……っ！

頬に何か温かいものがつた。

「……っ」

私、泣いてるんだ……。

「ほっとしてよ！私の命をどうしようと自分の勝手じゃん！」

「ふざけた事行ってるじゃねえ！親からもらったんだろっ！今まで誰に面倒見てきてもらったと思ってるんだよ！」

「……っ」

私はその場に泣き崩れた。

「そこは危険だ、取りあえずこっち来い」

私はうなだれながら古賀の所に行った。

古賀は泣き崩れる私を抱き締めながら”ごめん”と何度も謝った。

何で古賀が謝るの……？

古賀は私が落ち着くまでずっと背中をさすってくれた。そして私が落ち着くと古賀は口を開いた。

「お前に言わねえといけない事がある。こんなの言い訳みたいにか聞こえねえかもしれねえけど……」

顔を上げて古賀を見ると、古賀は真剣な顔をしていて、やるせないような思いが滲み出ていた。

「あいつ……本庄はミュンヒハウゼン症候群だ」

ミュンヒ、ハウゼン症候群……？何それ。病気……？

「ミュンヒハウゼン症候群はな、自分で自分を傷つける病気だ」

それって自傷癖があるって事……？でもそんなのたくさんいるじゃん。リストカットする子なんて何人もいる。

私の考えている事が分かったのか、古賀は詳しく教えてくれた。

「ただ自分を傷つけるだけじゃねえ。意味があって自分を傷つけるんだよ。周りの人間に気をつかってもらったり、同情してもらったりするために自分を傷つけるんだよ」

「……それ聞いた事ある。でもそれは親が子供を病気にしたてあげて周りの同情をかう病気じゃなかった？」

確か注射器を自分の子供に刺していた人がいたって昔新聞で読んだ事がある。

「ああ……。それは代理性ミュンヒハウゼン症候群だ」
そうなんだ……。

「あいつ虐待されてここに来たって言ってただろ？でも本当は違うらしい……」

「え……」

でも古賀始めに私にそう言ったよね？

「始めは誰もが虐待だと思ったらしい……。痣だらけの体で親にされたって言うんだからな。親は否定したが、んなもん信じられるわけねえ……国が本庄を保護した」

「……」

「でも不自然なんだよ……。親と別れて保護されても施設の奴にいつもいじめられる。んで腕や足はやたら傷があんのお腹や背中にはなんもねえ……」

自分で痣を作るなんて考えられないけど、足や腕は簡単に作れる……。でもお腹や背中には作りにくい……。それにお腹を自分で痛めつけるなんて腕や足なんかとは比べられないくらい抵抗がある……。

「で、ここで引き取る事になったんだよ。一応様子見って事だな。

……全く、面倒な奴ばっか詰め込みやがって……」

「じゃあ、じゃあ、どうしてそう言ってくれなかったの!？」

せめてそう言ってくれていたら私はこんなに苦しくなかったの。
味方がいると分かっていたらこんなにも追い詰められる事はなかったのに――。

「……悪い。本庄の奴がミュンヒハウゼン症候群って知ってんのは俺と校長だけだ。もしかしたら本当に虐待されてるかもしれないから言えなかったんだよ。……本当に虐待されてたとしたら悪い事した事になるからな……」

「……」

「それにあいつはなぜか俺に好意を抱いてるみてえで、下手に動いてくれたりでもしたらお前の立場がもつと悪くなると思ったんだよ」「そう言えばこの前告白されてたよね……」

「お前、覗き見すんじゃないよ……」

「違う、たまたまいただけ……」

でもあの優しい顔は演技には見えなかった。本当は私が自殺したらまずいからこういう嘘ついてるだけなんじゃないの？本当に私が茜に暴力振るってないって信じてるの？

「はあ……。お前、俺の言った事信じてねえだろ？」

「……」

「お前の気持ちは分かる、わがままかもしれないけど、信じて欲しい……」

そう言って古賀は寂しそうな顔をした。

ずるい……。そんな顔されたら何も言えないじゃん。

でも本当に信じていいの？お兄ちゃんの事があって私はなかなか人は人を信じられなくなっていた……。でも古賀は弱った私に欲しい言葉をくれた……。古賀は私に嘘なんてつかない。いや、そう信じて……。

「……古賀の事、信じるよ」

私がそう言くと、古賀は本当に嬉しそうに笑って私を包み込むように抱き締めた。その人肌の温かさに安心感を覚えた――……。私が古賀の胸板に顔をうずめている時に、古賀が口を吊り上げて

いたのなんて全然気づかず……。

「26」接触

全ては俺の計算通りだった。

本庄がミュンヒハウゼン症候群と聞いた時、伯母にこれは俺と伯母の秘密にして欲しいと頼んだ。全ては理香を手に入れるために――――。

そして本庄は俺の予想通り理香を孤立させた。今までのパターンからすると、本庄がそう動く事なんて簡単に読める……。

もちろん寮のおばちゃんにも頼れないように元カノを使って根回しをしたりもした。理香が頼っていいのは俺だけ。俺しか味方はいねえよ？

理香が孤立してどんどん顔が暗くなっているのは分かっていた。だが俺はわざとそれを無視していた。

最後の最後まで傷ついてそしてボロボロになった所で助けてやる予定だった。まさかこんなにとんびように進むとは思ってなかったが。

そしてもう1つ気になっていた事――。それは理香の母親。

オヤジに聞いた話だとオヤジの婚約者には弟がいたと聞いた事はあったが、姉妹がいるとは聞いた事がなかった。

……じゃあ理香の母親は何者だ？オヤジの婚約者を老けたぐらで瓜二つのようにそっくりだ。まるで双子のように――――。

ちよつとした興味から俺は理香の母親・木下理沙について調べ始めた。だが不思議な事に探偵を使って調べても、ある時を境に情報が曖昧になるのだ。――まるで、誰かによってもみ消されしまったかのように……。そしてある時とはちょうどオヤジの婚約者が死んだ時ぐらいだった。

これはただの偶然か……？調べたら何かでそうじゃねえ？

オヤジの婚約者と異母、異父姉妹、親戚という線も考えたがそれには繋がらなかった。そしてやっぱり理香の父親はオヤジの婚約者

の弟だった。

そんな時俺はある情報を手に入れた。それは木下理沙、旧名藤村理沙の幼い頃の写真――。もともと身よりのなかった藤村理沙の写真を手に入れるのはすごく困難だったが、それを見て俺は衝撃を受けた……。

別人じゃねえか……。

一瞬、整形という言葉が頭に浮かんだがそれはすぐに消えた。

整形だったら、理香があんなに母親似だって事に矛盾が生じる……。

そしてある可能性にたどり着いた。理香の母親はオヤジの婚約者だったやつじゃねえか……？もしそうだったとしたらなぜそんな事をする必要がある……？

それにもし俺の予想が正しいとしたら……姉弟で結婚した事になる。……いや、まさかそんな事あるわけない。

そして今度はオヤジの婚約者、桂木鈴香について調べ始めた。そしてたどり着いたのはオヤジや桂木鈴香と大学時代親しかった宮崎愛里。旧姓は貞兼。

宮崎愛里は俺を見て祐太そっくりだと言って、オヤジの事や桂木鈴香の事について詳しく話してくれた……。そして様々な矛盾にも気づいた。桂木鈴香は何らかの病気で死んだと調べたら結果では出ていたのに、宮崎愛里によると自殺という事――。

俺の中でますます木下理沙〓桂木鈴香という線は濃厚になった。だが、決定的な証拠を手に入れようとすると何かに邪魔されているようになかなか手に入れられない……。そして俺はある手段を使った。

『はいもしもし。木下です』

「理香さんのお母様ですか？理香さんの事について少しお話があるのですが……込み入った話なので直接話したいと思っていますのですが……」

『……込み入った話とは具体的に言うと……』

理香の母親が焦っているのがよく分かった。

「……実は、理香さんが退学になるかもしれないんです」

『え！？理香が何かしたんですか……！？』

「電話で説明するのは大変なんで、予定が開いている日にでも学校へ来てくれませんか……？出来るだけ早くにお願いできますか？土日でも結構なんで」

『……はい、分かりました。えと……、すみません今週の日曜日もよろしいでしょうか……？』

「はい。結構ですよ」

『すみません、日曜日にわざわざ』

「いえいえ。では10時頃に学校の正門……、入学式の時に開いていた門のほうにいらしてもらってよろしいですか？」

『……はい』

「では後ほど……」

そして相手が受話器を切った事を確認してから俺も電話を切った。日曜日が待ち遠しい……。

そしてとうとう待ちに待った日曜日がやって来た。

10時前に行くと、もうすでに理香の母親は来ていた。

やっぱり桂木鈴香に似てる……。写真でみた藤村理沙とは似ても似つかねえな……。

「木下……、鈴香さん？」

「あ、はい。……えっ」

理香の母親の目が見開かれたのを見て俺は確信した。やっぱり理香の母親は桂木鈴香だと……。

鎌を掛けたら簡単に引っかかってくれたぜ。

理香の母親は、焦り、不安、疑惑、絶望……いろいろな表情が混じった顔をしていた。

「私の名前は理沙ですけど……」

あくまで否定しようとしているが、さっきの表情が全てを語っていた。

「ああ……、すみません」

作り笑顔を作って俺は理香の母親を学校へ誘導していった。

今日は日曜日だから生徒も先生もほとんどいない。クラブで来ている生徒はいるが、この学校はあまりクラブに力をいれていないので日曜日でも練習しているクラブなんてごくわずか。

「どうぞ」

俺は理香の母親を自分の教室に案内した。

理香の母親は俯いたまま何かを考えているようだった。普通なら子供がどうなのか真っ先に聞くだろが、今はそんな余裕がないんだろ。なんで俺があんたの事を知ってんのか……それで頭がいっぱいなんだろ？

「理香さんの事ですが……」

俺が理香の事を話そうとするとほっとしたような顔になって、理香の事でここに来たという事はすっかり忘れていたようだった。

「あ、はい」

「理香さんが同室の子に暴力を振るったみたいで……、その事ではとんどの生徒からいじめを受けているみたいです……」

”いじめがあるなんてどういう学校なんですか！？”とつかみかかって親もいるだろうが、この親は自分の子供に否があってもつかみかかってくるようなばかな親ではないだろう……。

「理香が……暴力……？」

理香の母親は信じられないという顔をした。

まあ、実際暴力なんて振るってねえだろうけど。

「理香が……暴力なんて。……相手は同室のお嬢さんなんですよね？保護者の方はなんと仰ってるんですか？退学するにしてもこちらから改めて伺いたいんですが……」

言葉に詰まらながらもはっきりした口調で俺にそう言った。

「……それがですね、相手の生徒は今国に保護されている状態でして、相手の保護者はこの事について何も知りません」

「え……、国に保護されているという事は……、その、虐待でもあ

「つたんですか？」

「ええ、まあ」

「……」

「話が前に進まねえな……」。

「まあ、退学にならないようにも出来ますよ……？」

「え……？」

「もちろんいじめをなくす事も……」

「な、何言ってるんですか？……本当は今までの話嘘だったんですか？」

「理香の母親は俺を疑いの目で見る。」

「いえ……」

「……何が条件ですか？」

「条件か……。まあ俺が理香をここに留めたいのは俺と一緒にいたいだけなんだよなあ……」。

「条件、ですか……。じゃあ全ての本当の事を話してくれますか？……」

……桂木鈴香さん」

「理香の母親は一瞬目を見開いたが、覚悟していいたのか特に表情は崩さなかった。」

「……分かりました。でもその前にあなたはどうしてもそんな事を知りたいんですか？」

「ただの興味ですよ……」

「理香の母親は俺をじつと見て何が目的か探るような目を向けてきたが、しばらくすると諦めたように口を開いた……」。

「先にあなたに聞きたい事があるんですがいいですか……？」

「ええ、いいですよ」

「どうせオヤジ絡みの事だろ？」

「あなたの名前……古賀斎でしたよね。古賀祐太とはどういう関係ですか……？」

「はっ、やっぱりな。」

「古賀祐太は僕の父親ですよ」

「父親……？父親ってあなた……」

理香の母親の顔には”嘘でしょう？”と書いてあった。

……まあ老けて見えるからな。

「本当ですよ？老け顔は父親譲りです。……と言ってもほとんど父親に似たんですけどね。父はあなたが死んだと聞かされた後、すぐに俺を身ごもらせたんですよ」

「……私が生きているのを知って、今更何がしたいんですか？」

「……」

「本当にあなたのお父さんには申し訳ない事をしたと思ってます……」

「今更謝られたって遅いんですよ。……父はもう帰らぬ人となりましたから……」

「27」協力者

……そうだ。オヤジの不幸の引き金はあんたが引いたと言っても過言じゃないだろ？あんたのせいであの女に拍車をかけたんと言っても間違いじゃねえからな……。

「あなたがあの女をさらに狂わせた」

「あの女……？」

「江藤唯。そう言えば分かりますか……？」

「唯……？でもあの人は刑務所に……」

「ええ、今もいますよ？……父を殺したんで」

「……っ！？殺した？どうして……。唯は祐太の事、好きだったのに……」

「好きだからこそ、ですよ」

理香の母親は訳が分からないという顔をしていた。

「訳が分からないという顔ですね？……少なくともあなたたちよりもマシな方だと思今すよ？姉弟で結婚して子供まで生んでいるあなたよりは……ね」

理香の母親もそこまでバレているとは思わなかったのか驚きを隠せないようだった。

「……全部知っているのね」

理香の母親は何か吹っ切れたような顔になって口を開いた。

「あなたには聞く権利があるのかもしれない……。私のせいで歯車が狂わせてしまったあなたには……。あなたの言う通り、私の本名は桂木鈴香よ」

そう言って理香の母親はため息をついた。

「……出来れば誰もいない所で話したい……」

「……やっとか……」

俺は歪んだ笑みを浮かべて今は使われていない旧校舎へ理香の母親を連れて行った。

「すみません、こんな所で……」

「……いいえ。誰にも聞かれない可能性が高いから逆によかったです……」

そして理香の母親は高校の時に姉弟で禁忌を犯してから弟と結婚するまでを詳しく話してくれた。

それは俺が想像していたのとはほぼ同じだったが、本当にここまでする奴がいるのかと思い知った。……戸籍や死亡診断書まで嘘をつくなんてな。

だが、何か違和感がある……。包み隠さず全てを話してくれた気はするが、まるで何かを隠しているような……。

「……本当にそれだけですか？」

「そうですけど」

理香の母親が嘘をついているようには見えないが、何かが引っかかってるみてえにすっきりしねえ……。

「……」

なんだこの感じ……。大切な事を聞き逃してるような気がする。

――ああ、そうだ。これか。

「ではどうして理香さんはここに……？」

普通に考えりゃあこんな遠い学校に通うはずねえよな。ただでさえ訳あり生徒が通う面倒な学校なのに。

俺の発した言葉に理香の母親はピクツと反応した。

やっぱりまだ何かあんのか。……多分これはオヤジの事と関係ねえから話さなかったんだろっな。

「それは……。あなたには関係ない事です」

余程聞かれたくねえって事か……。別に今までのネタ使って脅してもいいが、あんま印象悪くしたくねえしな。理香を手に入れたら必然的に関わる事になるからな……。

「……ですがそれなりの理由がないと僕だって退学を撤去する協力はできませんよ？」

ぎりぎり脅しじゃねえだろ……？

「それならそれでもいいです」

そんなに聞かれたくねえ事なのかよ？……そんな余計に気になっただけ。

寮付きで編入出来る高校なんてほいほいあるもんじゃねえと思うが……。よく考えたら父親は医者だったな。という事は金でなんとかなるってか？

「そうですか……」

「……」

後一押ししたら言いそうなんだけどなあ……。

「……理香さんのためにもそれがいいのかもしれないね。……いくらいじめを消せても、いじめられていた相手と同じ学校にいるのは苦痛かもしれないし」

「……っ。いじめは本当に消せるんですか……？」

今のでなんで心変わりしたんだ？全然分かんねえ……。だがいい方向だな。

「できますよ……」

「それで……、理香は普通に暮らせるんですか！？」

「それは本人しだいだと思いますが……」

普通に暮らすねえ……。なんとなくその裏になんか隠れてる気がするんのは気のせいかな？

「あなたが……そうしてくれるように力を尽くしてくれるのなら……

……、全てを話します」

どういう心境の変化だ？

「その方が、理香のためになると信じて……」

それだけ娘を家から遠ざけたいのか？虐待か……？

そして理香の母親の口から出た事実には俺は息を呑んだ。

……親子揃ってなにやってんだよ。

理香が処女ではない事にはもちろん驚いたが、まさか初めての相手が兄だったとは……。

今までにないほどの激しい感情が沸き起こった。嫌悪？嫉妬？怒り？悲しみ？よく分からないが複雑に混ざった負の感情。こんなに激しく心を揺るがされる事なんて今までなかったのに……。

家から引き離れた理由はこれか……。だが、自分も同じ過ちを犯してる以上そんな権利ねえんじゃない？かなり矛盾してるんじゃない？

「矛盾してると言いたげな顔ですね……」

「……」

「親のエゴかもしれません……。隼人……弟と結婚して今まで充分幸せだったと思います。でも、後悔してないと言えば嘘になる。ときどき……本当にこれでよかったのかと何度も問いかけられるような気がするんです。今の生活は堕ちてしまっただけに……偽りのような幸せだから。理香にはそんな道を歩いて欲しくない。悩みながら罪悪感を抱えて暮らして欲しくない……」

「……そうですか」

「それに……古賀先生にとっても都合じゃないですか？」

「は……？」

こいつ俺の気持ち知ってるのか……？いや、そんなはずねえ……、そんなはず……。

いきなり凶星をさされて今の俺の顔はかなりアホ顔だろう。

「好きなんでしょう？理香の事が……」

そう言っただけで理香の母親はにっこり笑った。

「何言っただけ……」

「別にあなたと理香が付き合おうが結婚しようが私はかまいません。ようは相手が魁人じゃなかったらいいんです。……もちろんあなたの理香に対する愛が普通の愛ではない事だって分かってます。唯が祐太に向けていたような狂気を孕んだような危ない愛だって事も……」

そう言っただけで笑った理香の母親の顔は穢れを知らないような聖母マリアのようにきれいで……それでいてどこか危なさを感じる表情だ

った。

ただの女と思ってたのに……。はめようとしてたつもりが逆にばめられてたって事か。

「理香があなたの危なさに気づかなければいいんです。それなら理香は幸せでしょう？」

この女……敵に回すと怖そうだな……。弱そうに見えるが実は一番危険な奴かもしれないね……。

「魁人の事は私がかんとかします……。ですから、あなたはどんな手を使っても理香を手に入れて下さいね……」

そう言っただけであの穢れをしないような笑顔を俺に向けて去っていった。

「28」 檻

古賀に茜がミュンヒハウゼン症候群と教えてくれてからもしばらくは1人だった。でも古賀がみんなのいない所で声をかけてくれたり、励ましてくれたおかげで今までのように苦痛ではなかった。分かってはいるけど、みんなの前では声をかけたり構ってくれなかったりするのとは今までよりずっと悲しかった。古賀が私のためにそうしてくれているんだとしても……。

「悪いな。辛い思いばかりさせて……」

「……」

誰も私の事なんて信じてくれないと思ってた……。だから信じてくれただけでも充分嬉しい……。初めは純粹にそれだけしか思っていなかったのにだんだん欲が出てくる。

いつになったら解放されるんだろう――と。

そして1カ月が経ってやっと解放される日が来た。

茜が”精神的な病気”で学校を休学する事になったと古賀からクラスメートに連絡があった。

その曖昧な表現のせいで始めは”あんたのせいで茜はそうなったんでしょ！”と罵られたりもしたけど、古賀がきちんと茜の病気の事を話してくれたおかげでいじめはなくなってみんなは私に謝ってくれた。

でもやっぱり自分をいじめた人達とはあまり仲良く出来なかった。相手も私に対して遠慮してるし、私だって今までの事を水に流してあげられるほど優しくもない。

微妙な学校生活の中私を気にかけてくれるのが古賀で、私はますます古賀に惹かれていった……。

でも古賀は先生で私は生徒……。古賀が私に特別な感情があって気にかけてくれるんじゃないって分かってる。

……古賀は誰にでも優しい。茜に対しても最後まで優しくかった。

みんなが茜を中傷しても病気だから仕方ないとみんなをなだめていた……。

優しいのはいい事だけど、辛いという感情を与えるのも知って欲しい……。

優しさは時に残酷だよ……。

古賀が優しくしてくれるたびに嬉しくなって、他の子と一緒にいるともやもやする……。私も古賀にとってはあの子達と変わらないと思い知らされる……。

諦めようと思っても諦められなくて、この気持ちはどこにいけばいいんだろう。

お兄ちゃんの事があって人なんて信じられないって思った。だから恋なんてしたくないって思ってた。古賀に対する想いも一時は消えてしまったのに、またその想いは私の胸に灯って私を苦しめる――――。

そんなこんなで学校生活を送っているともうすぐ夏休み。夏休みに入る前に告白しようなかと真剣に考えた。

告白する事によってこの想いに踏ん切りがつくかもしれない……。振られるのは分かってる。……それなら夏休み前に告白して振られた傷は夏休みに癒せばいい。

自分の想いを打ち明けることによって古賀を困らせるかもしれない……。でもこの気持ちを抑える事がもう辛い。

悪い結果を分かっているながら告白するほど怖い事はない。でもどこかで安心できる。振られても仕方ないって自分を慰める事ができるから。それは開き直りかもしれないけど……。

寮も元の場所に戻った。編入生が入ってこない限りしばらく1人部屋らしい。それには正直ほっとした。もし同室の子がいじめていた子だったらかなり気まずい……。

部屋は2年生になったら部屋替えがあるとの事だった。

「あと一週間で夏休みか……」

寮は基本的にずっと使える。普通なら使えない所が多いけど、こ
こは虐待されている子が多いから帰る場所なんてない。でもご飯は
8月中はないらしい。私ももちろん家には帰れないからここにずっ
といるつもりでいる……。

「よし決めた！告白しよう！」

そう決めた日から何かか吹っ切れたような気分になったけど、変
に緊張して古賀を見る度今までよりもドキドキして目を逸らす事も
多かった。その度心の中で謝っていた。

そして終業式はすぐにやってきた。

相変わらず気まずいのは変わらないけど、少しはましになって”
友達”といえる子は出来た。友達と言っても一緒にお弁当を食べた
り移動教室と一緒に行くだけで外見は友達と言えても中身はないよ
うに思う……。

それはやっぱり私に問題があるんだろうなと思う。どこかで壁を
作って人と自分でどこか一線引いてる。また裏切られたくないから、
例え裏切りられても傷が浅くてすむように……。

でも古賀はその壁を崩そうとしているように感じる。……怖いけ
ど、そこまで私も嫌がってないと思う。

信じる事は怖いけど、それと同じぐらい人を信じたい——そう思
ってる。

「はあ……」

校長先生の話が終わってあとはクラスでHRだけ。

宿題をもらって通知表をもらって最後の挨拶か……。

「川本」

「はい」

次は私が……。成績がどうよりも古賀と1対1っていうのが
緊張する……。

「木下」

「……はい」

ドキドキしながら古賀の所に行った。

古賀はもちろん先生モード。素の方もこつちも同じぐらい……いやこつちの方がよく見てるのに違和感を感じる……。

「はい、これが木下の成績表。全体的に良くできてるけど数学がだんとつに悪いな……。補習を受ないといけないまで悪くはないけど特に数Aは全然出来てなかったみたいだから復習しといた方がいいと思うぞ」

そう言つて古賀はまっすぐ私の方を見た。

別にやましい事があるわけじゃないのに私はまた目を逸らしてしまつた。

「お前……最近ずっと俺から避けてねえか……？放課後、残れよ」それはとても小さくて低い声だったのに私には一言一句はつきり聞こえた。

……すつごく怒つてた。まあ自分も古賀の立場だったらいきなり避けだしたりしたら怒るかもしれないけど。

「……で？なんなんだよ。いきなり避けだしたのは？」

「それは……」

緊張して……なんて言いづらい。しかもなんでいきなりって感じだし。

告白しようつて思つてたのにいざとなると怖くなって何も言えない……。言えるつて思つてると実際言うのは全然違う。

「なんで黙んだよ。また何か面倒な事あつたか？」

違う、そんなんじゃない。

「言わねえと分かんねえだろ？それとも俺が嫌いになつた？」

「……」

イライラした声だけどこか焦っているように聞こえる……。

「はあ……。もういい」

「……っ」

待つて、行かないで！私は古賀に言わないといけないことが……！嫌いじゃない、好きだって言つて、誤解を解かないと……！

「嫌いじゃ、ない」

「え……？」

「私は、私は……古賀が好き」

あ……、言っちゃった。とうとう言っちゃった……。振られるって分かってても期待してしまう。……ダメ元で言ったのに振られるのが怖い。

泣きそうで、古賀の顔が見れなくて、私は俯いた。

告白するつもりだったのに、なぜか後悔して……。踏ん切りをつけたかったくせに、今までのように仲のいい生徒と先生の関係でいたかったと思う自分がいて……。耳を塞いで逃げてしまいたい……。でも体が思うように動かなくて、返事を聞きたいと思っている自分もいる。いろいろな思いが絡まりあって矛盾する……。

「俺は……」

次に行く言葉を聞きたくない。嫌だ、嫌だ、逃げたい。

「お前を生徒だと思ってる……」

「……っ」

やっぱり……。分かっているけど振られるのは想像以上に辛かった。

「でもそれ以前に俺はお前を愛してる」

……え？

思わず顔を上げると穏やかに笑っている古賀の顔があった。

「俺、お前に嫌われてんのかって思ってた。それ聞いて安心した」

え？え？

聞き間違いじゃない？さっき古賀……私の事、愛してるって言った？

「お前……、俺の言った事信じてねえだろ」

「……」

「めったに言わねえからよく聞けよ……」

古賀はそう言って口を私の耳に近づけた。

「俺は理香を愛してる」

小さな声だったけど私にははっきりと聞こえた……。

夢を見てるんじゃないのかって本気で思った。でもこれは現実で

……。

私はポロポロ涙が出てきた。古賀がそんな私を優しく抱き締めてくれた。

嬉しいと思った。幸せだと思った。

私は兄と離れてまともな恋愛をしていると思っていた。――でも全ては仕組まれていた事だった。

兄という檻から逃れたと喜んでいただけ、結局は古賀という檻に新たに閉じ込められたという事に私は気づいていない――……。――。

「29」制裁（前書き）

古賀の性格がかなり酷いです。閲覧にはかなりご注意ください（><）
特に女性の方は辛いと思われます。

「29」制裁

……最近、理香が俺の事を避けてる気がするが気のせいか……？
いや、気のせいなんかじゃねえな。目があったらすぐ目を逸らしや
がる……。

まさかあれを見られてた……？ いや、そんなはずねえ、あれがあ
いつの耳に入るわけ……。それに避けだしたのは最近だろ？ あれか
らだいぶ時間は過ぎてる。……もしかしたら気づいてねえだけでず
っと避けられてたかもしらねえ……。

「……っ」

意味分かんねえよ……！

もし”あれ”が理香の耳に入ってたならこれよりもっと激しく俺を
拒絶するはずだ。だから見られてるはずねえ……。そう思うが悪い
方に悪い方に考えちまう……。

これだけははっきりしてる……。 ”あれ”が理香の耳に入ってたら
終わりだ。

――遡る事、本庄が転校したすぐ後――

「先生、ご迷惑かけてすいませんでした……」

「……いや」

「……っ。先生……私本当に先生の事が好きなんです。これだけは
信じて欲しいです」

「……」

あつそ……。別にそんなのどうでもいいしな。そう言って欲しい
のは理香だけ。お前なんかになんかそう言われると虫ずが走る……。キモ
イだけ。

「先生が私の事好きじゃないのは分かってます……。でも、このま
ま想い続けるのは許して下さい」

許して……。か。俺の事をどう思ってたようが俺はどうでもいい。だ
が、理香を傷つけた事についてはちゃんと償ってもらうぜ？ お前は

もう二度とここには戻ってこれねえよ？幸い、親はもうお前の事お手上げみたいだしな……。

「……本庄、ちょっと付き合ってくれるか？いろいろ話したい事もあるし」

「え……、はい！」

本庄は今まで見た事がないぐらいの嬉しそうな笑顔になって頬を赤く染めた。

普通ならここで良心が痛むだろうが俺にはそんなの全然無縁だ。

これからお前に地獄を見せてやる。理香を傷つけた制裁は俺が下してやるよ……。

自分がそれを利用したのに理不尽だ、おかしいという奴はたくさんいるだろうが、俺はこういう人間だ。

俺は本庄を車に乗せた。用事が終わったらすぐに病院に行けるようにと言ったらすぐに信じた。それ所か用が終わったら別れるという事を寂しく思っているような顔だった。

ばかじゃねえの？お前が行くのは病院じゃねえし。

俺が歪んだ笑みを浮かべているのに、ばかな女は気づかなかった。

「あの……、先生？一体どこに……？」

俺が連れて来たのはボロい倉庫が並んであつてそれ以外何もない所だった。

「ああ……それはね」

——ドスッ

俺は思いっきりお腹を殴った。

「せ、ん……せ？」

信じられないと言うふうに見開きながら苦痛で顔を歪ませる本庄に睡眠薬を嗅がせた。

「な……ん……」

ドサツと本庄は俺の方に倒れてきた。

さあ……これから始まりだぜ……？

「イツキさん」

「ああ、もう来てたのか」

後ろを見ると俺の呼んだ奴らがいた。いるのはがたい男が3人。どれも俺の後輩で昔は俺の下についてた奴らだ。

――2年前まで俺は県下で一番でかい暴力団の幹部だった。もちろんこれは俺の裏の顔。伯母ですらこの事実は知らない。

正直俺はそんなに喧嘩は強くない。だが頭だけはそこそこよかった。

本気で戦わなくてもどこを殴ればいいのか――正確な急所を知っていた。

そして俺は下で働くより上に立って人を操る方が向いてたし、他の奴らとは違ってちゃんと表裏を使い分けられる。ポロツとばらしたりなんてドジな事はしねえ。だから俺はいろんなスパイを任された。ヤクザや警察を欺くなんて朝飯前で俺はかなり重宝されていた。…

…理香は初めてばらしちまった奴だが。

そしてなにより歪んだ性格……。俺は天性のサディストと言われ総長よりもある意味恐れられていた。

総長は肉体を俺は精神を壊す鬼だと周りの人間はそう言っていた。俺の正体を知ってる奴はほとんどいなかった。同じ暴力団の中でも知ってる奴はほんの一握り……。味方も敵も俺の事は「イツキ」と呼んでいた。

「本当に好きなようにしていいんっすか？」

「ああ、いい」

俺がそう言うのと男達はやらしく笑った。

1人は鞭打ちが好きでかなり加虐的なサディスト。もう1人はスカトロ好きの変わった性癖を持つ奴。最後は顔はいいのにレイプが好きでレイプじゃねえと勃たたない訳ありの奴。

多分こいつらにかかれれば本庄は精神を壊されるだろう……。でも俺にはそんな事構わねえ……。俺にとってはただの暇つぶし。

「……ん」

薬が切れて本庄は目を覚ました。

「え、何これ……っ！」

「起きたんだ？」

そう言つて俺は本庄に笑いかけた。だが本庄は今自分が置かれた状況に戸惑っていた。

「先生……？なんで!？」

まあ当然だよな。本庄は今裸で手と足はそれぞれロープで縛られていて動けない状態。それを俺はつめたい目で冷笑を浮かべながら見下していた。

「紹介したい奴らがいるんだよ……」

俺がそう言つてさっきの男達を部屋に呼んだ。

本庄は裸だったのを思い出したのか顔を赤くしたがすぐに真っ青になった。

まあ、なんとなくヤバイ雰囲気っていうのは分かるよな……？

「先生、これ外して下さい！お願いします、すぐに病院に連れて行つて下さい！」

パニックになって叫びながら目に涙を浮かべ哀願するような目線を俺に必死で送る。だが俺は薄ら笑いを浮かべるだけ……。

「先生……っ！」

悲痛の叫びとはこういうのを言うんだろうなとぼんやりした頭で思った。

男達はギラギラした目でさまざまな欲望が渦めいていた

「……やれ」

俺がそう言つと男達はお互いに目を合わせ本庄に近づいていった。

「や、やめて！近寄らないでえええ……！」

バシッ——！！

「るせーんだよ」

男は本庄の頬を思いつきり打った。

頬の痛みと余りに低い声に思わず本庄は黙ったようだった。

「そっ……いい子だ、ねっ」

バチンッ！！！！

「い……っ、ああああ！！！！」

男は本庄の尻を思いつきり鞭で打った。

「ああー！。これこれ……。これがいいんだ」

そう言つてうつとりとした顔をする。

この男は女の叫び声で勃起するらしい。……悪趣味だがこれはほんの序の口。

「次は俺だな」

見るからに汚らしい男がズボンのベルトを取り、ぶつを出す。それを見て本庄は真っ青になった。

「うへへへ……」

ガツと髪を掴んでぶつを口の中に突っ込んだ。

「歯たてんじゃねえぞ……」

「んぐっ！ん、ん……」

本庄は顔を歪ませもう大泣きしていた。なんで私がこんな目に！？そう顔に書いてある。

こいつは1カ月に1、2回しか風呂に入んねえ……。かなり臭いだろ？

「はっ、はっ」

男は腰を前後に動かしもうじきくる快樂の波に顔を歪めた。

「う……っ！出るっ！」

そう言つて男は自分の欲望を本庄の口の中に吐き出した。

「はぁ……っ」

「んぐっ」

本庄はそれを吐き出そうとするが男はそれを許さない。

「ドロドロしてて飲み込みにくいのか？……だったら水をやるよ！」

シャー！と尿を本庄の口の中に排泄した。

「ごほっ、ぐぐっ」

気管に入つてむせたように咳をして半分以上を吐き出した。

「うええええ……」

「吐き出すなよ!!」

そう言っで顔を踏みつけた。

「床に落としやがって……。もったいないだろうが。這いつくばって舐める!!」

「うあ、あああつ。いやあああ……」

「うるせーつつってんだろ!!」

バチンッ!!バシッ!!

鞭の音が響きわたる。

「じゃ、俺が1番で」

そう言っで何も準備が出来ていない……。なんの穢れも知らない少女の中に自分のモノを貫いた。

「ああああ!!痛い、痛い、抜いてええ!!」

本庄の絶叫が響きわたるが男達は歪んだ笑みを浮かべたまま。そして俺はその光景を冷たい目で見ていた。

「うぐつ、ひつく、ひつく……。先生……。助け、てえ……」

「お前はそう目で訴えていた理香にどんな事したんだ……?」

「……、なんで理香が出てくるんですか……?それにあれは……私がしたわけじゃ、ない……。ううう……」

私がしたわけじゃないねえ……。だがお前がそう仕向けたんだろ!!

「……こいつを”人形”にしねえ?」

俺がそう言っで男達の動きが止まった。

「30」制裁2

”人形”その言葉の意味を知っている3人は凍りつく……。今まで事情の最中だったのにそれが嘘のように萎えている。

「おまえらはどう思う……？」

薄く笑って男達に問いかける。

「……え、俺は……」

言葉を切って1人の男は本庄を見た。

その目には本庄に対する憐れみや同情、そして俺に対する恐怖が宿っていた。

「イツキさんがそうしたいなら……別にいいと思うっすよ？」

違う男が恐怖を誤魔化すように笑っているが顔が引きつっている。

「……冗談だ。そんなめんどくせえ事しねえよ」

俺がそう言うのと男達は安堵したような表情になった。

「別にしてもよかったけどな……」

小さな声で呟いたので男達の耳には入らなかった。

”人形”とは誰かが昔に実行していた事だった。目的は脱走しようとする女達を逃げられなくするように作ったものだ。そして今、それを実行している……というか実行出来る奴は数少ない。

”人形”とは分かりやすく言うと四肢を切断された女の事を言う……。

闇医者だつてそんな事してくれる奴は数少ねえ。となるとそれを実行する誰かが必要だった。そして俺は頼まれればその仕事をしていた。

麻酔も何もしていない女の悲痛の叫び声を聞きながら俺は笑いながら女達の四肢を鋸や鉗で笑いながら切断していた。

出血死しないように縛ったりはしていたが感染についてはそれほど気をつけていなかった。だから感染が広がって臭くなった女達は生き埋めにされた事も多かった。

生きてもこれからは人間扱いなんてされねえ。それこそ性欲奴隷から始まりペット、鞭打ち人形——いろんな物として裏で売買されている。もはや人間ではなくただの物だった。生き埋めにされた方がましだ。

「こいつはソープに売るか、玩具として譲るかだな」

後でこいつらに使い勝手を聞くとするか……。

前を見ると、女は口、まんこ、アナルをそれぞれ塞がれていた。

「……気持ち悪い」

こついうのは生理的に気持ち悪いと言うか汚い……。穢らわしくて見たくないかもな。……だがこついうのを見るのが嫌いじゃない自分がいる。矛盾してるし、自分でも歪んでると思う。

その光景をしばらく見ていたがやがて飽きてきた。

「もういい……」

すると男達は名残惜しそうに本庄から離れていった。そして服を着始める。

「あ……、あああ」

本庄はかすれた声で声にならない声を出す。

顔は涎と鼻水でぐちゃぐちゃになり、もう目は焦点が定まっていなかった。

「どうだ？よかったか？」

男達にそう聞くと、口々にに感想を述べた。

「めっちゃよかったすよ。いい声で鳴いてくれたし！……でも最後は声がかすれてあんま鳴いてくんなかったのが残念すけど」

はあ……とため息を尽きながらそう言った。

「初めてだから仕方ないが、あんま飲むのうまくなかった。まあ、調教のしがいはあるんだがな」

そう言つて歪んだ笑みを浮かべた。

「締まりは処女なだけによかったですよ？でも今じゃガバガバ……。2本刺しはあんましない方がいいですね」

そう言いながら手に付いた精液をハンカチで拭いていた。

「……そうか。じゃあこいつやるよ。別に売ってもいいし」

俺がそう言っていると男達は相談し始めた。

売って金を山分けしようと言う奴、自分の奴隷にしたいと言う奴、別にどうでも言いと言う奴……。最後にはスカトロ好きな奴が本庄を飼う事になった。

どいつのとも行っても同じぐらいきついと思うがまあ頑張れって感じた。

「そう言えばこれってイツキさんの事好きなんっすよね？」

……そんな事言ってるねえのになんで分かるんだよ。

「……さあ」

「多分そうだと思いますよ。だって犯されるよりイツキさんに見られるのが嫌みたいでしたから」

そうか？俺には全然わかんねえ……。

「最後だし抱いてあげたらどうですか？」

俺は本庄を冷めた目で見た。その目には軽蔑、嫌悪、憎悪などが宿っていて憐れみや同情なんて全然なかっただろう。本気で汚くて気持ち悪いと言うように、穢らわしくて見たくもないというように――。

「誰が抱けるかよ。こんな汚い奴……」

「あははは、イツキさんがそう言っていると本当に人間じゃないって否定された気分になりますね」

気絶しているようで本当は起きていた本庄は斎の言葉を一語一句聞いていた。壊れかけだった本庄の心がこの時に完全に砕けちった――。

そしてその後、本庄がどうなったのか俺は知らない。……まあ、確実に精神は壊れて頭がいかれちまってるとは思うが。

「後は理香の兄をどうするか……。それを決めねえとな」

「31」恐怖

理香は古賀と両思いと知った日の夜、悶々としていた。

両思なのは嬉しいけど、今度はどんなふうに接すればいいのか分からなくなった。

恋人って具体的に何するの？でも生徒と先生だからばれちゃいけない……。じゃあ今までみたいにしておけばいいの？……。それじゃあ両思いの意味あるの？そもそも今までどんなふうにしてたっけ？振られる事しか頭になかったからどうしたらいいか分からない……。

「はあ……」

両思いなら幸せになれると漠然と思っていた。でも実際は違う……。

……過去が、私を追いつめる。

どうして安易に兄と交わってしまったの？あの時は仕方ないと思った。でも今考えるときちゃんと拒否してたら……。お母さんに相談していたら……。あんな事にはならなかったかもしれないのに……。自分の愚かさを何度も呪った。そして自分の体がすぐ穢れているように感じて古賀には釣り合わないと思った。穢れた体を綺麗にしたくて何度も体を洗った。……。でもどんなに洗っても綺麗になつた気がしなかった。

「初めては……。好きな人としたかった」

そう呟いて何時間も声が枯れるまで泣いた。

お兄ちゃんの事は好きだった。初めてを奪われてからも……。でも古賀を愛してしまった今では憎しみの感情が好きという気持ち遥かに超えていた。そして……。恐怖も感じた。お兄ちゃんはどうな事をしてでも本当に欲しい物は手にいれる人だった……。

じゃあ私は……。？私の事も諦めてくれるはずない……。となると被害を受けるのは古賀だ。そう思うと身震いした。古賀は……。あの人だけは巻き込みたくない。

「……っ、うつ……」

古賀と両思いな事は嬉しいけど、その嬉しさよりも罪悪感と恐怖が私を包む。

誰にも相談なんて出来ない……。それどころかこれは何があってもばれる訳にはいかない、絶対に――……。――。

そんなジレンマを抱えたまま時間だけが過ぎていったけど古賀とは何の変化もなかった。

両思い〃付き合うって思ってたけど付き合いたいとも付き合うとも言っていない。あの後一応メルアドは交換してメールも毎日来るけどデートとかそういうのはしてない……。まあなかなか出来ないとは思っけど。今の私達の関係ってなんだろう……。

お母さんはお金とか必要な物は送ってくれるけど会ったりとかはしてない。仕事が忙しくて仕方ないとは思っけどやっぱり寂しい……。――。

……お兄ちゃんはどうしてるかな。まだ私の事探してるのかな？ ううん、案外思っているほど私に執着してないのかもしれない。

お兄ちゃんに対する恨みや恐怖は段々薄れていきつつあった。それはお兄ちゃんと話し合うべきだと思っただからだった。

このままじゃ私は前に進めない。古賀の事もこれからの事も……。怖くても前に進まないといけない。

ブーブーブー

携帯のバイブが鳴って開けて見るとそれは予想通り古賀からのメールだった。内容は大した事は書かれていなかったけど、それを見てお兄ちゃんとけじめをつけないといけない……。という気持ちが大きくなった。

「よしっ！」

バチッ！！

気持ちに踏ん切りをつけようと自分の頬を手の平で叩いた。

「……っ、痛……。力入れすぎたあ」

頬をさすりながら私はお母さんに電話をかけた。

プルプルプル……

ガチャ

「お母……」

「只今電話に出ることが出来ません……」

ピッ

今考えたら普通に仕事に決まってるか……。メール入れて明日か
ければいいか。

……でも私思いたったらずぐ行動しないとやる気無くなっちゃう
んだよね。

そして3時間後――

来てしまった……。家には誰もいないっぽいな……。

よく考えたらお兄ちゃんがいるか分かんないのに来ちゃった。

「……」

私ってあんまり後先考えない性格だな……。あの時もそうだった
し。

思い出すのはお兄ちゃんと知らない人の事情の最中……。今でも
思い出すとあんまりいい気分じゃない。

あの時はお兄ちゃんにが恋しくて来たけど今は全然違う……。私
はお兄ちゃんを断ち切らないといけないんだから――。

それを悲しいとは思わない。それほどまでに古賀の存在が私の中
で大きくなっている――……。――。

「ふう――」

深呼吸をしてドアの鍵を開けた……。

中を見たけどやっぱり誰もいない。

何年も住んでいたのにどこか自分の家という感じがしなかった。

……自分の家というのは間違いない。物品の配置が変わったわけ
もない。でもここが”自分の居場所”というのには違和感のような
ものを感じた。自分の生活していた痕跡がなくなっているようにも
感じたし、寮生活に慣れてしまったのもあると思う……。

自分の部屋は私が帰ってから全然変わってなかった。部屋の主が

いないから当然かもしれないけど気持ち悪いぐらい前と変わってない。

しばらくは懐かしくて自分の部屋を漁っていた。

ガチャガチャ

ドアに鍵が差し込まれる音がシンとした家ではよく聞こえて思わず手を止めた。

……誰？

ドキドキしながら部屋を出て階段を降りていく。途中で声が聞こえて家に帰ってきたのが誰なのか分かった。

「どうぞ」

「……お邪魔します」

お兄ちゃん……と女の人……？

あの時と同じ人かは分からないけどやっぱりあの事を思い出した。胸がなぜかもやややる気がする。なんで？本当は私、お兄ちゃんの事が好きだったの……？ううん、違う、妹が兄のああいふシーンを生々しく想像したからこんな気分になるんだ。そうに決まってる……。

「珍しい？」

「え……、ううん。初めてしだから」

初めて……？じゃああの時の人とは違うの？

——はっ

そんなの別にどうだっていい……。

「……ご両親は？」

「いない」

「そっか……」

「俺の部屋行つといてくれる？お茶用意してるから。俺の部屋2階の1番奥だから」

女の人が2階に上がって来そうだったので慌てて自分の部屋に隠れた。

……別に隠れる事なかったよね、自分の家なんだし。でもなぜか

出にくかった。

しばらくしてからお兄ちゃんも2階にあがって来る気配がして心臓が今までと比べものにならないくらいドキドキした。

ダメだと分かっているけど気になってついつい聞き耳を立ててしまった。でも声が小さくて聞き取りにくい。取りあえずエッチではなくてほっとした。

少し躊躇ったけど、部屋から出てお兄ちゃんのドアの前で聞き耳を立てた。

「この人は俺の大切な人……」

「……っ」

聞こえてきたのはお兄ちゃんの優しい声と女の人の息を呑む声……。

お兄ちゃんのその声が誰に向けているのかはすぐに分かった。……

……私だ。

思わず身震いした。

お兄ちゃんはその事を諦めているかもしれないと思ったけどそんな事なかった……。だって……。あの重く絡めつくようなどこか狂気を含んだような声は私にだけ向けられていたものだったから。

「で、本題だけど……。どうするの？それ」

それって……？

「それなんて言わないで……。この子は物じゃない」

”それ”じゃなくて”この子”……。もしかしてお兄ちゃんとあの人の……？

「……っ」

なんで、なんで！？意味が分からない。お兄ちゃんはその人の事が好きなの？別にそれはいい事のはずなのに……。胸が痛いのはどうして？裏切られたような気がするのはどうしてだろう。

ドアをそつと開けて2人を覗き見た。

とてもじゃないけど恋人のようには見えない……。子供まで出てくるのになんで……。

そこはまるで修羅場のような空気が漂っていた。

「そう……。そこまでお前がしつこいとは思わなかったよ。ほら……」

そう言ってお兄ちゃんはお金に女の人にお金を渡した。

何それ……。子供が出来たのに、まるでどうでもいいみたいな……、むしろ邪魔だと言うような言い方……。

私は思わず唇を噛んだ。わなわなと震える手を抑えながらドア越しにお兄ちゃんを睨んでいた。同じ女として女の人に同情したし、お兄ちゃんの無責任な行動が許せなかった。

きちんとしていたらこんな事になるはずない。その証拠に私はそんな事態は起きなかったのだから……。

どうしてこんなに酷い事言つの……？

「これが欲しかったんだろ？」

酷いよっ、お兄ちゃん！こんな酷すぎる……！

「……私、産むから」

「は……？」

「魁人には迷惑かけないから。1人で産んで1人で育てる」

「何それ？それで俺に親になって欲しいっていうのが本音？」

「そんなんじゃないっ」

「はつきり言っただけ。そんなんされたら俺がどんな目で見られるか分かってる？俺の子でもないのに、まるで俺が勝手に生ませて捨てたって事になるんだけど……」

なんでこんな酷い事がホイホイ言えるの……？女の人表情は分からないけど、女の人の本気で1人で産んで育てる事は声で分かる

……、なのに！

「それは……」

「そんなに生みたいの？」

お兄ちゃん、分かってくれたの？……でも今までの事を考えると嫌な予感がする。

「いいよ……なんて言うと思ってるの？」

お兄ちゃんが笑い終わっても、お兄ちゃんの狂気を孕んだ笑い声が耳から離れる事はなかった――……。。

「32」汚点

私は怖くて怖くて寮で1人でいると嫌な事しか思い出さなくて思わず古賀に電話した。

プルルル、プルルル

「はい」

「古賀……、怖いよつ、助けて……っ」

「どうした！？ いまどこにいるんだ！？」

「……寮」

「分かった、今すぐ行つてやる！ 電話はそのままにしておこうか？」

「……ううん、大丈夫」

「そうか……、じゃあまたな」

ピツ、ツー、ツー

「……」

なんで電話なんてかけちゃったんだろ。古賀に迷惑かけたくなかったのに……。でも1人でいたくなかった。

お兄ちゃんがあんなに酷い人とは思わなかった。お兄ちゃんの事はある程度理解しているつもりだった……。でもあんな事するなんて……。つ。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

顔もよく分からない女の人に謝った。

少なくとも、私が逃げ出さなければあんな事になる事はなかったはずだ。私が……。お兄ちゃんをああした一因である事は疑いようのない事実……。

でもどうしてあんな酷い事を何にも関係のない人にしたの？ もしかして、ただの暇つぶしのためとか……？

「古賀……」

お母さんは隠し続ける事が出来るだろうか……。もしお兄ちゃんが私を見つけれ出せたら……。次のターゲットは間違いなく古賀だ。

「……っ」

何があっても隠し通さないと……。

しばらくしてまた電話が鳴った。

ブルブル……

そこには古賀と表示されていた。

「はい！」

「あ、俺。寮の近くにいんだけど出てきてくれるか？さすがにばれ
るとまずいから」

「分かった……」

「ああ、ついでに外出届けも出しとけ。今日は1人で寮にはいたく
ねえだろ？」

「……」

確かにそれはそうだけど……、それって古賀の家に泊まるって事
……？

「何変な事考えてんだよ。いきなり襲ったりしねえよ」

「へ、変な事なんて考えてないから！」

声が少し上擦ってしまった。

「そうか、それは残念。じゃあ寮を出てスーパーの方に歩いてくれ。
そこら辺にいるから。もし分かんなかったら電話しろ。じゃあな」

ツー、ツー

まあ確かに古賀からしたら私なんて全然子供だし。よく考えたら
私のどこを好きになったんだろう。結構生意気だし、それにこんな
幼児体系なのに……。

考えれば考えるほど不安になる。それに私は古賀に大きな秘密ま
で抱えてる……。それを話すべきだと思うけど……。でも話してしま
ったら古賀は私から離れていくに決まってる……。そして私を軽蔑
するんだ。

「……っ」

嫌われたくない。せっかく両思いだって分かったのに……。っ。で
も隠しているのがすごく後ろめたくて辛い。

話しても話さなくてもどっちでも嫌な思いをするのは分かってる……。そして私はどっちを選んで後悔して苦しむんだろう。

暗くなる気持ちを振り切って必要最低限の服や下着などを用意し、私は古賀の言われた通り寮のおばちゃんに外泊届けを出して寮を出た。

確かスーパーって言うてたな。この近くのスーパーなんて1つしかないからすぐ分かるけど……。スーパーらへんって具体的にどの辺り？

「はあ……」

古賀を巻き込みたくないと言いながら私は古賀に助けを求めた。これってすでに巻き込んでるって事になるよね……。

気づくと自分の不甲斐なさにイラついていた。

「理香！」

名前を呼ばれてとっさに振り向くとそこには古賀がいた。

「古賀……」

古賀は汗だくだった。

私がここに来るのに30分以上かかった。つまり古賀はその間ずっとここにいたの……？汗の多さがそれを物語るようだった。

ぐだぐだ考えて来るのが遅くなった自分にイラだってそれと同じぐらい古賀に申し訳なくなった。

「ごめん……。遅くなって」

「は……？どうした？頭でもおかしくなった？」

人がせつかく謝ってるのに何この反応！？……でもこれはいつもの嫌みじゃなくて私に変な気を使わせないように言ってくれたのだとなんとなく分かった。

「服とか持ってきたのか？別に持って来なくてもよかったのに」

……それは私に裸族になれと……？

じーっと軽蔑するような目線を送ったことに気づいたようで古賀はばかにするように口を開いた。

「なんだよ、その目は。変な事考えてんじゃねえだろうな」

変な事考えてるのは古賀じゃないの？

「服持ってこなくていい」裸族とか思ってたねえだろうな」

なんで考えてる事わかったの！？以心伝心？違う、心読まれた！？

「はあ……。あのなあ、考えてる事だだ漏れなんだよ」

「え！？」

「顔に書いてんだよ。ほんつと面白い奴だな」

そう言って古賀は吹き出した。

そんな顔に出てる！？と焦ったけど、本当にばれたくない事はばれてないみたいだから安心した。……もし私がこんなに落ち込める理由を聞かれたらきつと答えに困るから……。

「俺が服持ってこなくていいっていったのはそれくらい買ってやるっていう意味だよ」

そっか……。変な事考えていた自分が急激に恥ずかしくなった。

「そ、そっかー」

恥ずかしさを隠すように俯いた。

古賀はそれには触れず私を車に乗せた。

男の人の車に乗るのは初めてで私は必要以上に緊張した。

「もう晩飯の時間だな……。なんか食いたい物とかあるか？」

「え……。別になんでもいい」

はつきりいつてあんまりお腹は空いてなかった。本当は空いてるのかもしれないけど、緊張でそれどころじゃなかった。

よく考えたら初めて寮で会った時以外は学校でしか会った事ないんだっけ……。そう考えると余計緊張する……。

「お前緊張しすぎだろ……」

そう言って古賀は苦笑いした。

「そんな事ない！」

「どこでもいいなら焼肉店でいいか？」

「……」

あんまり食欲ないからそんなの食べたくない……。でもなんでもいいと言った以上何も言えない……。こういう時こそ心を読んで欲

しい……っ！

そう思いながら古賀を見ると、何睨んでんだよと言われてしまった。どうやらどうでもいい事は伝わっても、分かって欲しい事は伝わらないらしい。

それからあまり食欲がないまま結局焼肉店に行く事になった。

はつきり言って全然食べられなかった。でも古賀がおいしそうに食べてるからまあいつかって思った。古賀の奢りだしね……。

それから古賀の家に行く事になったけど……。変に緊張する。ちらつと古賀を見ただけだって普通。

……心と体は別だって聞いた事がある。もしかして古賀もそうとか？心では好きと思っても体は私なんかじゃ満足しないの？例え両思いでも体の相性がよくないから別れるって聞いた事がある……。

こんな事考えるのは早いって思う。まだつき合ってるかも曖昧でキスすらもしてないのに……。でも私の場合体が穢れてると思ってるからそういう事ばかり考えてしまう……。

「着いたぞ」

あれこれ考えている内に古賀の家にはすぐ着いた。古賀の家はオートロックのきれいなマンションだった。

「うん……」

そう答えたものの足が動かせない。

「警戒してんの？安心しろ。手なんてださねえから」

古賀は私に気を使ってそう言ってくれたんだろう。でもその言葉は私を傷つけた。

”お前みたいな穢れた体の奴を抱く奴なんて誰もいねえよ”誰かにそう言われた気がした。

古賀は何も知らないから私を好きになってくれた……。でも真実を知ったら……。きっと本当の私を受け入れてはくれないだろう。

古賀の家に入ると、古賀はお風呂の用意をしてくれた。

お風呂というどうしてもエッチの事を考えちゃうけど、古賀はきつと私を抱かない。それにほっとしていると同時に、ばれている

はずなんてないのに過去の事がばれているんじゃないのかという不安が頭をよぎる。

古賀は……どうして私が電話をかけてきたか全然聞かなかった。本当は気になっていると思う。でも私に気をつかつてくれているんだろ。それに私も、古賀に聞かれても答えに困る。

取りあえず客間らしき部屋に案内されてあたりを見渡した。部屋は和室であり物がなくて少し寂しい感じがした。

好きな使っていていいと言っていたけど特にする事もなく三角座りして端っこでぼーっとしていた。

――ガラッ

「うわっ、端っこで何してんだよ！？リアルに怖い……」

「……別に」

「そうか？あ、風呂沸いたけど先入るか？」

「古賀の後でいいよ」

さすがに古賀が洗ってくれたのに先に入るっていうのは気が引ける。

「じゃあ俺先入ってるから。押し入れに布団入ってるからしいておいてもいいぞ？」

「うん」

しばらくして古賀がお風呂でガタガタと何かをしている音が聞こえた。

その間暇なので押し入れから布団をしいた。

にしてもこの布団……誰が使うんだろ。もしくは何人の人が使ったんだろ……。普通に考えたら古賀の部屋ですると思うけどここでやってる可能性もないわけじゃない……。

「はあ……」

今日はとことんネガティブだな……。

普通だったら好きな人の家に来たらそれだけで緊張して嬉しくなるような気がするけど……。

変な事ばかり考えて卑屈になっていく。

古賀は私の事を好きだっていつてくれた。でもどれくらい？さすがに生徒としてよりは好きになってくれたんだろうけど、少しお気に入りの子？なんてなく気になってる子？今までの恋人のような恋愛感情を持ってくれてる？

どれも考え方が一方的だな……。好きになってもらう事ばかり考えて自分から好きになろうとしてない。

「おい、風呂次入るか？」

古賀は暑いのか上半身裸だった。普通の女の子だったら驚くかもしれないけど私は驚かない。

「……うん」

「反応薄いな……。普通もつと驚くんじゃねえ？」

「だって見慣れてるし……」

そう言っと思わず手で口を塞いだ。

確かに見慣れてるのは事実。お兄ちゃんの裸を何度も見たんだから。でもそれを言ったら古賀は何を考える？私が何人もの男と関係を持ったと思う？淫乱だと思う？軽蔑する？

「……ふーん」

私が想像していた反応とは違った。それがどうした？別にどうでもいい”そういう感じだった。

古賀は私がどういう男関係を持ってもどうでもいいんだ……。軽蔑とかよりも無関心の方がずっと辛い。

古賀は……。本当に私の事好きなのかな？

「私お風呂入ってくる！」

私は泣きそうになっているのがばれないように俯きながら逃げようにしてお風呂場に向かった。こんなので泣いたら意味分からねえとか言われるかもしれないから……。

「待てよ」

そう言われて腕を掴まれた。

「……何？」

私は俯いたままそう言った。

ヤバイ……。今まばたきしたら絶対涙が零れる……。

「なんで泣いてんだよ……」

顔をぐいっと上げられて目が合った。

言えない、言えるはずない。……いっそばれてしまっただけで楽になりたい。

「お前が泣いてるとどうしていいか分からなくなる……。泣くな……」

そう言ってきつく抱き締められた。

古賀……。あなたと会わなければ私は泣かずにいられたのかな？
こんなに辛い思いも、愛しいという思いも知らないまま……。でも
もうあの頃には戻れない……。あなたを知ってしまったから。そして
あなたが私の負った罪の重さを思い知らせた。

「……抱いて」

そう言っただけで古賀は目を見開いた。

古賀に抱いてもらったからといって過去が消えるわけでも塗り
替えられるわけでもない……。でも、それでもそう言った。

逃げたかった、過去から、そしてお兄ちゃんから……。お兄ちゃん
が私に残した温もりを全て消したかった。

「いいのか……？」

「お願い、抱いて……」

「……分かった」

電気が消され、2つの影が重なった……。

「33」汚点2

「……っ」

腰が痛い……。

いつもと違う景色、そしていつもより体がだるい……。

横で眠っている古賀を見て思わずガバツと起きた。

そうだ、私昨日……。

古賀は私を優しくゆっくり抱いてくれた……。でも私は古賀を利用しているみたいに感じて後ろめたかった。

久しぶりの行為という事もあり、初めてほどじゃなかったけどそれなりに痛かった。

古賀に抱かれてみると、どうしてもお兄ちゃんとの行為を思い出してしまつて無意識の内に比べてしまふ。お兄ちゃんところが違う……と。

この体は未熟な時からお兄ちゃん一色に染められていたから仕方ないとも思うけど、お兄ちゃんの事を覚えている体に嫌悪した。

「……ごめんなさい」

古賀の事は好きだ。……でも好きになるほどお兄ちゃんを忘れられない。”忘れない”と思う気持ちが、”忘れるな”という思いと比例する……。

「どうした？」

はっとして振り向くと古賀が眠そうに目を擦っていた。

「体が痛いだろ？それとも……昨日の事後悔してんのか？」

「違うっ！後悔なんてしてない……」

本当に後悔なんてしてない。罪悪感は今までよりもつもってきたけど……。昨日の行為で古賀が本当に私を好きなんだと伝わったから。古賀は私を優しく抱いてくれたけどそれだけじゃない。私に対する愛が伝わる……。そんな抱き方だった。でも……。それはどこかお兄ちゃんと一緒にだった。抱き方は違うのに、その潤んだ目に宿るも

のはお兄ちゃんと同じだけの重さを感じた――――。

「私、顔洗ってくる……」

そう言って逃げるように洗面所に行った。タオルが置いてあるのを確認して顔に水をかけた。

顔を引き締めて泣かないように……。

「……理香」

はっとして後ろを向いた。

いつの間に後ろに立ってたの？

「なんで泣きそうな顔してんだよ……」

「え……」

そんな顔してない……そう思っただけをみたら本当にそんな顔をしてた。これじゃあ昨日の事を後悔してると思われるかもしれない……。

「やっぱり後悔してる……？」

違う……！でも理由を聞かれたらどう言えばいい？真実を知れば……。

「……」

「ごめんな……」

え……。

古賀はそう言っただけから離れていった。

古賀を悲しませたくないから言えない……、ううん、本当は自分が怖いだけ。古賀に嫌われるのが怖いから……。でも本当の事を行った方が……。

「……っ」

結局何も言えなかった臆病な私は気まずい空気が流れる中、古賀と朝食を取った。

古賀は私に対して怒ってる？呆れてる？

「これからどうする……？」

どうするって言われても……。遠回しに寮に帰って事かな？でも今寮に帰ったら気まずいままな気がする。それで自然消滅……？

そんなの、嫌だ。

「寮には帰りたくない」

「……そうか。じゃあ実家に帰るか？」

暗に古賀の所にいたいと言ったつもりだった。でもそれは通じなかったの？それとも私と一緒にはいたくないからそう言ったの？

「送ろうか？」

古賀にそんな事言つて欲しいわけじゃない。本当は、本当は……。

「古賀と一緒にいたい……」

そう言つて顔を上げると古賀は目を見開いていた。

「は……？お前俺の事嫌いになつたんじゃねえの？」

え？古賀が私の事嫌いになつたんじゃないの？

「そんな訳ない……。好き、だよ」

「じゃあなんで……？俺が昨日した事に対して怒つて、嫌いになつたんじゃねえの？」

「違う、嬉しかった。本当に嬉しかった……。私が許せないのは自分なの」

そう言つて私は泣き出してしまった。いきなり泣き出した私を見て古賀が焦っているのが分かった。

言つべきなのかもしれない。それで引かれる事になつても、軽蔑される事になつても……。そうじゃないと私はいつまでたつても過去から逃げてばかりで前に進めない。

「私……。――」

私は古賀に全部話した。古賀の顔が見れなくてブルブル震えながら絞り出すように一言一言を嗚咽混じりで話した。古賀に悪く思われたくなくて美化した部分もないとは言えない。でも出来るだけ事実を喋った。

古賀は私が話に詰まつても、促したり遮ったりせずに私が落ち着くまでずっと頭を撫でてくれた。

全部話終わった時は古賀にどう思われているかが怖かったけど、それと同時に重い荷物が無くなったような開放感に包まれた。

古賀は私の話が終わるとギュツと抱き締めてくれて”辛かったな……”と言ってくれた。

結局古賀の顔は見れなかったけど、古賀が私を軽蔑したり憐れんでいたりしないという事が伝わり、まるで親の温もりにしがみつく小さな子供のように古賀の温もりに包まれて眠った……。

理香が安心して眠りについたのを見て俺は笑みを浮かべた……。

もう理香は俺のもの……。

理香を落とすためのキーワードは理香の過去だと俺は確信していた。理香はきつと過去の事で俺から距離を取るだろう。そして自分を責める。

理香にとって過去は汚点。その汚点を自分から話させ俺がそれを受け入れる事で間違いなく理香は全てを俺に委ねる。それに俺は理香が兄と関係を持っていたこと事態は穢らわしいとか軽蔑とかそんな感情は全くと言っていいほどなかった。あるとすれば理香の兄に對しての激しい嫉妬……。理香の初めてを奪った男だからな。

そいつは今理香を血眼になって探しているだろうがもう遅すぎる……。理香はもう俺のものになったのだから……。

理香を寝かせて俺はある人物に電話をかけた。

ブルブル……

『はい』

「僕です。……理香を落としましたよ」

『そう……。じゃあ、あなたは理香を何があっても手放さないで。魁人は最近付き合ってる女の子がいるようだけど、理香を諦めてはいないようだし』

「そうですか」

『何かを企んでいるような気がするけど、何かあったら私からも連絡する』

「分かりました」

『こんな事言える立場じゃないと思うけど、理香を頼みます……』

「……はい！」

ガチャ、ツー、ツー

俺は笑みを浮かべた。

理香の兄は鈴香という女がなんとかしてくれるだろう。それでも邪魔をするようなら……。

コノ世カラ消スマデダ……。

「34」愛情

「……ん」

「あ、起きた？」

理香は寝起きで目がちゃんと開いてなかった。そして自分の部屋でない事を不思議に思ったのかキョロキョロ周りを見始めた。

「あ……」

昨日の事をやっと思いついたようで、俺を見るなり布団の中に隠れた。

別に裸でもねえのになんで隠れんだよ……。

「なんで隠れんだよ？」

「……」

理香は黙ったままだ。

昨日の事が恥ずかしいのか？それとも過去を打ち明けて気まずいと思ってるのか？……まあ、多分後者だと思うが。

すると今度は布団の中で声を押し殺して泣き出した。

こつという時はそつとしておくべきなのか、側にいてあげるべきなのか……。

俺は迷った挙げ句、理香に声をかけることにした。

「どうした？」

「……っ、う、うっ」

「理香……」

理香は布団から顔を少し出して俺を見た。

「私……汚いよね？初めてをお兄ちゃんとするなんて……。その後もずっとお兄ちゃんに与えられてた快楽に溺れてたなんて……」

なんで理香は自分を責める事ばかり言っただ。聞いてる俺も辛いが、理香の言葉はどこか自虐的だ。

でも初体験なんて興味本位でする奴だって何人もいる。理香がここまで自分を責めているのはその相手が”兄”だからだろう……。

「じゃあ……、今度は俺に溺れるよ。俺の色に染めてやる」
そう言って泣きはらしている理香を組み敷いた。

理香は戸惑いや羞恥、恐怖……いろいろな感情を宿した目で俺を見た。

俺にあるのは理香の兄に対しての激しい嫉妬と、理香に対しての独占欲。

この肌に兄が触れたという事実を知っただけで嫉妬で狂いそうだった。理香に触れてもいいのは俺だけだ……。これからは誰も触れさせねえ。

耳を甘噛みして名前を呼ぶと、理香はピクリと反応した。反応してくれたのは嬉しいが、これが兄によって開発されているからだと思つと、イライラする。

「理香、俺の名前を呼べ」

「え……、古賀？」

「違う。下の名前」

俺は理香と呼んでいるが、理香は俺を相変わらず名字でしか呼ばうとしねえ。あいつの事はなんて呼んでた？その色めいた誘うような声で名前を呼んでたのか？そう思うと許せない……。

「い、っ……き？」

理香は戸惑うように俺の名前を呼んだ。

理香の口から自分の名前が呼ばれたのが嬉しくて、嬉しくて……。別に斎なんて特別な名前じゃねえのに、特別に感じた。

理香……、お前は天使や小悪魔というより墮天使みてえな奴だ。

理香を溺れさそうとしているのに逆に俺が理香に溺れそうになる。

「ん……っ」

理香の耳をペロツと舐めた後わざと音をたてるようにピチャピチャと舐めた。そして服に手を忍ばせてホックを外し胸をもんだ。

「……っ、やあっ」

理香はそれに抵抗しようとしたが、耳を甘噛みするとその力が弱まった。

「……あああ」

理香の体がブルブル震える。

「胸だけでいきそうなんて淫乱だな」

「ち、違っ、ひゃあ」

ギョツと先端を摘んだだけで面白い反応が返ってくる。昨日は優しかったからあんまり焦らしたりしてなかったからなあ……。

「理香、愛してる。誰よりも……。だから理香も俺を愛して？」

自分と同じくらい愛して欲しいとは言わない。俺の愛は重くてかなり歪んでるからな。……でも、普通の奴以上には愛して欲しい。

「……ん、私はこ、斎が、思っている以上に、好き、だよ。んん……っ。いつか、それが一方的になるんじゃないのかって怖い」

そんな事思ってたのか……。どちらかと言うとそれは俺の台詞なだけだな。

「それはないから安心しろ。そんな事よりお前は俺に愛される覚悟をしておけ」

「へ……？」

「お前が離れたいと言ってももう手遅れだからな……」

お前が俺から離れていくとか言い出したらそれこそ監禁とか危ない事しそうだ……。

母親の事を今までは気遣いだ、理解出来ない——そう思ってた。でも今なら、あんたの気持ちがよく分かる。

「それってどう……っ、んあっ」

俺は秘部に指を這わした。今まで胸ばかりしかいじってなかったからか、まるで待ち焦がれていたかのように大きくのけぞった。

「びしょ濡れだし……。やらしいなお前」

「ああっ、……ふ、うっ」

抵抗したいんだろうが与えられた快樂でうまく拒否出来ないんだろっな。

理香の秘部を焦らすようになぞる。触れて欲しい所をわざとさけて、快樂ともしさに顔を歪める理香を見つめた。

「齋い……」

熱があるみてえに真っ赤な顔に潤んだ目……。どう見たって俺を煽ってるだろ……。目が意地悪しないでと語っている。でも俺はわざと気づかないふりをする。……理香から俺を求めて欲しい。

「ああああ、もう止めてえ……」

俺はいじっていた指を離した。

「え……、なんで？」

もの足りなさそうな顔で俺を見つめる。

「嫌なんだろ？」

そう言って口角を上げた。

「う……」

「じゃあお風呂入るか？タオルは……」

理香が俺の手をぐっと掴んだ。

「どうした？」

「……っ」

「黙ってたら分かんねえんだけど？」

そう言っていると理香は悔しそうに俺を見た。だが俺がこの場を去ろうとすると蚊の鳴くような細い声で何かを言った。

「……って」

「何か言った？」

「触って……」

「どこを？」

そう言つと赤かった顔がさらに赤くなり今にも泣きそうな顔になっていた。

「気持ちくなる、とこ……、じゃないと、私、おかしく、なる」

本当はおねだりさせたかったが、あんまり意地悪して嫌いになられたらまずいと思い今日はこれで勘弁した。

大きくなつたクリを摘んでやると、理香は軽くイった。

「本当、淫乱」

それから秘部を舌でピチャピチャ舐回して何回もイかせ、十分

ほぐしてから挿入した。

入れてすぐに俺を締め付けて軽くいった。

「お前、イクの早すぎ」

「……だって」

それから理香のいいところを突きまくったり、かき回したりして俺も理香も何度もいった。

「はぁ、はぁ……」

ゴムを1回目はつけなかったが、2回目からはきちんとつけた。

理香が嫌がる事はあんましたくねえし……。

理香の前だと優しくなる。今まで付き合ってきた女のほとんどは牝豚扱いだった。女も俺に調教されて自分で肉便器とか奴隷とか口走ってたし。

これが愛するって事か――と柄にもない事を思った。

「はっ、……くっ、理香」

5回目の射精後理香は気を失った。

「35」憎悪

俺は母さんから教えてもらった理香の高校にすぐ行く事にした。事前に調べて分かった事は県外の寮付きの女子校という事だけ……。本気で調べたらもつといういろ分かるけど、俺は一刻も早く理香に会いたかった。

母さんは俺に対して何も言わない。諦めとかそういう感じではなかった。何かを企んでいるような……。そんな顔だった。

何を企んでるのは知らないけど、理香を必ず捕まえて見せる。そして今度こそ絶対離したりしない……。……。

でも俺が見た光景はそんな俺の思いを打ち砕くような物だった……。……。

学校に行ったのはいいものの後先の事を全然考えてなかった俺は校門で理香を待つ事にした。でも学校の前には警備員らしき男が立っていて、俺がこんなところで理香を待っていたらきつと怪しむだろうと思い、校門から少し離れた所で理香を待っていた。

本当だつたら今すぐにでも学校に電話して呼び出したいけど、きつとそんな事したら理香はまた母さんの力をかりてどこかへ行ってしまうだろう。もうそんなミスは犯さない……。……。

しばらくしてちらほらと下校する女達を見ていたが理香は一向に帰ってくる気配がない。

本当にここにいるのか？という不安と、いるはずだ、もう少しで理香に会える……。！という期待が入り混じっていた。

でもいつまでたっても理香が出てこない……。クラブかもしれない……。もしくは違う学校……。……。

いくらなんでも母さんがあんな状態の俺に嘘なんて吐かないはずだ。そんな事したら後でんな事になるかなんてわかっているはず……。でも、もしかしたら……。……。

そしてとうとうクラブ活動が終わり警備員が門を閉めようとした。

「……っ」

母さんは俺に嘘を吐いていたのか？ やっと見つけたと思ったのに……！ 俺は悔しくて唇を噛み締めた。

「ああ、まだいたんですか……」

警備員が問を占めるのを止めた。

「すいません。こんなに遅くなってしまつて」

「いえ、いいですよ」

「お疲れさまです」

「あ……、さようなら」

知っている女の声が聞こえて、俺は俯いていた顔を上げた。そしてそこには俺が求めてやまなかった愛しい人がいた。

「理香……」

理香は教師らしい男と一緒にいて、警備員に顔を下げていて顔がよく分からなかったけど、間違いないと思った。

顔を上げるとやっぱり理香で、俺が知っていた理香よりも髪が長くて少し痩せているように見えた。それを見て俺が知らない間に理香が変わっていつているのを感じた……。

本当ならその変化や成長を隣で見ているはずだった。ずっと側にいるはずだったのに……。俺の知らない理香がいるのが悔しい。

今、俺が理香に声をかけたら逃げるかもしれない。いやきつと逃げるだろう。逃げたら追いかければいい。でも隣にいる奴に助けられたら面倒だ。

理香が1人になった時を狙おうとしたが教師らしい男が理香についてくる。多分駅が一緒なんだろうが離れてほしい……。

捕まえられないというのもあるけど、俺以外の男が理香の側にいるのが許せない……。くつつきすぎだ。なんで理香も嫌がらないんだ……！

「……っ」

イライラする。本当はそんな男じゃなくて俺がそこにいるはずなのに……！

「斎……、あんまり一緒にいるとその……」

理香が頬を赤らめながらそう言う。

その顔は今まで俺に向けた事のない表情だった。……そして誰よりもその表情を向けてほしいと願っていた。

嫌だ、嫌だ、認めたくなんてない……。でも理香の事は誰より分かっている。それが意味するものも……。

理香はこの男に恋をしている――……。――。

そして男の名前を呼び捨てにする意味――。

理香は今まで男の事を下の名前で呼び捨てにしていた事はない。

だいたいは名字で呼び捨てだった。それは俺が許さなかったからだ。理香が男を下の名前で呼ぶ事自体が嫌だったという事もあるけど、それより何より俺の名前は呼ばないのに他の男は名前で呼ぶと言う事が許せなかった。まるで俺よりその男の方が特別だと言われた気分になるから……。

それだけ俺にとつては特別な事なのに――。

「誰も見てねえよ。近くにいたってこんな暗いんじゃないか？」

そう言つてその男は理香にキスをした……。

「ん……」

それを恥ずかしながらもためらいがちに答える理香を見て、体が引きちぎられそうになるぐらいショックを受けた。

俺の時はされるがままという感じだった。今……訳の分からない男としているのとは全然違う……。

こんな理香を見たくなかった。辛いから、悲しいから理香を探していたのに……俺ががむしゃらにあがいている間に理香は……っ。

「……いつ、き……」

男を見る潤んだ目、わずかに開いた唇、腕にしがみつく仕草も……

……全て俺とは違うように感じた。

ダメだと分かっているにも心が手に入らないから体ばかりを求めている。

男が理香の耳元まで口元をもってきた。そして何かを囁いたのか理香はさらに頬を赤く染めた。

そしてその男の目線が俺に向けられ……男は微かに口角を上げた。
「……っ」

明らかな敵意を感じた。この男は……俺の事を知っている……！

”もう理香は俺のものだ” そう目が言っていた。

他の男と理香がキスしているのに耐えられず、俺は逃げるようにその場を去った。

理香が俺とは違う他の奴を好きになるなんて……！

今まで散々甘やかして優しくしていたのは理香が好きだからという理由もあつたけど、それ以上に理香が好きになる男のハードルを上げるためでもあつた。俺より甘やかす奴も優しい奴も現れないくらいに大切にしてきたのに……。

あの男は理香の学校の教師で確か斎……。教師のくせに生徒に手を出すなよとは言わないけど、女子高校なんだから他にも女がいるだろ！？なんで理香を選んだんだ……。

あの男の敵意むき出しの目……。あれは遊びじゃない。本気で理香が好きなんだ。

今更焦ったってどうしようもない。俺がするべき事はどうやって理香を奪略するか考える事、……もしくはどうやってばれずにあの男をこの世から消すかを模索する事だ。

「36」油断

理香と俺が結ばれて少ししてから理香の母親から連絡があった。

それはもう理香の場所を隠し通せないという事。その時の彼女の声は精神的にかなり疲れているように思われた。本当はもっと時間をかせいでほしかったが仕方ない……。

俺は理香の母親に別に構わないと返事し、いつそいつが来るのかを教えて欲しいと言った。母親は2日間かせぐのが精一杯で、その後すぐ来ると思ってから多分今から3日後に理香に会いに来るだろうと言った。

そしてその男が来るだろうという日に理香を俺の家に誘った。いきなりだったが、ちょうど金曜日という事もありなんとかOKをとれた。

初めて理香を家に入れた日から理香は俺に頼るようになったし、甘えるようになってしまった。

今まで1人ぼっちで我慢していた事が限界になって爆発したんだろう。後は今までの環境……。多分理香はあいつに散々甘やかされただろう。それを思うとムカつくが、そのおかげで理香はこんな無防備に俺に甘えてくれている。まあ何にしろ、今から俺に染めればいいだけだしな。

そしてとうとう金曜日になった。

放課後に理香を誰もいない教室に呼び出し激しく抱いた。

それは俺の所有物の証を付けるためと、理香と一緒に帰るため。

理香の兄がここで待ち伏せをしている可能性が高い以上、理香を1人で1回寮に返して俺の家に来てもらうのは危ない気がする。理香が1人である時に兄がどんな行動に出るか全く予想できねえしなだが、生徒が下校している時間に堂々2人で帰るわけにはいかないとなると誰もいない遅い時間に帰るしかなかった。

理香は何も知らない。いや、何も知らなくていい。俺1人であい

つの事は片付けてやる。

帰ろうとした時はちょうど警備員が門を閉めようとしていた時だった。

この警備員は口の軽い奴じゃねえし、校長である伯母に忠実だ。俺を悪く言えば伯母の立場だって危うくなる。変にこの事を誰かに漏らしたりはしないだろう。

「ああ、まだいたんですか……」

警備員が門を閉めるのを止めた。

「すいません。こんなに遅くなってしまつて」

本当はそんな事思つてないが口先だけでも一応謝つておく。

「いえ、いいですよ」

そう言つて警備員は笑つた。

腹の中ではどう思つてるんだろうな。まあどうでもいいけど。

「お疲れさまです」

一応こちらも言葉だけはきちんとかけておく。

「あ……、さようなら」

理香は俺達の関係がばていないか焦つてるみたいだが、とつくにばれてんだけどな。

門を出た時からずつてつけられてる気配がする。多分理香の兄がつけてきてるんだろうな。

じゃあ見せてやるよ、お前に入る隙なんて全然ねえ事をな……！

「斎……、あんまり一緒にいるとその……」

そう言つて理香は顔を赤く染めた。

いちいちかわいい反応するな。俺はあいつに見せつけるために理香にベツタリくつついていたが、理香は俺と一緒にいるのがばれないかハラハラしてんだろうな……。周りにまだ生徒いる可能性はあるしな。

「誰も見てねえよ。近くにいたつてこんな暗いんじゃ分かんねえだろ？」

そう言つて理香に笑いかけた。

俺の事を思っでそう言ってくれてるんだろっけどそんな理由で理香から離れたくねえ。

あいつはきつと俺らの事を悔しい思いで見てるんだろっ……。お前はどんなに頑張ったって理香とは結ばれねえんだよ。

どこかで俺らを見ているあいつに見せつけるように理香にキスをした。

初めは啄むようなキスを繰り返して唇をこじ開け舌を絡ませる。

「ん……」

恥ずかしそうにしながらも俺に一生懸命答えようとする理香を愛しく感じた。

「……いつ、き……」

理香はそう言っで俺を見上げた。

理香は目を潤ませてわずかに口からは唾液が流れていた。それがとても艶やかで色っぽい。

俺が理香の耳元でかわいいと囁くと、赤かった顔がさらに赤くなった。

何回も抱いてるのに相変わらずの初々しい反応はかわいい。

物陰で2つ何かが光っていた。多分あそこにいるのは理香の兄だろう。光っているのは眼球……。

それに向かって俺は不適に笑いかけた。

あいつに向かって”理香はもう俺のモノだ”という視線を投げかけた。するとその2つの光が動いてここから離れていく足音も聞こえた。

これであいつは諦めるだろう……。そう考えていたのが甘かったと知るのは理香が姿を消してからだった――……。――。

「37」償い

今まで苦痛でしかなかった学校が少しましになった。……だって
斎に会えるから。

そう思うと顔が赤くなった。

なんかキャラが違う！こんな乙女じゃなかった！

今の時間が幸せ過ぎて私は忘れていた、自分が犯した過ちを――。
最近土日は斎の家にいる事が多い。斎が誘ってくれるのが嬉しく
てついつい泊まってしまふ。

周りはそんな私をさらに異端と見ているのは知っていた。だって
ほとんどの子は家になんて帰れない。行く場所なんてない。だから
土日必ず寮にいない私は変な目で見られてる。

でもそんなのはもうどうでもいい。斎に会えるならそれぐらいど
うって事ない。私は結局自分から距離を置いてしまつて本当の友達
は出来なかった。

今日も寮に一旦帰つて用意をしてから斎のところに行く予定だっ
た。

終礼が終わつてすぐに席を立てて帰るのはもう習慣になっている。
気まずいクラスメートに囲まれるのが耐えられなかった。1秒でも
すぐにここから出たい――それが本音。

だからほとんど他の生徒が門をくぐるよりも早く門へ行く。多分
1番だろつという時も何回もあった。

今日も1番に警備員さんに挨拶をして学校を出た。

近道を使って駅に向かっている途中誰かにハンカチを口に当てら
れてもがいている内に気を失つた。

「ん……」

「目が覚めた？」

目を開けて一番最初に映つたのは満面の笑みのお兄ちゃんだった。
「なん……っ」

足がうまく動かせないと気づいて足を見ると、足枷がつけられていた。

「驚いた？」

そう言ってお兄ちゃんは笑っている……。

なんで？どうして？疑問だらけで頭がパンクしそう。

ここはどこ？なんでこんな所に？なんで私はお兄ちゃんと一緒にいるの？お母さんが言ったの？それともお兄ちゃんが自分で探したの？この足枷は何？

「いろいろ聞きたそうだな。教えてあげるよ……。俺は理香を監禁したんだ」

さも嬉しそうに言うお兄ちゃんを見て怖くなった。

「な、何言ってるの？」

監禁なんて冗談だよな？妹を監禁したって……、そんなばかな話があるわけない。

「嘘だっていう顔してるけど、本当だから」

「……な、んで」

「だって……、自由にさせておいたら理香はあの男のと所に行くだろう？」

あの男って、斎の事……？お兄ちゃんはもしかして斎に何かしたの？それともこれから何かするつもりなの？

「お兄ちゃん……、まさか斎に、うぐっ」

いきなり首を占められて思いつきり睨まれた。

怖い！こんな怖いお兄ちゃんじゃない……っ！いつもは優しく、私を苦しめる事なんてしなかった。親が怒っても必ず私の味方をしてくれた。近所の人が変な目でみるくらい私を溺愛していた。それなのに……。今、私の首を占めているのは本当にお兄ちゃんなの……？

でも……、こんなに怖いお兄ちゃんを見た事がある。それはお兄ちゃんが彼女らしき人を蹴っていた時だ。私もあの女の人に宿っていた子供のように……。

――殺サレル。

初めて”死”という恐怖を感じた。

「がはっ、はあ、はあ……」

もう死ぬ――そう思った時、お兄ちゃんの手が私の首から離された。

「俺の前で他の男の名前を呼ぶな」

お兄ちゃんを見ると、やっぱり怖い顔をしていて私は恐怖から何度も頷いた。

「分かればいいんだよ」

お兄ちゃんはそう言っていていつものように優しく笑って私の頭を撫でようとした。

でも私はさつき殺されかけた恐怖からお兄ちゃんが私に触れようとした瞬間体がビクツと震えた。

お兄ちゃんにまた何かされる……っ、そう思って体を固くしたけど何もされなくて恐る恐る顔をあげるとお兄ちゃんは悲しそうに笑っているだけだった。

それに胸を締め付けられた。お兄ちゃんが悲しいと私も悲しい。

「ごめんな……」

それは何に対するごめん？謝るならこんな事やめて欲しい。

「どうしてこんな事するの……？」

分かっている、分かっている……。本当は知っている。でもその答えを知りたくない。

「理香をもう手放したくないから」

お兄ちゃんがそう言った瞬間私は深い罪を背負った。

お兄ちゃんをこんな風してしまったのは誰？知ってるよ……、私だよ。

こんなにお兄ちゃんを苦しめたのは誰？それは私――。

あの時にお兄ちゃんを受け入れなければ、あの時拒否していれば――、こんな事にはならなかったのかもしれない。

私ガ才兄チャンヲ狂ワセタ。

お兄ちゃんを失いたくない弱さから私はあの扉を開いて自分からお兄ちゃんの所に行った。そして私はお兄ちゃんだけを墮として私だけは這い上がった。

お兄ちゃんだけが狂っているように見えた。でも……全ての引き金を引いたのは私だ。

犯した罪の本当の重さを知った。

近親相姦を繰り返した罪はお兄ちゃんを狂わせた事だ。

「俺今から仕事で家少し開けるから。その間に逃げようとか考えるなよ……？もし逃げようとなんてしまら……あの男をこの世から消すよ？」

ーードクン

お兄ちゃんの冷たい目を見て固まってしまった。これは脅しなんかじゃない……。本気でそう言ってるんだ。

「理香はいい子だから守れるよね？」

口調はまるでお兄ちゃんが私に幼い時に言い聞かせたように優しくかったけど有無を言わさぬ圧力を感じ、私は頷いた。

しばらくしてドアが閉まった音がしてお兄ちゃんが家からでいったのが分かった。

冷静になつて改めて自分の今の立場を理解した。

自分のせいでこうなったのだ。これは自業自得。

「うつつ……」

誰もいない静かな部屋の中、私の嗚咽まじりの泣き声が響き渡った。

それからお兄ちゃんとの生活が始まった。

お兄ちゃんは監禁と言っていたけどほぼ軟禁状態だった。だからと言ってそんなに変わらない気がするけど……。

お兄ちゃんは本当に1日中私にベツタリで、お兄ちゃんが出て行くのは決まって夕方か夜になってから。だから私がお兄ちゃんの家で寝ていると起きた時には必ず隣で私を抱き枕のようにして眠っている。

心が麻痺してきたのか、それを普通に受け入れるようになった。初めは逃げようと何度も思った。でももしうまく逃げられなかったら齋に被害が及ぶかもしれない……。うつん、例え逃げれたとしてもすごく迷惑をかけるのは分かっている……。そう思うと私は行動に移せなかった。

お母さん達が私の居場所を突き止めて警察がお兄ちゃんを捕まえる夢も何度か見た。でも実際はそんな都合のいいことあるはずない……。

だから私は諦めた。

お兄ちゃんは相変わらず優しい……。そして体の関係は求めなかった。だから私はいつの間にかこのままでいいんじゃないのかと思うようにまでなっていた。

お兄ちゃんがいる時はトイレに行く時やご飯を食べる時は足枷を外してくれる。……でもその時以外はつけっぱなし。そして移動はお兄ちゃんがお姫様抱っこをしてくれるため、筋力が減っていつてふらふらしながらでしか歩く事が出来ない。

筋力を落とすためにももしかしたら足枷をしているのかもしれない。でもそれでもいいか……. と思ってしまふ私はもう狂っている。

今日はお兄ちゃんが仕事がなくてずっと一緒にいる日だった。お兄ちゃんにお風呂を入れられ、広めのベッドで一緒に寝た。

いつもだったら起きないのに、今日はなぜか深夜に目が覚めてしまった。

「……っ、はっ、理香っ」

そして私は見てしまった。切なげに私の名前を呼びながら自慰するお兄ちゃんの姿を――――……。

「……っ」

思わず声が出そうになるのを抑えた。

お兄ちゃんが私を抱かないから違う女の人で性欲を満たしているんだろうと思っていた。……だって、目が覚める時にお兄ちゃんの体から女の人の香水の匂いがする事が何度かあったから。なのに……

…。

男の人はそんなに性欲が強いんだろうか……？でもどんなに辛くたってお兄ちゃんを私を抱かない。どんなに私の事を好きだって言っても体と心はやっぱり違うんだなと思っていた。

私はそのまま寝たふりをした。

でもお兄ちゃんの行為が終わっても、お兄ちゃんが切なげに私を呼ぶ声が頭にこだましてなかなか眠れなかった。

そして次の夜……お兄ちゃんは私を抱こうとした。

「いやあ、なんで！？止めてお兄ちゃん……！」

「もう無理だ……。我慢できない……っ」

「今までみたいに違う人を抱けばいいじゃん！やだあ！お願い、許して……っ」

「違う人……？」

お兄ちゃんの動きが止まった。私はチャンスだと思いお兄ちゃんから離れた。

「帰ってきた時、いつも女の人の匂いがするから……」

「……」

「それに私はお兄ちゃんの事嫌いじゃないけど好きでもない……。私は斎としか」

ギリッ

「……っ」

お兄ちゃんに思いつき強く手を握られて顔をしかめた。

「お兄ちゃん、痛い……」

ポタ、ポタと顔に水が落ちてきた……。顔を上げるとお兄ちゃんが泣いていた。

「俺の方が何倍も苦しくて痛いんだよ！どうやってたら理香は俺を好きになってくれる？」

あまらに切なそうな声で苦しそうに辛そうに言うから、私まで身を切られるように辛くなった。

どんなにお兄ちゃんが私を思ってくれても私にはお兄ちゃんの気

持ちに答える事が出来ない……。そう思うと一層罪悪感が増す。

「どんなに優しくしたって、どんなに甘やかしたって、……理香のために勉強も頑張ったし、かっこよく思われたくて服装にだって気を使った。……でも、理香は俺を見てくれない。それは兄だから？俺はお前の事を妹なんて思った事ないのに……っ」

気づくと私は涙を流してお兄ちゃんを抱き締めていた。

泣かないで、泣かないで――。1人ぼっちは辛いよね？悲しいよね？

こんなふうにしてしまったのは私なんだ――……。。

この罪を償う方法をが分かったよ――。

「お兄ちゃん、いいよ？ずっと側にいてあげるから――」

1人は悲しい。だから私も一緒に堕ちてあげる。

だからもう1人で悲しまないで――……。。

「38」無力

理香は俺と一緒にいてくれると言ったのに、なんでこんなに虚しいんだろう……。

本当は分かっているんだ。理香がここにいるのは本心ではないから……。監禁まがいな事をする俺を理香が愛してくれるわけがない。理香がここにいてくれるのは恐怖と同情からだ。そう分かっている。俺は理香を手放す事は出来ない。

本当に理香が好きなら、こんな事をせずに理香の幸せを願えるような男じゃないとダメだって事は頭では分かっている……。でもそんなに俺は大人じゃない。どういう形であつたって理香を手放したくない、他の奴になんて渡したくない。

「ごめんな……」

いつも仕事から帰って来たら寝ている理香に謝る。でも俺は謝るだけ……。理香を逃がしてやる事なんて出来ない。

理香は俺が他の女を抱いてると思っっているみたいだけど理香をここに連れて来てからは全然やってない。

俺から女の匂いがするのはホストをやっているから。短時間で金を稼げる仕事はこれしか思いつかなかった。

女を抱かない理由は理香がこんなに近くににいるから他の女でやるうという気が起きないし萎えるから。別に勃たないわけじゃない。勃つには勃つけど射精にまではいかない。そんなんでは帰ると悶々とするだけなのは分かっている。だからしない。

理香を抱きたいと何度思っただろう……。でも抱けなかった。拒まれるのが怖かった。

でも結局は我慢が出来なくなつて泣きながら理香と繋がった。そしてその日から毎日のように仕事に行く前に理香を抱くのが日課になった。

理香が俺に向けている目線は同情……。初めはそれでもいいと思

つていたくせにどんどん欲深くなる。

――俺を愛してほしいと。

愛は無償だと言ったのは誰だろう……。無償でなんてあるはずない。どうやったって愛してほしいと願うだろ？俺が向ける程じゃなくともいい、少しでもいいから俺の気持ちに答えて欲しい……。

後悔とわずかな幸せに包まれながら今日も俺は理香を腕の中に収めて眠りにつく……。

愛してる、愛してる。俺の事も愛して……。理香……。ごめんな。

「お兄ちゃん、お風呂入りたい」

俺が目が覚めると同時に理香がそう言った。

「ん、分かった」

昨日は急に電話がかかってきて仕事に行ったからお風呂に入れてやれなかったからな……。

理香は若干気持ち悪そうにしている。まだ暑いから汗でもかいたんだろう。ついでに俺も女の香水の匂いをとっとくか。はつきり言っただけ臭いし。

だいたい仕事が終わった後に風呂入るようにしているけど、あまりに疲れた時なんかはそのまま寝ている。

俺は理香の足枷を外して服を脱がせた。

ここに閉じこめてからずっと理香の世話はしている。まるで赤ちゃんのようになんか何まで。理由は簡単だ。足枷をつけている理香が自分で出来ることなんて限られているからだ。

それを苦痛だと思った事はない。むしろ喜んでしている。このまま俺なしじゃ生きられなくなればいいのに……。

自分でも狂っていると思う。でもどんな歪んだ形であってもこれが俺の理香に対する愛なんだ。

母さんはきつとすぐに俺達の居場所を見つけて今度こそ理香と俺を引き離すだろう。それがいつなのかは分からないけど、そう遠くはないはずだ……。

ずっとこのままでいたい……。でもこんな幸せな時間は夢のよう

にすぐに過ぎてしまう事だつて分かつてる。だから理香と1秒でも長く一緒にいたい。

俺にとって理香と引き離される事は死刑宣告を告げられるのと同じぐらい怖い……。理香と離されて暮らす事はただ死を待っているだけと同じだから。そこには楽しみも喜びも感じられない。あるのは絶望だけ。

でも……、そんな恐怖が薄らいでいた時にその時はきてしまった。もう少し前だったら、俺は人の気配に敏感だった。でも幸せばかりしていた今はそれが鈍くなっていたんだー。だから俺は気がつかなかった……。最近俺をつけている奴がいるということを一。

それはいつものように仕事から帰ってきた時の事だった。なんとなく嫌な予感みたいなものはしていた。

理香が朝からそわそわしていて、いつもとは少し違う目で仕事に行く俺を見ていた。

いつもだったら俺が狂ってしまった事への憐れみと悲しみ。でも今日はまるで別れを惜しむような悲しみの目だった。

始めは理香が自殺でもすりんじやないかという不安が頭をよぎった。でもそんなはずあるわけない。理香が死にたいといった事はなかったけど、そういう雰囲気醸し出していた事はあった。でも行動には移さなかった。正しくは出来なかった。なぜならカッターやハサミなどの危険な物は理香の部屋には置いていないから。俺が家を出る時は理香の部屋にも鍵をつける。だから大丈夫だと自分に言い聞かせて家を出た。

俺は理香を助けようとする奴の事は全く頭になかった。俺をつけていた影に全く気がつかなかったからー。

大丈夫だと言い聞かせてもやっぱり気になって仕事もあんまり身に入らなかった。だから先輩にも散々怒られ、帰れとまで言われてしまいいつもより早く家に帰った。

いつもより早い時間に帰ってきたせいか近所が騒がしい……。理香に早く会いたいという思いと、今日の嫌な予感が頭をよぎり

すぐに自分の家に駆け込んだ。

ガチャガチャ

あれ……？俺鍵閉め忘れたっけ？

理香が家にいる間は鍵を閉め忘れた事なんてない。

もう一度鍵を差し込んで開けようとした時、鍵穴が回りドアが勢いよく開いて思いつきりドアが頭にゴンツと当たった。

「……っ」

尻餅をついて顔を上げると、理香を抱えたあの男がいた――。

「理香……っ！」

「お兄ちゃん……！」

「お前っ」

俺は男の方を見て睨んだ。

完全に油断していた。もしかしたら見つからないかもしれないと淡い期待を抱いていた。それがこのざまか……っ。

理香を抱えながらあいつはあの時のように笑っていた。俺は悔しくて唇を噛み締める事しか出来なかった。

「理香を返せよ！」

「返せ……？違うだろ？俺が返してもらうんだよ！」

そう言って走り出そうとする男を俺は追おうとしたけど、訳の分からぬ男達に腕を掴まれてそれは叶わなかった。

「……っ」

こんな奴らを相手してる場合じゃないのに……！

俺を止めた男は2人で明らかにいかっそうで喧嘩が強そうな奴らだ。

一応護身用のためにスタンガンはいつも身につけている。ばれないうちにポケットから取り出しそうとしたけどそれを振り払われた。

「……っ」

焦った俺を見て男達は笑う。

「へー、こんなもん持ってた？折角のチャンスだったのに残念だったな」

そう言っばかにしたように笑う男達を見てムカついたけど、これこそ本当のチャンスだと思った。

男達が笑って油断している隙をついてスタンガンを取り出した反対のポケットからサバイバルナイフを抜き取って1人の男の心臓めがけて突き刺した。

「……っ」

予想外の出来事に驚いて目を見開いた男を見下しながらスタンガンを奪い返し、もう1人の男にめがけてスタンガンの電気を浴びせた。そしてナイフが刺さったまま呻いている男にもスタンガンで気絶させ俺は理香を抱えた男を追った。

ここは細い道が入り組んでいて車なんて止められない。ここには車で来たんだろっけど俺の家の近所には車を置ける場所なんてないだから多分この入り組んだ道んだ所道路沿いの端にでも止めているんだろっ予想し、すぐにそこに向かった。

すると予想通りそこ道路に飛び出した所に理香を抱えた男が走っているのを見た。

男は気づいてはいなかったけど、理香は俺に気づいて焦っていた。俺はあまりにも理香を追いかけるのに夢中過ぎていつもなら気がつくようか事に気がつかなかった――。

「お兄ちゃん危ない……っ！」

理香の悲鳴のような声に気がつかされた時にはもう遅かった。

いつもだったら絶対に気がついていた。暗い中照らされているライトに、車が近づいてきている音に――。

パパー……

ドンッ

俺は車に突き飛ばされていた。

ドンッと鈍い音と共にすごい激痛が体に走り、俺は車に引きずられていた。

痛くて声なんて出ない。体と頭からは血が大量にでていて、肋骨が折れているんな臓器に刺さっている。

運転している奴は俺を引いているとやっと気づいたのか、車を止めた。そして車から俺を退けると逃げるように去って行った。

ひき逃げかよ……っ。まあ今更どうでもいい。体のあちこちが痛いし肋骨が肺に刺さったのか息が苦しい……。もう……死ぬかもしれない。

「お兄ちゃんっ」

あまりの痛さにもう目を瞑ろうとした時、理香の声が聞こえて目をわずかに開いた。

「理、香……」

「喋らないで……！」

理香は泣きながら肩で息をしていた。俺がいた場所からかなり引きずられたからここまで全力疾走して疲れたんだろう。

理香はいつつも泣いてるな。やっぱり理香は泣き虫だ。

腕を伸ばして涙を拭ってあげたくても腕が痛くて上げられない。

手も折れてるみたいだな。複雑骨折かもしれない。

「すぐ、すぐ救急車呼ぶから！」

「……い、い」

もう助からないかもしれない……。それならここを離れてほしい。

「何言ってるの！？早く救急車を……っ」

「理、香……、手を握って？」

「え、うん……」

理香は戸惑いながらも俺の手をギュツと握ってくれた。

「お願いが、あるんだ」

「うん、うん、分かつ、た。何でも聞く、よ……？」

理香の声が震えていてうまく聞き取れない。

「……っ、はあっ」

喋ろうとすると苦しくなる。

「お兄ちゃん！？もう、喋らないでえ……」

でも俺は言葉を続ける。

「一度で、いい……、一度でいいから、俺を、”魁人”って、読んでほしい……」

「……」

理香が息を呑んだのが分かった。

理香は一度も俺を名前で呼んではくれなかった。監禁して俺と一緒ににいてくれると言ってくれた日から、名前では読んでくれなかったよ……。

理香は兄ちゃんと呼ぶのが慣れていているから俺を”魁人”と呼ばないわけじゃない。俺を拒んでいるから呼んでくれない事もちゃんと分かってたよ。

でもこれで最後だから……。例えば俺が生き延びたとしても最後にするから、もう理香を手放すから……。お願いだ一度でいいから俺を名前で読んで……？

理香は泣きはらしながらも何かを決意したようにゆっくりと口を開いた。

「魁人……、愛してる」

残酷な嘘であると同時に俺にとっては今までにないほどの嬉しい言葉……。 ”魁人”も ”愛してる”も今まで言ってくれた事がなかったから……。

ああ……。今死んでもいいとはまさにこの事を言うんだろうなと思った。

今なら純粹に理香の幸せを願える。あいつと幸せになれ——そう言う事が出来る。

涙で目がパンパンになっている理香に最後の力を振り絞ってそう言おうとした瞬間、あいつが薄ら笑いを浮かべている事に気づいた。なんで笑ってるんだ？いくら恋敵が憎くたって普通死にそんな奴を見て笑うか……？

そして俺はある事に気づいてしまった。

全てはあいつの計画ではないかという事に——。

「……っ」

まさか、そんなはず……。っ。そう思うがあいつのあの笑み……。

勘というか本能みたいなものがそうだと俺に告げている。

理香にその事を伝えようとしたけど口が開いても声が出てこない。
「もうこれ以上話さないで！」

そう言われても俺はどうしても言わないといけない事があるのに……っ。あいつの思い通りになんかさせてたまるかと思うのに、どんどん気が遠くなっていく。

そして俺の目に最後に写ったのは理香ではなく、憎い憎いあいつ
だった……。っ。

「38」無知

木下隼人 享年20

葬式の真ん中に飾られている写真は証明写真でお兄ちゃんの表情は無表情だった。

もう目が開かない、決して言葉を発する事もないお兄ちゃんを見た。

死んでしまった……なんて思えない。でも目の前に映るお兄ちゃんは百合の花に囲まれて顔色がいいとも悪いとも言えない。色がない……そんな感じだった。実際に色が白いかそいうわけじゃない。ちゃんと肌色のだ。でも……まるで作ったような、絵の具をそのまま塗ったような違和感を感じる色……。

汗をかかず、水気がない肌はまるで表面が口ウで出来ているようにさえ思えてしまう。

お兄ちゃんは何かをやり残したような、後悔がにじみ出るな表情のまま亡くなってしまった。

漫画や小説だったら助かるけど、現実には甘くない。

お兄ちゃんは私が言葉を発した後、苦痛に歪めながらも少し安らかな顔になった。でもすぐに何かに気づいてたように表情がすぐに変わった。お兄ちゃんは私に何かを伝えようとしていたけど、私は

それを遮った。それがお兄ちゃんをこんな顔のまま亡くならせてしまう事になるなんて気づかず……。

お兄ちゃんは死ぬ間際に何を思ったのだろう……。それは今となつては分からない。お兄ちゃんの葬儀に来た人達は、まだ若くに死んでやり残したことがたくさんありそれを嘆いているのだろうと言っていた。でも多分それは違う……。そう思った。

お兄ちゃんに”魁人”って呼んでほしいと言われて私はお兄ちゃんを”魁人”と呼んだ。そしてその後には愛してるとも言った。愛してるは勝手に出てきた言葉だった。

なんで出てきたのかは自分でも分からない。分からないけど同情とは違うと思う。じゃあ兄妹として言ったの？……。よく分からない。本当はお兄ちゃんを男として好きだったんだろうか？……。でも例えば心の奥深くに男として愛している感情があったとしても、きつと兄として慕っていた感情に打ち消されてしまつて分からないと思う。

お兄ちゃんが死んでいる事実が受け入れられない自分がいる……。お母さんもお兄ちゃんの友達だと思われる人も泣いているのに私は泣けなかった。

実際にお兄ちゃんの最後を看取ったのは私なのに……。私はお兄ちゃんのお葬式をスクリーン越しに見ているように気分だった。そして時間も知らない間に過ぎていったみたいに感じた。

「理香……」

声をかけられた方を振り向くとそこには斎がいた。

「斎……」

斎には散々な思いをさせてしまったかもしれない。……。お兄ちゃんが私を監禁していた事が分かった今、過去に私とお兄ちゃんに何があったかばれてしまったと思う。

斎はやっぱり私を軽蔑するだろうか……。でもそれは仕方のない事だと思う。

「……斎、別れよう」

斎が自分から別れようって言うのは辛いと思うから……。というの

はただの建て前。自分が傷つきたくないという勝手な理由で、私は自分から別れを切り出す。

「……分かった」

ズキッ

分かつてはいた事だったけどやっぱり辛い。

初めて好きだと思った人、初めて意識して下の名前で呼んだ人、初めて……愛とはどういうものか学ばせてくれた人だった。

今はこんなに辛くてもいつかは薄れていくもの……、時間が傷口を癒してくれる……、そう思いながら唇を噛み締めて俯いた。

目を閉じちゃダメ。閉じたら涙がまた出てきてしまう……。最後は笑顔で別れたい。間違っても泣いたりして斎を困らせたくない。涙を武器にするようなそんな女にはなりたくない……。

「とか俺が言うと思ったわけ？」

そう言われて私はばつと顔を上げた。その時にまばたきをしてしまつて涙が零れ落ちた。

「兄とどんな過去があったとしてもそんなんで俺の気持ちが変わるわけねえだろ？」

そう言われたのが嬉しくてまた涙を流してしまつた。

「今まで辛い思いをしたんならその分俺が幸せにしてやる」

そう言つて包み込むように私を優しく抱きしめてくれた……。

「斎……」

「ごめんなさいお兄ちゃん。私はお兄ちゃんをこんな目に合わせたくせに自分だけだと幸せになろうとしてる。きつといつか罰が当たる。例えそうでも今は、この人の腕の中で包まれていたい……」。

私は何も知らなかった。兄が何を思つて死んだのかも、そしてこれが全て斎によって仕組まれていた事も……。

「40」真実

息絶えてもう誰にも話す事が出来なくなつたあいつを俺は歪んだ笑みで眺めていた。

理香が俺以外の奴の前で泣く事は正直あまりいい感じはしないが、今日は特別だ。最期の別れだしな……。

やっとこれで俺と理香を邪魔する奴はいなくなつたと思うと心が晴れるような気がする。

理香はあいつの事をただの兄だと思つていたみたいだが、それ以上の感情がある事を分かつていた。理香は確かにあいつの事を兄として好きだった。そしてそれと同時に恋人以上に大切な存在だとも思つていた。あいつに対して恋をしているわけではないが、恋よりも大きい思いがあつた……。だがそれは禁忌を犯した罪悪感によつて理香の心の中で憎むべき対象にもなつていた。だから理香は自分がどれだけあいつを大切に思つていているか気づかなかつた。

理香がそれを自覚していなかつたのが好都合だった。それを自覚させないように邪魔者を始末するのが俺の目的だった。そしてそれは面白いくらいにとん拍子進んだ。

理香が突然姿を消してから俺は理香の母親に連絡した。そして理香の兄も姿を消したのだと分かつた。それを聞いてやっぱりな……と思つてゐる自分がいた。

有名な探偵を使つて探つていたが兄を見つける事が出来たが理香を見つける事は出来なかつた。

あいつのバイト先が分かつてそこから家に帰る時は違うルートを使つて帰るし、誰につけられてもバレないように途中で姿を消す。でもあいつの警戒心もだんだんとけていつて、あいつが住んでいる――理香が監禁されている場所が分かつた。

あいつの警戒心が薄れていつても下手に動けば俺が理香を探している事がばれる可能性もある……。だから慎重にあいつの様子を伺

いながら理香を助けだす時を待っていた。

そしてあいつがその幸せに溺れていつて警戒がかなり緩くなった時に理香との接触を図ろうとした。

あいつがホストをやっているのは知っていたから何人かの風俗の女を用意し、計画を実行する日あいつを足止めさせる計画を立てた。怪しまれないように馴染みの客としてずっと前から用意していた。しかもそいつらはかなりあいつに金を使う。まあ、全部俺が用意した金だけだな……。だからあいつはその女共を蔑ろに出来ない。そしてお前がそいつらの相手をしている隙に理香を奪還する。

あいつは自分が稼いでいると思っっているみたいだが全然違う。全部俺の金。それで贅沢が出来ているんだぜ？お前は全然自立出来てねえんだよ。所詮ただのガキだ。

金を女共に渡す理由はある。あいつを足止めさせる事の他に、理香にきちんとした暮らしをさせるためでもあった。

そしてその前日、いつものようにあいつが出ていってから理香が監禁されているであろう部屋の窓を見ていた。すると、いつもは開かない窓が僅かに開いた事に気づいた。

もしかしたらあいつが不信に思って家に帰って来たのか！？と思っただけで焦っていたがどうやらそうではなく、理香が少し顔を覗かせた。今までだったならそんな事なかったのに……。理香に何か変化があった？それとも今までは出来なかったが拘束が緩くなって出来るようになったのか？

理香に声をかけるかかけないか迷う暇もなく、気づいたら勝手に声が出ていた。

「理香……！」

自分でも驚くぐらい悲鳴のような声だった。それだけ自分が理香に会いたいと思っっていたのかを改めて思い知らされた。

やっと会えたという事がどうしようもなく嬉しくて……。本当はこんなに声を出したら怪しまれるのは分かっているのに。自分が冷静な判断が出来ないぐらい、それだけ理香に溺れてる。

「い、つき……？」

俺を見つめ返した理香は俺が知っている理香よりもやつれているように見えたが、色香が漂っていた。

それだけあいつに抱かれてるって事か……。そう思うとどうしようもなくイライラして心が荒れた。

理香は俺に会えた事に複雑な顔をしていた。

俺に会えて嬉しくないのか？こんなに会えた事が嬉しくて身を焦がすような思いをするのは俺だけ？

今まで奪い返すつもり満々だったその気持ちが揺らぐ。でもそんなのは一瞬だけ。

何があつたって理香は俺のもの……。例えその事によって理香が悲しむような事があつたとしても。でもやっぱり理香には悲しんで欲しくない……。だからダメな所があればできる限りは直そうとは思ってはいる。理香がそんな顔をする原因は何だ？もしかしてあいつか……？

「理香、必ずそこから助け出してやるからな」

本当は周りに怪しまれないようにもう少し声を小さくするべきだったが、今はそんな事を考えている余裕がなかった。それだけ俺が理香を切望しているという事だ。

理香が監禁されている家のドアには何重にも鍵がかけられていて、取るのにすごく苦勞しが、理香に触れられるのならそんな苦勞は軽いものだった。

家の中は物が少なく片付いていた。そして奥にある部屋だけが不自然に鍵がかかっていた。

トントント

「理香……っ」

焦燥感に駆られたような声になったのが自分でも分かる。

「……斎」

俺の声に応えてくれたのにそれはとても弱々しい。

「今すぐに出してやるからな！」

そう言つて鍵を開けようとしたが理香がそれを拒否した。

「お願い……、もう私の事は忘れて」

「は？何言つてんだ！」

「お兄ちゃんをこんなふうにしてしまったのは私なの！だから私にはお兄ちゃんと一緒にいる義務がある！」

「何だよそれ！あいつはもともと狂つてんだ！あんな奴切り捨てろ！」

「……」

「あいつとこのまゝいてどうなる？それであいつは普通に戻るのか？そんなわけねえだろ？このまゝじゃお互い墮落するだけだ！」

「でも……っ」

「もういい、俺はお前を引きずつてでもここから出してやるからな！」

そう言つて俺はすぐに鍵を開け始めた。

ガチャガチャと音がするだけで鍵が開く気配が全然ない。

「ち……っ！」

仕方ない、明日プロに呼んで来てもらつて改めてやり直すか。

「齋……」

今まで黙っていた理香がいきなり言葉を発して、俺は作業を中断した。

「私……、齋に付いて行くよ。このまゝ一緒にいたつてお兄ちゃんのためにならない事は分かつてるから……」

決意のこもった声じゃなかった。まだ何かに迷っているようなそんな声だった。

例えそうだったとしても俺は理香をここから逃がす……、あいつから理香をさらつて行く。

「だからお願い……。1日だけ待つて」

その声色は兄との別れと言うよりも恋人との別れを惜しんでいるような切なさが含まれていて、嫉妬で心が爛れるような感じがした。

「……分かつた」

本当は1日でも早く理香を早くここから連れ出したい……。だが今までの行為は軽率すぎた――そう冷静に考えている自分がいた。本当はもっと計画を練って実行するはずだった。だが、理香に会えた事で今まで抑えていた気持ち溢れ出して自分の感情がコントロール出来なくなっていた。

今回はあいつと鉢合わせならなかったが、もしかしたら鉢合わせしていたかもしれない……。そうすれば今までしてきた事が全てパーだ。

ちゃんと計画を立ててから明日は来る――。あいつにばれないように、そしてあの男がもう理香に近づけないようにしねえとな。

そしてある計画のためにいろいろ準備した。はつきり言って1日で準備するのはしんどかったが、もともと近々実行しようと思っていたからなんとか間に合った。

その計画とは――あいつを交通事故に見せて殺す事だった。

あんなに早く帰って来るのは予想外だったが、最後には計画はきちんと果たせた……。

あいつは最期に俺の真意を見破ったようだがもう遅い。最後の最後までがくあいつの姿は実に滑稽で笑えた。

泣いている理香を抱き締めながら俺は口角が上がるのを抑えられなかった……。

――どんなにもがいたって最後に笑うのは俺だ。

「くくつ、あははははははははは！」

「41」終焉

”木下魁人” そう彫られている墓の前に立っている少年がいた。高校生ぐらいの年頃に見える。

「……久しぶり」

そう言って少年は腰を下ろした。

墓には花が置いておりすでに線香も立ててあった。この日は木下魁人の命日だった。

「あんたが邪魔だと思っていた人物はこの世から消えたよ。いつでも俺が消したんだが」

そう言って少年は歪んだ笑みを墓石に向けた。

「これでやつと理香と2人で暮らせる……」

うつとりと言う少年だが、その目には狂気が宿っていた。

「もうここに来る事もないし、来る必要もないか」

所詮ここにあるのは亡骸であってその人の魂や思いなんて欠片すらない。墓なんてただ生きている者が自己満足で作っているだけだと彼は思っていた。

死んでしまつて骨だけになった、かつては人間だった物を埋めたところでなんの意味もない。ある意味滑稽だ。

でも少年がここに来たのは意味があった。それはこの墓に眠っている抜け殻にさよならを言いに来たのだ。

「さよなら……」

そう言って少年はここを去った。そしてここに来る事は2度となかった――……。

家に帰ると目を真っ赤に泣きはらした女性がいた。

「まだ泣いてるの？」

「……っ。強いね、あんたは」

もうあいつが死んで1週間になる。仕方ない事だと思うが、自分じゃない男の事で泣く事にイラだっていた。

いい加減に泣きやめよ。俺以外の男の事なんて考えるな。――そう言いたい俺は世界で一番そんな事を言う資格はない。

俺は愛する女の背中をさする事しか出来ない。

「ありがとう……。私にはもうあんたしかない」

そう言つて女は俺にしがみついた。それが恋愛感情ではないという事ぐらい分かっている。でも頼りにされているという事で嬉しいのも事実だ。

でも実際、俺は彼女を支えられるわけじゃない。まだ高校生の俺が大人である彼女を支えられない事なんて百も承知だ。

「泣きやんでよ、折角邪魔者がいなくなったのに……」

小さい声でそう呟いただけなのに彼女にはしっかりと聞こえていたようで、肩をピクリと震わせた。

「……邪魔者って？」

”何を言っているか分からない”そういう表情をしていた。

でもさ、本当は分かっているんだろ？なぜなら彼女の目は恐怖の色を帯びていて疑惑の色も混ざっているからだ。

「分からない……？俺があいつを殺したんだよ」

「……っ！どうしてっ！」

彼女は大きく目を見開いて信じられないという顔をしていた。

「どうして……？本当に分からない？」

「だって、だってあの人はあなたの……っ！」

「俺の父親……、でしょ？」

彼女が息を呑んだのが分かった。それだけ俺は冷たい表情をしていたと思う。

「……でも俺にとってあいつは邪魔者意外のなんでもない」

涙を流しながら目は絶望の色に染まっている。そして父親を邪魔だと言った意味を悟っているんだろう。

「俺はね、あなたを愛しているんだよ……母さん、いや理香」

「……っ」

なんとなく分かっていただろ？例えその疑惑を打ち消しても心のどこかで分かっていたんだろ？俺が理香を愛している事を――――……。

「そもそも俺の父親はあいつなの？」

そう言った瞬間、理香の体がビクツと反応した。

「あ、ああ」

なぜそれを……？そういう顔をしていた。

確かにそうだ。戸籍上でも俺はあいつの息子になっているしな。

母さんが俺を産んだのはまだ16歳の時。高校2年の時に教師だったあいつとで婚したということになっている。なぜ”なっている”かというと、俺は父親がどちらか分からない子だったからだ。

普通なら付き合っている奴の子じゃなかったらおろす確率が高いだろう。だが理香の性格上子供をおろす事ができなくて、また親が反対しなかった事から俺を産む事を決めた。

あいつにとつては複雑な心境だったに違いない。自分の子でも嫉妬しそうなのにまして他の奴の――、憎い奴の子供かもしれないなんて……。だがあいつはそれでも理香を手に入れたくて自分の子だと言い張って理香と結婚し、俺が産まれた。

そして俺はあいつじゃない、もう1人の方――木下魁人に生き写しというぐらい似ていた――……。――。

でもそれだけじゃない。理香もあいつも知らない事があった。

「な、んで……、陸人がそんな、事……」

「別に誰かから聞いた訳じゃないし」

そう言って俺は勝ち誇ったように笑った。

理香の顔は恐怖に引きつっていた。

別にこんな顔をさせたいわけじゃないんだがなあ……。

「昔みたいに俺の事——って呼んでよ」

俺が理香の耳元で囁くように言うと、血の気が無くなったように理香の顔は真っ青になった。

理香は小刻みに震えながら有り得ないというふうな目を俺に向けた。

「それとも……昔みたいにお兄ちゃんとでも？」

そう言って笑った。多分それは理香の恐怖をさらに煽っただけだろうが。

「え……、え」

「俺の前世の名前は木下魁人。そして俺の父親の名前も木下魁人」

「そんな、ばかな事……」

「あるんだよ。でなかったら俺は誰だって言うの？ 魁人であった時の記憶もちゃんとあるのに」

そう……、だからあいつを殺した。確かに邪魔だったっていう理由ももちろんあった。だがそのほかにも理由がある。これはあいつへの復習……。昔の俺を殺した事への……。

「理香はこれからずっと俺と一緒にいるんだよ。拒否するなんて許さない……、いや、させないから」

「……っ」

「俺から離れようなんて考えたら……、これがどうなるか分かるね？」

そう言って理香の前で祖母であり母親である鈴香の写真をちらつかせた。

「何言ってるの……？ この人はあなたのおばあちゃんなのに……っ」
「そんな関係ないよ……」。だって昔、俺と理香を引き裂いたのだから。おまけにあいつにまで協力していた。まあ、俺が死んだ後に

かなり後悔してたみたいだが……。でも俺にとってはそんな事どうでもいい。邪魔者だった事にはなんら変わりはないのだから。今度理香と俺の仲を邪魔したら容赦しない。

「……分かった」

理香は諦めたようなそんな顔をした。

本当はそんな顔をして欲しくないんだよ。ただ……、理香に好きになって欲しかっただけなのに……。

ごめんな、理香。こんな愛し方しか出来なくて……。理香の幸せを望めるような男になれなくて。

「もう……、何があっても逃がさない」

一生俺の腕の中で――――。

「41」終焉（後書き）

今まで読んでくださってありがとうございますm(_____)m
改めて見ると、誤字脱字が酷いこと…。本当にすいません(x____
x;))

最後のおちは最初の方から決めていて、本当にはじめは兄妹の禁忌をだらだら書いていく予定でしたが、次に三角関係にしよう！と思って出てきたのが齋でした。そして齋とくつつけようかなーと思っていたのですが、それじゃあ全然”禁じられた果実達”にならないと思います、この結末にいたりしました。

グロいシーンやドロドロとしたシーンもあり、気分を害された方本当にすいません(ノ_____) 最後までお付き合い頂き、ありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2118h/>

「禁じられた果实達」

2010年10月8日13時09分発行